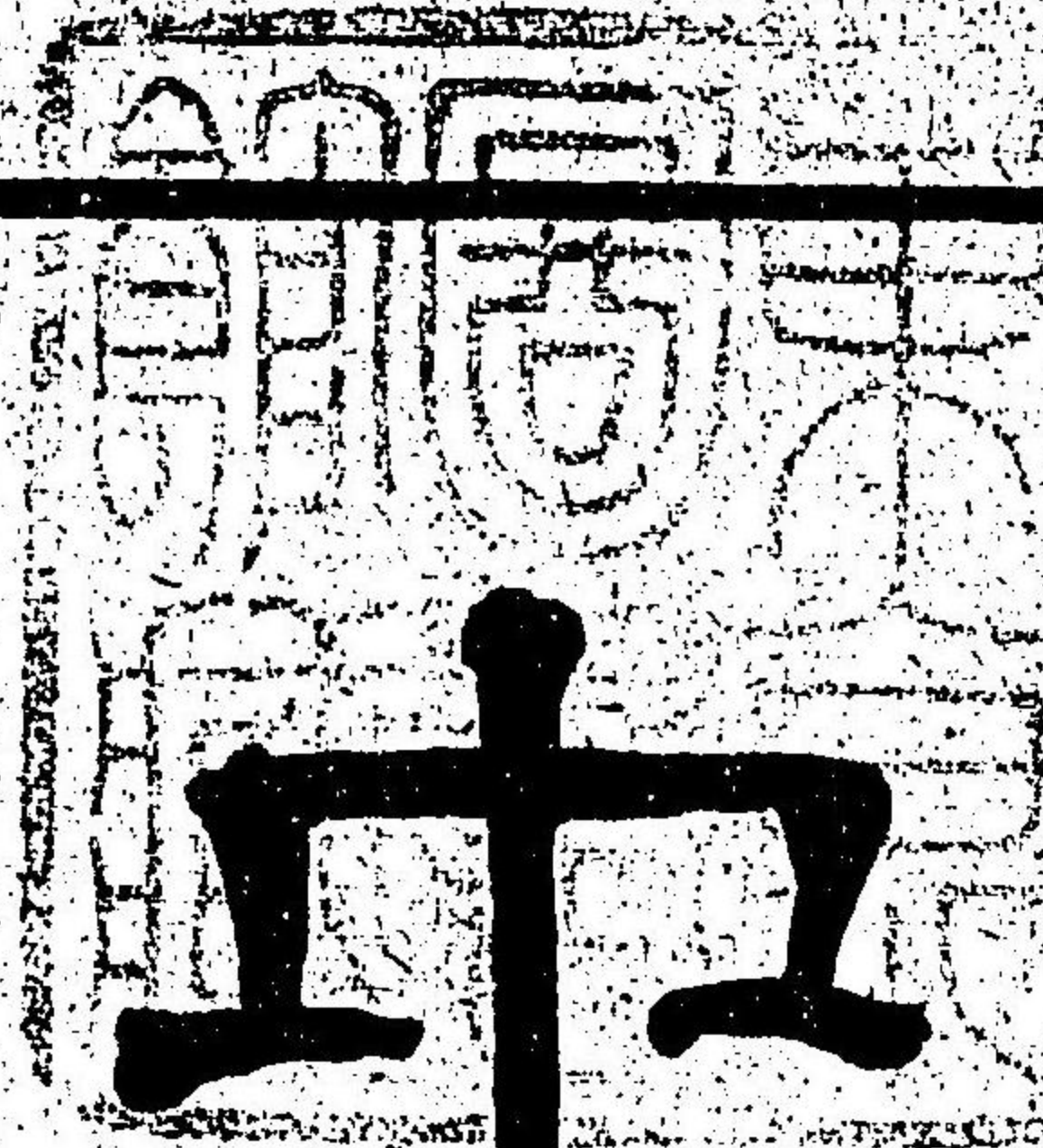


1852

17
300

No. 20/1887



廣池千九郎編述

中津歴史

明治二十四年十二月發行

中津歴史序

世には外を知りて内を知らぬ者多かり外國の學と學と
とて我國の學を學とせざる者これなり我國のことも不
知して何と目的として我國の爲に盡すことを得んや豊
前國に廣池主あり夙くより其國の事蹟の世に湮滅せん
ことを愁へて公務の餘暇明治二十一年の夏より同二十
三年の冬まですべて三年の間西にかけ東にはりて廣
く舊記を探り偏く古老に問ひ上世より明治の今に至る
までありと世のこと々々拾ひ集めて上下二卷として中
津歴史と題せられたり其いたづきいふを更なりこれ

を見るに先その國の沿革その地の形勢を述べまた上世
中世近世新世やわかちて政治教育宗教人情風俗習慣よ
り凶年大火戦争に至るまで遺すことなく漏すことあ
記さきたる此書よ世にめてたき書よして我國を思はん
人の讀まざば有べからぬ書なり廣池主わか國を思ふ志
深くてこそあゝるめてたき書はなりけれ我國を思はぬ
人のあし得べきことあるは

明治廿三年十二月

正七位 渡邊 玄包

中津歴史序

前豊ノ州タルヤ九州ノ北端ニ居リ北ハ周防灘ニ面シ南
ハ南豊北筑ノ山嶽ニ接シ東西二十里ニ足ラズ南北六七
里ヲ越ヘズ其州既ニ偏小豪傑ノ士據テ以テ驥足ヲ伸ブ
ルニ足ラズ是以テ古來英雄割據ノ世ニ在テ南豊大友ノ
併ス所トナリ防州大内ノ蠶食スル所トナリ未ダ一大諸
侯本據ノ地タルヲ得ズ獨リ黒田孝高我中津ニ居リ城池
ヲ設ケ關ケ原ノ役ニ子息長政ノ徳川氏ニ從テ精兵驍騎
多ク東征スルニ拘ハラズ居留ノ寡兵ヲ以テ州内ノ諸豪
ヲ討服シ南豊ニ出テ大友ノ大軍ヲ破リ筑後ニ入テ立花

ヲ降シ加藤清正ト共ニ薩摩ニ入ラントシテ事平定ニ歸
スルガ如キハ我中津人ニ在テ心膽ヲ張大ナラシムルニ
足ルモノナリ徳川氏治世ノ後ナ小笠原氏中津ニ居リ奥
平氏又代テ之ニ居リ以テ廢藩置縣ニ及ブ始メ小倉縣ニ
屬シ後ナ大分縣ニ合セラレテ今日ニ至ル君相ノ賢愚文
學ノ興廢名士宿儒ノ死生唯掌大ノ一地方ニ其遺蹟ヲ殘
スニ止ラス延テ國內ニ及ビ傳ヘテ後世ニ遺スベキモノ
大概散逸文書ニ存シテ後世ニ傳フルモノ無シ廣池君諸
書ニ據リ口碑ニ問ヒ故老ニ聞キ家記日録纒ニ取ルベキ
アレバ採擇ノ勞ヲ惜マズシテ中津歴史二冊ヲ著シ往古

以來我中津ニ發作スル所ノ歴史上ノ事實ヲ集蒐シテ以
テ刊行セントス余廣池君ト未ダ面識ナシ然レモ中津ハ
余ガ生誕ノ地ニシテ其ノ歴史アルハ余ノ最モ喜ブ所ナ
リ廣池君ノ著ス所悉ク事實ノ眞確ヲ証シ難キモアル可
キモ余ハ廣池君ノ勤勉精敏能ク此著ノ完成ニ至レルニ
敬服スルモノナリ故ニ聊カ所感ヲ記シテ序文ニ代フ

貴族院議員

明治廿四年五月

小幡篤次郎記ス

中津歴史

例言

一地方歴史ノ効用ニアリ曰ク國史編纂ノ材料ニ供スルコト曰ク其地方人民特別ノ經歷ヲ知ルヲ得ヘキコトサテ其第一ニ於テハ凡國史編纂上必要欠グベカラサルモノハ其國內ニ於ケル州郡都邑ノ精確ナル史志ニ在リト雖從來本邦ニテハ未此種ノ目的ニ適スル真書甚鮮ク從テ國史ノ材料ハ實ニ不完全ヲ極メタリキ次ニ各地方人民ハ祖先以來皆其地方殊別ノ境遇ヲ經過シ進ミ來リタルモノナレドモ地方歴史ノ乏シキコト前述ノ次第ナルヲ以テ更ニ其過去ノ有様ヲ辨知スルコトヲ得ズ有志ノ士ハ只僅ニ曖昧ナル地方ノ軍書類ヲ繕テ其一斑ヲ窺フニ過ギザリシ史學ノ不面目モ亦極レル哉去レバ完全ナル地方歴史ノ著述ハ實ニ今日本邦史學ノ改進上甚重キヲ覺ユルナリ今予ガ中津歴史素ヨリ地方歴史トシテ斯ル重要ナ

ル價值アルニアラサレトモ若後ニ次ヲ出ヅル所ノ地方歴史ノ先導者タル
ヲ得バ誠ニ望外ノ幸ナリトス

一予明治二十一年夏將ニ學ニ京ニ遊ハント欲ス適々腦病ヲ發シ在昔數月
ヲ經レトモ更ニ癒ヘズ遂ニ醫ノ命ヲ以テ一タビ學ヲ廢セザルベカラサル
ニ至ル然ルニ予多年本書編纂ノ宿志アルガ故ニ今此時ヲ以テ須ラク之
ニ從事セヨトヲ想ヒ起シ全年十月病漸ク間アル時ヨリ公務ノ余暇之ニ
從ヒシガ其始ニ當リテハ材料甚鮮少ニシテ且纔ニ得タル處ノ古文書類
ハ多ク妄誕ナル牽強附會ノ說ノミヲ以テ之ヲ盈タシメタルガ故ニ其眞
偽ヲ判シ闕疑ヲ推覈スルニハ頗困難ヲ極メタリ然レモ當時熟々謂ヲク
享保二年後眞平家ノ部ニ至ラハ必材料富贍ナラント豈圖ラソヤ次テ其
時代ニ至ルニ及テハ藩府ノ史記諸家ノ文書往々散逸シテ其乏シキヲ預
想ノ外ニ出テ殊ニ此時代間ニ係ル著書ノ如キハ嘗テ亦之ナク實ニ本書

ヲ以テ其矯矢トナスカ故ニ困難ノ度却テ前日ニ倍蓰シ本書著作ノ時日中
其三分ノ二ハ方ニ此ニ費セリ斯クテ諮詢推究確實ノ考證ヲ得ルニアラ
サレバ一事實ノ記載モ輕々シク之ヲナサハルガ故ニ最初起筆ノ當時ニ
リ今脱稿ニ及フマデ前後凡二十七月八百有余ノ日子ヲ閱セリ仍テ記載
ノ事實ニハ大概誤謬ナキヲ期ス

一然レモ予ガ不才ナル既往三歳ノ日月中敢テ怠ルニアラサレトモ尙幾多ノ
重要ナル事實ノ穿鑿ヲナシ遂ケサル處アリ何ソヤ小笠原氏以前ニ係ル
全体ノ材料ニ於テ未甚不完全ヲ感シ且與平家ノ部ニ於テモ不足ヲ感ス
ル處アレハナリ但小笠原家以前ニ係ル全体ノ材料中往古ニ屬スルモノ
原三氏治世間ノ分ノ如キハ蓋予ガ勉強ノ力ニ因テハ尙幾多ノ材料ヲ小笠
集スルヲ得シナラシムルハ何トナレハ現ニ黒田氏ハ福岡ニ尙細川氏ハ
小笠原氏ハ安志ニ存在スルモノナレハ若各之ニ就テ調査スルハ或ハ
其目録ヲ達スルヲアルハ實ニ恐悞ニ堪ヘサル處也且與平家ノ部ニ此重要
書類ハ多ク欠ケテ不足セリ故ニ天明饑饉ノ狀ナド毫モ知ルニ由ナシ請

フ他日後篇ヲ編ムニ當リテ必カヲ此ニサレハ斯ル事實ノ探鑿ヲ盡シテ
マデ及シテ以テ本篇ヲモ増補スヘシ
材料完備ノ日ヲ待チ而シテ後始テ完全ナル中津歴史ヲ編スルハ予ガ本
志ナリト雖然レモ本書ノ出版ヲ促カスモノ日ニ多ク且又古書類ノ欠乏
既ニ前述ノ次第ニシテ加之地方未史學的思想ノ乏シキガ爲或ハ貴重有
益ナル材料ヲ藏有スルモノモ徒ニ種々ナル畏懼ノ念慮ヲ抱テ之ヲ
出スヲ肯セザルモノナキニシモアラザレハ這回遂ニ一先之ヲ印行スル
コトセリ是一ハ衆望ニ從フト一ハ本書ノ刺撃ヲ以テ來發ノ材料ヲ發見
スルノ媒介トナサント欲スルニアルナリ請フ世上ノ君子眞理ヲ後世ニ
傳ヘント欲セバ予ガ誤謬ノアル處ヲ指示シ且予ガ知ラント欲スル處ノ
數多ノ材料ヲ世ニ公ニセヨ

一眞正ノ歴史トハ年代記傳記系圖等ヲ其材料ニ供シ地理學原語學人類學
等ノ學理ヲ之ニ應用シテ人事社會ノ變遷榮枯ニ關スル事實ノ系統ヲ明

ニシ以テ其複雜紛糾ヲ極ムル人類ノ行迹ニ就テ一定不動ノ法則アルヲ
示スモノナレハ本書ノ如キ編年體ノ記錄ハ只歴史ノ材料トナスベ
キノミニシテ未直ニ之ヲ以テ眞ノ歴史ト稱スルヲ得サレ然レモ前條
既ニ述フルガ如ク今日ハ未我中津地方歴史ノ材料甚不足ナルトキナレ
バ寧ロ不完全ナル材料ヲ基本トシテ鹵莽ノ僞史ヲ作ルヨリハ却テ學術
的ノ事實ヲ批評審查シテ之ヲ年月ノ順序ニ排列スルノ優レタルヲ感シ
タルガ故敢テ本書ノ史體ヲ斯クノ如ク致セルナリ學術的ニ著述セル眞
於テモ近世漸ク世ニ出テタル位ニシテ我日本ノ如キニハ自下僅ニ二三
部ノ小著ヲ見ルニ至リシニ過キズ況ヤ材料不足ノ中津今日ノ狀況ニ於
テテ請フ眞正ノ史ハ之ヲ他日ニ讓ランノミ

一歴史ハ過去ニ屬セル終局ノ事實ノミニ關シテ記載論議スルモノナレバ
現時ノ政治及未世上ノ論議其局ヲ結ハサル事件ノ如キハ之ヲ記スルニ
適セズ故ニ歐羅巴ニテ「ルネサンス」ノ如キハ千八百六十四年以前ニ屬スル
件ハ自由ニ歴史家ノ記載論議スルヲ得ルコトシ其他ニモ斯カル

制限ヲ定メタル國アリト實ニ目下ノ政治ニ屬スル範圍即政府ノ法律ヲ適用シテ言論ヲ制限スル時ト過去ノ歴史ニ屬スル範圍トニ判然分界ヲ定ムルハ我日本ニ於何トナレハ是等ハ或ハ政府ノ法律ニ觸レ或ハ記載評論ノ際誤テ謬僞ヲ傳ヘ偶然無罪ノ人ヲ毀害スルノ恐アレバ本書ノ如キ實事ヲ寫シ直筆ヲ揮ハンコヲ期スル處ノ學術的著書ニ於テハ殊ニ勉メテ之ニ注意シ公論決着ノ事實ノミヲ收録セザルベカラサレハ本書中近世ノ終及新世紀間ノ記事ノ如キハ或ル處ハ精密ニ又或ル處ハ疎畧ナレハ是レ皆己ムヲ得サルニ出ヅ

一 予ハ本書材料ノ蒐集ニ際シ前後予ガ爲ニ周旋盡力セシ扇城ノ士林ニハ深ク謝スル處ナレハ高木輝原岡平泉山口廣江重松義隆古宇田姑山曾沼新兒嶋源二鈴木開雲新庄關衛和田睦叟山崎源九郎原田直好大田某等諸先輩ノ好意ヲハ特ニ最モ鳴謝スル處ナリ

一 書中ノ文体ハ主ニ漢文体ヲ用フト雖間々他ノ文体ヲ交フル處アリ是本

書ノ如キ實事上ノ記事ハ彼詩歌小説ノ如ク只文章ノ巧妙ヲ以テ時好ニ投スルモノトハ自其趣ヲ異ニシテ其目的專事實ヲ精確ニ直寫セシコトヲ勉ムルモノナレバナリ

一 書中他書ヨリ引用セル漢文及古体公用文等ノ如キハ問々之ヲ普通ノ時様文ニ改作セリ是讀者ヲシテ解シ易カラシメントスルニ出ツルナリ

一 本書ハ中津ヲ以テ主トナスガ故ニ黒田細川小笠原與平四氏ノ治世間ハ其藩内ノ出來事ヲ收録シ古代及維新後ハ中津モ亦唯一都邑タルニ過キサルヲ以テ其記事ハ獨市内ノ事ノミニ關ス

一 本書ハ人物ノ名ヲ呼フニ諱名及通稱ヲ混交セリ是一ハ古人ノ諱ハ多ク之ヲ搜リ得カルト又一ハ二三老人ノ忠告ニ因リ與平家ノ部ハ却テ通稱ヲ書スルノ讀者ニ便ナル所以ヲ悟リ加之維新前ノ人物ノ如キハ他日皆通稱ヲ以テ其名トセシガ故ニ此等ハ更ニ通稱ヲ用フルノ便宜多キトナ

察シ敢テ斯ノ如ク兩名ヲ混用セルナリ
 一人名地名物名等ノ聞キ慣レサルモノ及和歌書簡類等ニハ上下ニ括弧ヲ施シ或ハ平假名交リニ記載セシ處抄カラズ是ニ讀ミ易カラシメテ希フノ意ニ出ヅル也

一本書世紀ノ分ナ方ハ本邦ノ歴史ト大ニ其年代ヲ異ニス然レモ是事實ノ聯絡上止ムヲ得サルニ出ヅルモノ也
 一天災火災流行病用金年賦等ハ民生ノ休戚ニ關スル最大事件ナレバ其著シキ記事ヲ有スル件トシテ本文ニ収録シ其他ノモノハ讀者ヲシテ彼此對照一目瞭然タラシメメカ爲卷末ニ一覽表ヲ附シテ此ニ大小ノ事災ヲ網羅セリ但小祝ハ往時小倉領ナレモ中津ト密接ノ關係アルガ故表中其記事少カラズ

一 中津盛衰ノ沿革ヲ括叙シテ之ヲ卷尾ニ掲ケタレハ讀者本文ト對照シテ

聊カ悟ル處アレ

明治二十三年十二月

編者廣池千九郎 識

一本書既ニ成リ尙事實ノ精確ヲ求メント欲シ特ニ與平家ノ部ニ係ル校正ヲ村上田長君ニ請ヘリ君ハ元秋月ノ藩士ニシテ本藩村上ノ家ヲ嗣キ身醫職ニアリト雖廣ク和漢ノ經史ニ通シ卓眼達識事体ニ明ニ嘗テ藩政ニ參與セシトモアリ且尤藩事ニ關シテハ公平無私ノ持論ヲ有スルトノ聞ヘアリテ本書ノ校正ヲ請フニハ藩中復君ヲ措テ他ニ其人アルイナシ君懇切ニ予カ請ヲ容レ則與平家ノ部ニ於テ人名事實ノ誤謬凡十有余處ニ訂正ヲ加ヘテ本編ヲシテ殆完璧ニ至ラシメタリ然レモ更ニ我中津ノ出身ナル東京三田ノ小幡篤二郎君ニ請フニ本書全編ニ對スル評論及檢閱ヲ以テセリ時偶帝國議會ノ開設ニ際シ君日夜寸暇ナキニ拘ハラズ直

ニ予ガ請ヲ容レ終ニ明治年間ノ部福澤諭吉傳ノ下ニ一ケ處ノ訂正ヲ與ヘラレタリ而シテ其他ニ毫モ加筆セル處ナキハ予ノ聊隔靴搔痒ノ感ナキ能ハサル處ナレトモ蓋歴史ノ書ノ如キハ其全篇ヲ校閲シテ誤謬ノ悉皆ヲ訂正セントスルニハ校閱者モ亦必夥多ノ材料ヲ集蒐シテ反覆審查十分ノ考證ヲ得ルニアラズンバ事實ノ眞否ヲ正ス可能ハザルモノナルガ故ニ若此方法ニヨリテ歴史ノ校正ヲナスモハ校正ノ事業モ亦實ニ僅少ノ日子ヲ以テナシ能ハサルヲ信ス今村上小幡兩君ノ本書ヲ校閲セラレ、ヤ兩君共ニ素ヨリ業務繁忙ナルノ故ヲ以テ敢テ前述ノ如キ方法ニヨリテ校訂シタルニアラスンテ只書中ニ於ケル最大不都合ノ点ノミヲ訂正セラレタルニアルナレバ讀者請フ焉ヲ諒セヨ

明治二十四年八月

編者再識

引用書目

書目 中出版印刷等ニ係リテ既ニ世ニ公ニナリタル
秘書類等ト知ルモノニハ○印ヲ附シ置テリ故ニ其他ハ皆寫本及ビ
チナヒルモノニハ△符ヲ附セリ

第一編

△渡邊重 豐前志 ○並河公 豐前地理小誌 ○矢津昌 日本地文學 ○
れ地文學 ○米國史 ○細川 日本形勢總覽 ○日本國勢一斑 ○農業
雜誌

第二編

△富永源 中津記 △加來元 中津譜誌 △中津稱呼考 △中津事蹟考 △
池記 宇佐郡記 △原田直 中津志 豐前志 ○日本國勢一斑 ○海内新誌
諸家ノ系圖 神社佛閣緣起 碑銘 ○和名鈔

第三編

中津記 中津譜誌 中津事蹟考 宇佐郡記 △中津川由來記 △
中津輿圖 中津志 中津稱呼考 豐前志 ○與羽觀蹟聞老誌
與村鑑 間居草菴記 天正慶長 當國元錄 諸家ノ系圖 神佛
緣起 碑銘 小笠原家藩士公私手簡類 小笠原家家中分限帳

第四編

○太政官 日本西教史 天主教佛國人、は、一、る、氏翻譯書類
 翻譯 宣教師佛國人、は、一、る、氏翻譯書類
 奧平家御家譜 藩史△倉成竜 奧平家御家譜編年叢林△寛文壬
 子録 以上四書ハ享保以前ニ係ル奧平家御家譜編年叢林△寛文壬
 平家々譜ヲ編ムルニ引用ス 〇小栗憲 豊繪詩史△倉成竜
 潜遺稿△福澤諭 舊藩情 廣池半時 杖騷動記△新庄關 租稅考 郡
 秘訟平賦均録○山著 筆のそさび 田賦門 記注撮要 秘問集
 兩役出張手扣 長崎御手宛書 新沼 藩兵出兵屆書扣 奧平家
 新舊家中分限帳 御手前百ヶ條 享保二 目附、郡、町、元、役所
 日記、及び救恤、諸觸達、揭示、士民賞罰、書類 奧平家 舊藩士手扣及手簡
 類凡五百通 此書類尤予ニ 諸家ノ系圖 碑銘
 大橋奇 増田遺稿 阿部 西南戦争手扣○海内新誌○交詢雜誌○
 男編 應太 山田小 中津市邑教育沿革○廣池千 新編
 田舎新聞○田舎新報 太郎編 中津士 手扣手簡類
 脩身用書 中津日田小倉福岡大分五縣布令達類 族山人

第五編

一右ノ外参考書五十余部アレヒ之ヲ畧ス而シテ右ノ引用書外ニ先輩古老
 ノ口カラ予ニ傳ヘシモノ極メテ多ク第四第五ノ兩編ノ如キハ此ヨリ出
 ツル處ノ記事殆三分ノ一ニ及ブ
 一予前ニ例言ニ於テ藩府ノ史記諸家ノ文書往々散逸セリト云ヒシガ其原
 因ハ中津ノ士族ハ夙ニ洋風ニ感化セラレ非常ノ果斷ヲ以テ玉石共ニ往
 事ヲ破壊セシニヨリ古文書ノ如キモ忽ニシテ分散セシメタリ又藩府累
 積ノ史籍ハ維新丸解ノ際汚吏某等之ヲ盜テ大坂ニ鬻キシト十年ノ役兵
 變ニ罹リタルト爾後保存ノ方法立タザルトニヨリテ殆悉散逸セリ中ニ尤
 惜ムベキハ祐筆岩崎佳藏調査セシ處ノ御家譜是ナリ此書ハ岩崎ガ天保
 三年五月ヨリ慶應三年三月迄公命ニ由テ前後三十六年間東西奔走ノ余
 新奇ノ材料ヲ蒐集シテ編輯セシモノナレヒ是亦悉雲烟ニ歸シ去レリ蓋
 該書ハ興平一家ニ關スル私記ニシテ藩史編年叢林等ト大同小異ノモノ

ナルヲ知ルト雖然レモ岩崎ガ三十余年ノ苦心ヲシテ水泡ニ屬セシメタルヲ想ヘバ豈慨然タラザラソヤ

一 舊藩町會所ノ書類ハ悉皆京町小畑利四郎氏 氏家號ヲ播磨屋ト云其先ハニ來リ世々名族ヲ以テ町吏ヲ勤ム維新瓦解ノ後中津町役場齒町會所ノ古書類ヲ舉テ皆之ヲ賣ル時ニ之ヲ購フタル處ノ商人將ニ大坂ニ齎ラサントスルヲ氏以テ憾トナシ遂ニ其商人ヨリ強求シ得テ今ニ於テ保存セ日カク家ニ保存セルモノナリト云真ニ美舉ト云ヘキ也
リ 目附郡、其他諸役所ノ書類及藩藏ノ舊記古書ノ今日ニ存在セルモノハ皆中津銀行ニ保存シアレモ其數甚少ク之ヲ原數ニ比スレハ殆其千分ノ一ニモ當ラズト云而シテ現存ノ書類モ速ニ保存ノ方法ヲ設ケサレバ亦久シカラズシテ散逸スベシ 西洋各國ニテハ英語ニテ「わーかいぶ」ト稱ス類ヲ保存スル也然ルニ我國ニテ往時ハ勿論今「わーかいぶ」ニ悉皆公文書日猶カ、ル組織ナキハ嘆スヘキコトナラズヤ
一 本書引用書中ニ就テ由來記典癡記字佐郡記ノ三書ハ鬼神妖怪ノ説ヲ交ヘタルガ故稍疑フベキ点多シト雖然レモ其記事亦信ヲ置クベキ處モア

リ只僧侶ノ手ニ成レルモノナル乎善惡ノ標準ヲ宗教的の道德ニ取リ之ニ適フモノヲ褒シ之ニ反スルモノヲ貶シ其記事公平ヲ失スル所アリ其他引用書中皆多少ノ誤謬欠点アリト雖特ニ神佛ノ緣起ノ如キハ妄誕不稽ノ説甚多ク田舎新報モ普通ノ新聞紙ト同ジク其記事公平ヲ欠ク處アリ 本書ハ此等ニ向テハ殊ニ注意シテ採擇ヲナセリ

中津歷史目次

卷之上

第一編……………豐前國沿革及形勢一斑並中津形勢一斑

第二編……………上世紀……………自太古至天正年間

第三編

第一章……………中世紀第一……………黑田氏治世

第二章……………中世紀第二……………細川氏治世

第三章……………中世紀第三……………小笠原氏治世(八万石)

第四章……………中世紀第四……………同上 (四万石)

卷之下

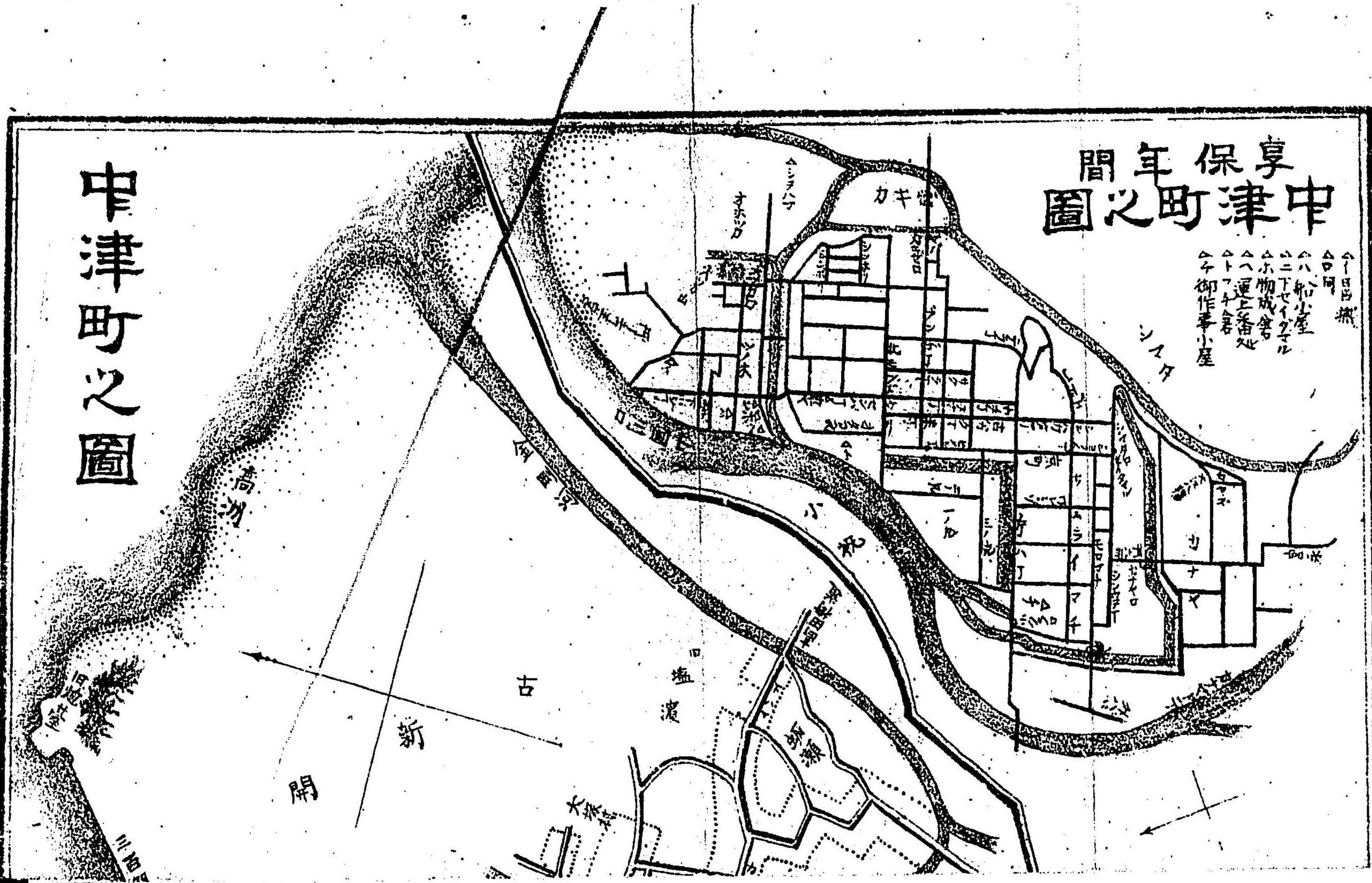
第四編……………近世紀……………奧平氏治世

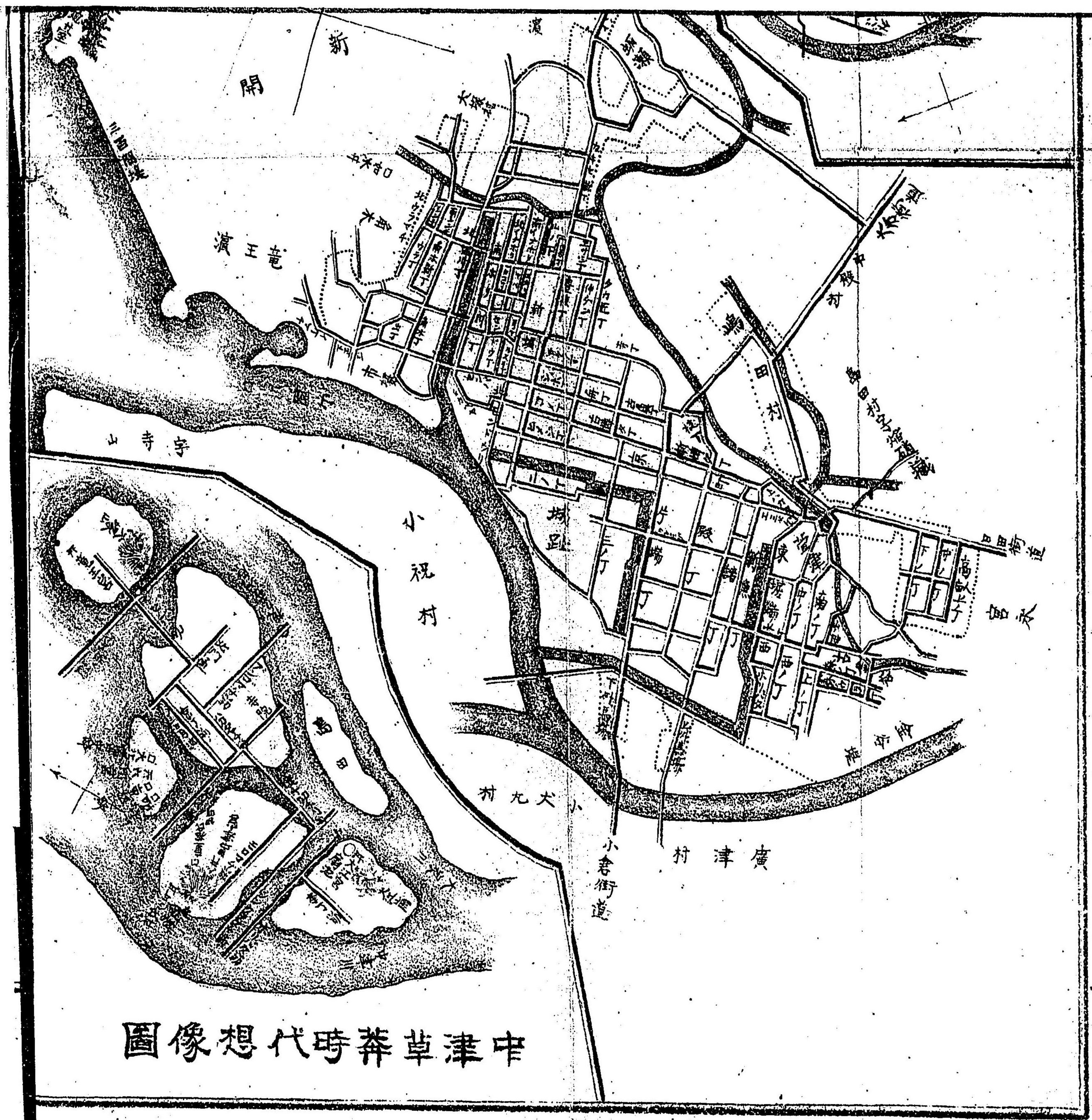
第五編……………新世紀……………明治年間附奧平家武備師範方系圖及中津盛衰沿革總叙

中津町之圖

享保年間
中津町之圖

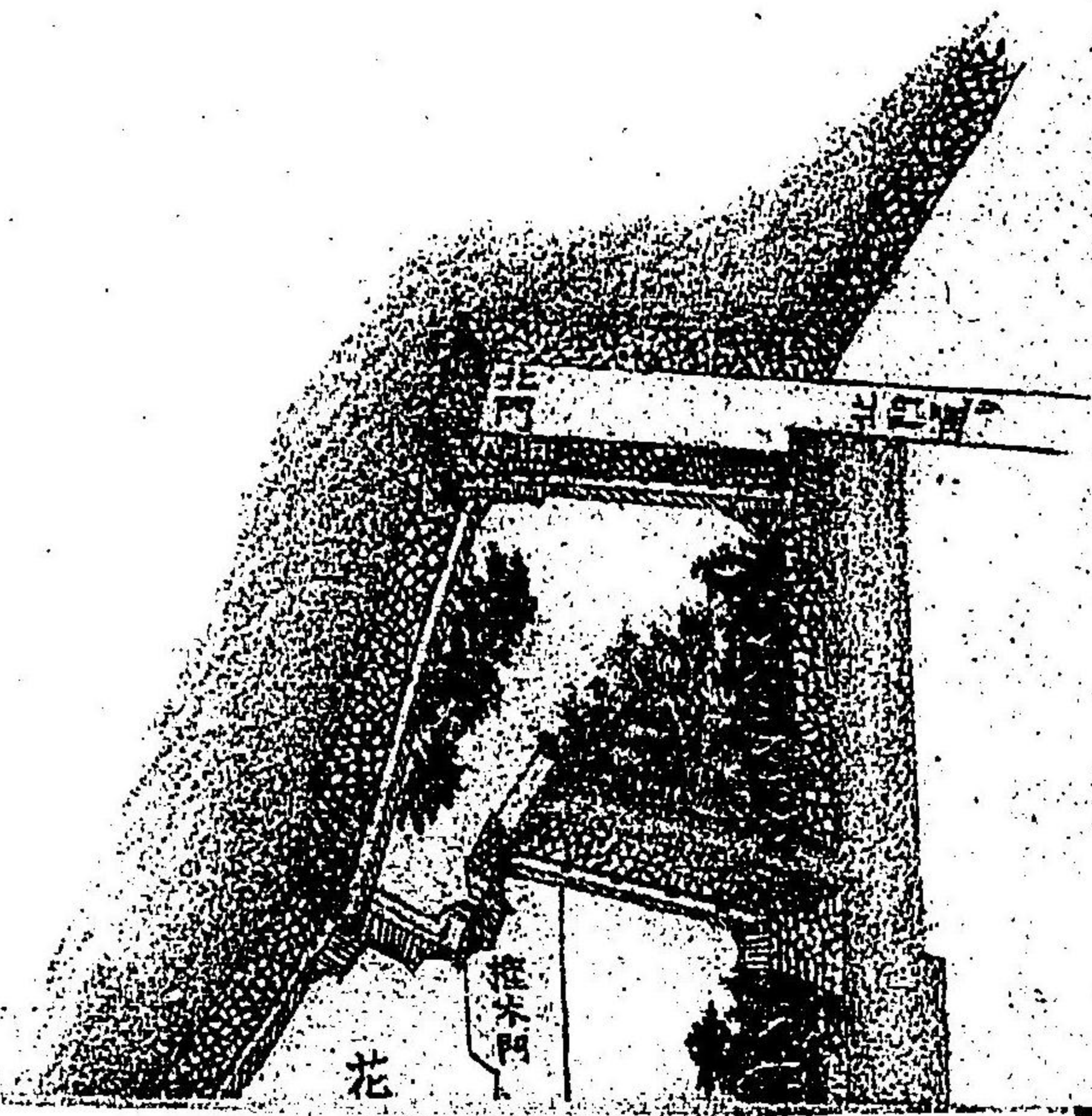
今馬場
合町
八船小屋
三丁イイ
小物成屋
八運上番地
今御作事小屋





中津草莽時代想像圖

中津城之圖



中津

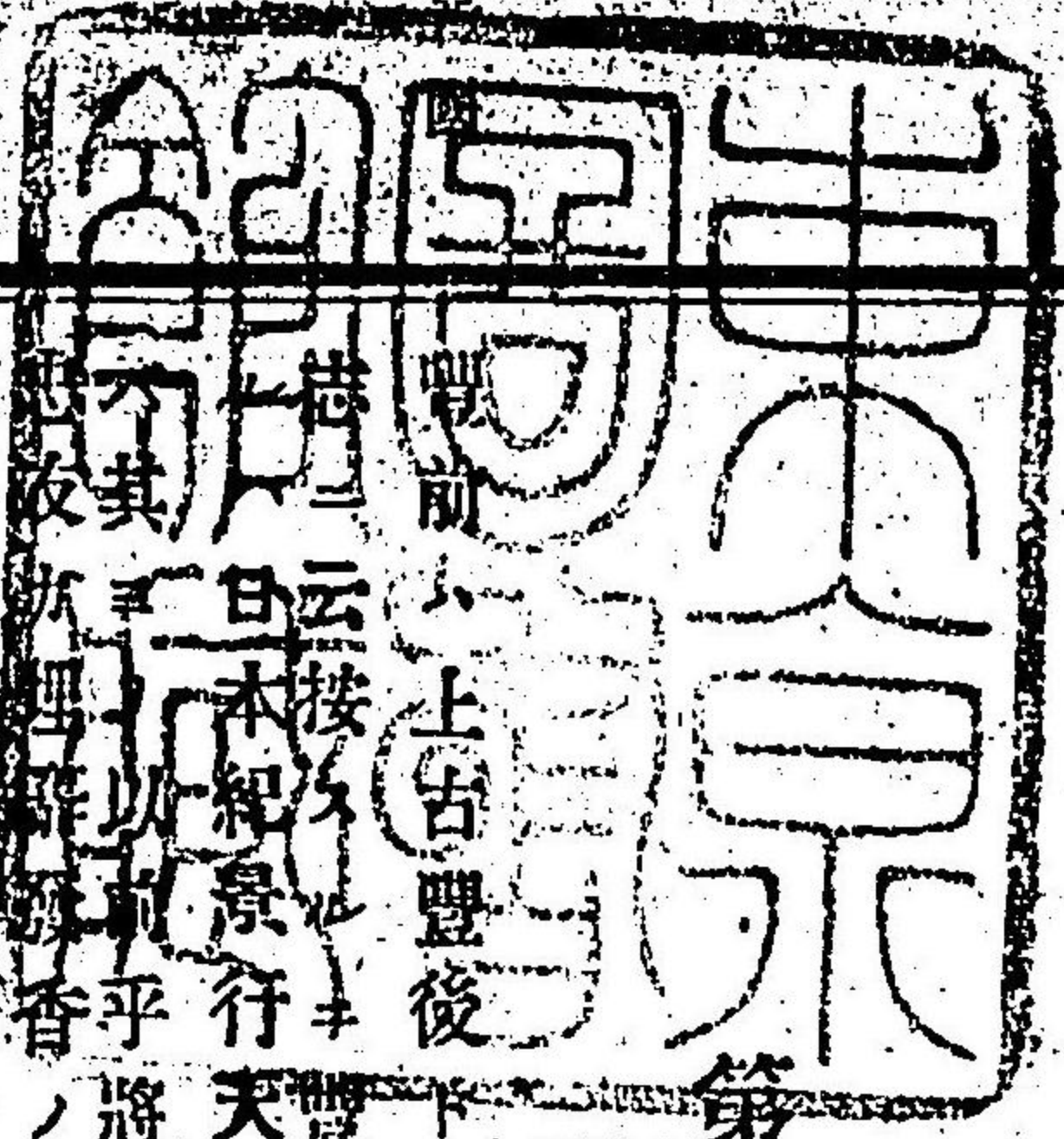
當年老贊頗豪英
苦肉謀成破倭盈
物變星移何所見
空傳犬丸扇城名

題扇城圖 松瀨生

鞠

中津歷史上

東京 小幡篤次郎校閱
中津 廣池千九郎編述



第一編

豐前國沿革及形勢一斑并ニ中津形勢一斑

豐前ハ上古豐後ト一國ニシテ單ニ豐國ト稱セシガ後地勢上之ヲ前後兩部前
豐前ト云接々トテ豐國ノ前後ニ分レシハ何ノ世ニカアラム先國史ニ見ヘタ
日本紀景行天皇十二年ノ下ニ「遂幸筑紫到豐前」トアルヲ始トス然レ
不其以武乎將タ分レシハ後ナレド前ヘ及シテカクハ書ケル手穂井田
香ノ大寶二年ノ戶籍ニヨレバ猶古ヨリゾ分レタルケム云々
ニ分チ而シテ更ニ豐前ヲ八郡四十三郷和名鈔ニ云田川郡ハ香春、雄怡、位登、
城田、企救郡ハ長野、蒲生、京都郡ハ諫
山、本山、刈田、高來、仲津郡ハ皆見、彌見、城井、狹度、高屋、仲臣、仲津、高家、築城
郡ハ綾幡、桑田、橋木、大野、上毛郡ハ山田、炊江、多布、上身、宇佐郡ハ野麻、酒井
葛原、封戸、向野、廣山、垣田、高家、深見、ニ別テリト云此國ハ神武天皇東征ノ
辛島、下毛郡ハ第二編ノ補説ニ出ツ

◎第一編

◎豐

神武御
通致
土蜘蛛ノ在
所ハ豐前ナ
ルヘシ

◎豐前沿革

際御通策アリシ舊地 日向ヨリ筑紫ニ幸スル途 荒狹(宇佐)ノ足ニ騰宮ニ
門(早納瀬戸)ヲ過キ 御駐座アリ又筑紫ヨリ阿波ニ幸スルノ際 速吸ノ水
導ヲ得テ船ヲ進ムニ 景行天皇土蜘蛛御征討ノ時 行宮ヲ長峽縣津積村
御所谷ニシテ今其跡ニ登テ眺望スルニ 彼土蜘蛛ノ住セシト言傳フル巢窟
(今青龍窟ト云)ハ北ニ當リテ遙ニ眼下ニ之ヲ臨ムベシ然レト土蜘蛛ノ住
處ハ果ト此巢窟ナルヤ判然セザル也 渡邊重春等ハ專此巢窟ニシテ豊後ニ
アラズト主張ス其考證ハ 畧ボ左ノ如シ 第一土蜘蛛ノ住處ヲ豊後ト記スル
處ノ風土記ハ 出雲常陸等ノ風土記ニ 文休異ナレバ 後世ノ偽作ニ係リ其說
採ルニ足ラサルヲ 第二景行天皇紀ニ 冬十月到碩田國其地形廣大亦麗因
名碩田也到速見邑有女人曰速津媛云々ト之レ碩田速見ヲ豊後ナル郡名
ノ大分速見トセシニハ帝ガ長峽縣ヨリ大分ニ幸スルニハ先速見ヲ過キテ
而レ疑ナシ而シテ今豐前ニテハ行宮事村近郷ヲ昔時碩田ト稱セン考證十分ナル
ルヲ又長尾村ニ今速津媛社アリテ此邊ヲ往古ハ速水ト稱セシニ相違ナキ
第三今ノ青龍窟ハ昔時巢窟石窟ト稱シ土人ノ口碑ニ土蜘蛛ノ遺跡ト云ヒ傳
へ且其窟内ノ有様昔時ノ大賊居住セシ處ト思ハルベキ考證十分ナルヲ第
四豊後直入郡ニアル處ノ土蜘蛛ヲ征セシガ爲ナラハ帝ハ何ノ要アリテカ
此豊前ニ行宮ヲ建テマシマセシヤ此理判然セサルヲ且其處ヲ京トサヘニ
云ヘバ此地ニ御駐座アリシハ僅々ノ時日ニテハアラサリシト等ナリ

◎貳

廣嗣ノ亂

建テサセラレ賊平テ後 菟名手ヲシテ本州ヲ治セシム 後神功皇后一ヒ御駐
鏡田川郡アリ 神龜中宇努首男入豐前守ニ任ス 國府仲津郡草場 天平十二年
藤原廣嗣叛ス 大將軍大野東人佐伯常人安倍虫麿等ト來リ討ス 京都郡大領
持田勢磨兵五百ヲ率ヒ各郡ノ大小領ト俱ニ之ニ從ヒ 板櫃川 企救ノ東ニ陣
シ水ヲ夾テ戰ヒ 廣嗣及弟綱手ヲ戮ス 同十八年 大伴百世豐前守ニ任ス 爾後
國守相續キ 渡邊重春ノ調ニヨレハ 爾後大内義弘 數多ノ沿革アリ 平清盛太
宰大貳トナルニ至リ 平康盛ヲ以テ本州ノ守護ニ補シ 企救郡長野村ニ治ス
子孫因テ長野ヲ氏トス 或ハ云平重盛ノ領地ナリ故ニ 壽永二年 平氏安徳天
皇ヲ奉シ宇佐八幡宮ニ祈ル會々豊後ノ緒方維義來リ攻ム 平氏乃太宰府ニ
徙ル 追兵猶止マズ 又柳浦 今ノニ來奔ス 文治元年 源義經平氏ヲ其東ノ海ニ
覆没ス 同年 源賴朝宇都宮信房ヲ本州ノ守護トナシ 仲津郡城井郷ニ治ス 宇
佐神宮ノ封田アリ 又當時信房ノ弟重房下毛郡川原口長岩城ニ居リ 野中ヲ
氏トス 綱房宇佐郡佐田ニ居リ 佐田ヲ氏トス 興房下毛郡

源平ノ殿

城井ノ七城

◎豐前沿革 第一編

深水ニ居リ之ヲ氏トス政房上毛郡ニ居リ小田ヲ氏トス直房爾後大友能直
 廣津城ニ居リ之ヲ氏トス野中ノ臣百富河内守土田ニ居ル
 本州ノ守護ヲ兼ヌ又太宰少貳ノ所轄タルモノモアリ建武中宇都宮公綱足
 利尊氏ニ應シ再本州ノ守護トナル正平ノ頃菊地武光田川郡戸城山城ヲ守
 新田義基仲津郡馬岳城ニ據ル文中ノ初大内義弘本州ノ守護ヲ兼テ陶弘
 信ヲノ京都郡松山城ニ鎮セシム應永五年大友氏公松山城ヲ抜ク爾後二氏
 本州ヲ争ヒ兵結テ解ケズ宇都宮高橋長野原田等ノ諸族皆二家ニ分屬ス天
 文ノ末大内氏亡ヒ毛利元就大友義鎮ト又本州ヲ争フ天文十五年豊臣氏宇
 佐神領ヲ沒收シ毛利勝信ヲ企救田川二郡ニ封シ黒田孝高ヲ其他ノ諸郡ニ
 封ス但宇佐郡ノ内龍王妙見ノ二城ヲ大友義統ニ授ク慶長五年徳川氏細川
 忠興ヲ以テ國守トス寛永九年細川氏轉封ノ後小笠原忠真ヲ小倉ニ封シ九
 州探題トナシ同長次ヲ中津ニ封ス後忠真ノ三子真方ヲ鎮城郡ノ内新田ニ
 万石ニ分封シ企救郡篠崎邑ニ住セシム貞享元年上中津ノ小笠原氏ハ長次
 毛郡ニ轉封

大内大友兩氏ノ標角

黒田細川小笠原奥平氏入國

ノ後三世長胤ノ代ニ當リ故アリテ封除シ弟長圓ニ新ニ其封半ヲ賜ヒ猶中
 津ニ住ス此時下毛郡ヲ二分ノ山國跡田戸原ヨリ以南ニ其子早ク天シ法ニ
 ヨリ復沒收セラル時枝小笠原氏ハ中津小笠原氏ノ支封ナリ元祿二年長胤
 五千石ニテ上下西ノ三株村享保二年與平昌成中津ニ封セラレ宇佐ノ神田
 及時枝ニ分知セシモノナリ享保二年與平昌成中津ニ封セラレ宇佐ノ神田
 ヲ復封ス其他徳川氏ノ直轄及嶋原藩ノ領地アリ小倉小笠原氏ハ慶應ノ亂
 ニヨリ田川郡香春ニ移リ尋テ仲津郡豊津ニ治ス篠崎小笠原氏ハ上毛郡千
 東ニ移ル明治二年豊津中津千東ノ三藩俱ニ封土ヲ奉還ス同四年藩ヲ廢シ
 縣トナシ尋テ三縣及日田嶋原二縣ノ屬地ヲ合セ小倉縣ヲ置キ以テ本國一
 圓ヲ總轄ス同九年小倉縣ヲ廢シ福岡縣ニ併セ後又下毛宇佐二郡ヲ削キ大
 分縣ニ分屬ス

古制本國ノ田面一万三千二百余町歩 宇都宮家譜ニハ一万五千町ニノ内
 ストアリ和漢三才圖會ニハ高三万七百四十石トアリ重
 春日ノ細川氏ノ時本國ノ高ハ二十七万三千八百余石ト其正租稻六十万余

田面租稅

人口 産業 地質

東主稅式ニ云正稅公廩各二十萬東國分寺領一萬四千二百七十四東文殊會
 料二千東府官公廩十萬東衛卒料一萬七千五百五十四東修理府官舍料六
 千東池溝料三萬東救急料四萬東本額合計六十九萬九千八百九十一石四斗ナ
 一東ヨリ白米五舛ヲ得ル故ニ之ヲ米ニ改算ノ三萬四千八百九十一石四斗ナ
 ル庸調若干主計式ニヨレバ豊前ノ庸ハ綿米魚之ニ副フ
 狛本國ハ其廣袤東西二十一里南北十里周回七十二里ニ自治町村百三十
 四但五町百二十九村自治制人口三十四萬方里位ナラシク然ルモ一方里
 ノ人口千七百八十ナル而本邦平均數ハ一方里千五百人ノ割合ナリ又本
 國ノ人口文化元年ニハ二十三萬五千九百五十八人明治十四年ニハ三十三萬
 六千八百八十一人此七十八年間ノ人口繁殖力ハ四割一分〇八六ナリテ有シ地勢
 分四八又此年間ニ於ケル全國ノ繁殖力ハ四割一分〇八六ナリテ有シ地勢
 ハ北方一面瀬戸内海ニ臨ミ東西南三方ハ本邦ノ西部中央火山脈ヲ以テ之
 ナ限リ其脈ハ延テ國ノ中央ニマテ蜿蜒シ無盡ノ石炭ヲ此内ニ含有セリ而
 ノ其裂間及國ノ北部一帶ハ近古紀ノ泥沙沈積シテ成レル處ノ低地ナルガ
 故ニ大小ノ河流此間ニ流通シテ膏腴肥沃ノ田園茲ニ開ケ米穀桑麻綿茶等

都邑

氣候 風土

豊ニ産シ且漁獵ノ業盛ニ興リ人類ノ捷息ニ最恰好ノ地トナリテ繁花ノ都
 邑殷富ノ村落糾交相連リ國ノ重力ハ北部ニ向テ傾ケリ要スルニ本國ハ地
 貌ノ諸元素完備シテ本邦中ノ一等國ニ位ス
 今ヤ工業未盛ニ起ラズ農業尙且改良セサレ未製ノ物産以テ此齊々タル
 國內ノ民庶ヲ養フテ遙ニ余剩アリ加フルニ本國天然ノ富タルヤ植物ハ本
 邦植物帶中尤工業上ニ有用ナル黒松樟櫛柯樹等四十九種ヲ含メル第二帶
 ニ當リ且海拔二千五百尺以上ノ地ニハ美術工藝的ノ用ノ第三帶山毛櫨をふ
 扁柏、羅漢柏ノ植物ヲモ生シ氣候ハ年中平均温度攝氏十四度半ヨリ十五
 等五十五種本邦平均温度ニシテ寒暑ニ候甚シキ懸隔ナク氣壓ハ七百六十二佛
 厘(明治十八年實測ニヨル)本邦乾燥期平均氣壓雨量ハ一千乃至一千二百
 佛厘ニテ蝦夷ノ南方及奥州ノ東部ヲ除ク外本邦中最寡雨ノ國ナリ而シ
 テ定風濕氣及結霜期等ハ未學理的ノ觀測ニ乏シキモ古老ノ驗經說ニ依レ

ク又西風ニテ晴レ南東風ニテ雨トナル夏ハ東風多ク冬ハ北風多ク冬ニテ晴ル又夏秋ノ交近ハ春來常ニ東南風ヲ以テ雨トナル秋ハ北風多ク冬ハ西風多ク而シテ冬季初春ハ東北風ヲ以テ雨ヲ招キ又八月ノ候吹ク處ノ暴風ハ必辰己ノ方位ヨリ吹クナリト之レ豐前ノ地勢位置等ヨリ考フルニ大ニ氣象學ノ理論ニ適スル處アル故ニ須ク記シテ參考トス又氣象臺ノ統計ニ依レバ豐前ト殆同温線ナル下ノ關ハ初霜十一月廿六日長崎二十四日濱松十九日廣島十三日全國平均ハ五日初雪ハ下ノ關十一月十八日長崎十二月十一日濱松二十三日廣島七日全國平均ハ廿一日ナリ要スルニ瀬戸内海ノ氣候 畿内山陽九州四國ノ間ニ介マル海ヲ瀬戸内海ト云ヒ氣候ト命ヲ感受スルカ故ニ本邦最寒地 玳瑁郡邊ニ接近セル山地ノ一小部ヲ除クノ外ハ殊ニ調和適順ナル氣候ト稱スベク其他地震少ク積雪稀ニ山ハ秀デ氷ハ清シ嗚呼本國人民ニシテ此自然ノ大利ヲ活用シ今一層奮勵スル處アラバ其繁昌ハ當ニ今日ニ倍蓰スルノミニアラザルナリ獨憾クハ海岸泊舟ノ良地ナク商業ノ利ヲ專ニスルコト能ハサルヲ然レモ猶門司ノ如キ瀬戸内海ノ咽喉ニ當リテ港灣稍佳長ナル地アリ且小倉中津等ノ如キモ築

港ノ工事ヲ施サハ長港タルベキ望ナキニシモアラサルニ於テヤ呼我豐民ニシテ大ニ農業ノ改良ヲ圖リ又港灣ヲ浚ヘ交通ヲ開キ且本國無限ノ石炭ト水力トヲ利用シテ此饒々タル各種ノ原料ヲ製造スルニ至ラハ民業大ニ發達シテ近年漸次ニ枯槁セントスル土地ノ如キモ忽衰運ヲ挽回シテ國內之ヨリ賑カナルニ至ラシテ之ヲナス難カラシヤ請フ彼人口ニ膾炙スル處ノ「ひゆりたん」宗徒ノ米國移住并ニ明治ノ美談トシテ能ク人知ル處ノ遠州金原明善氏ノ天道河身改良ノ舉及仙臺藩主伊達邦成氏ノ臣ノ北海道移住ノ顛末ヲ觀ヨ其成功皆其人々一片ノ赤心ニ在テ存スルニアラスヤ實ニ本國ノ欠點タル港灣交通ノ不長ノ如キモ本國人民精神到ル時即日ニシテ之ヲ改良スルヲ得ノ請フ彼荷蘭人ノ千里迢々タル堤防ヲ築キテ海水ヲ遮リ今海面ヨリ低キ國ヲ造リ居ルチ又北米南部人民ガ「ミヒ」つびる」河岸濁流漲溢ノ地ヲ乾シテ今愉快ナル都邑ヲ造リ居ルチ又英國ガ往時水蒸氣空際ニ滿チテ日光爲メニ朦朧タリシチ陰渠ノ力ニ因テ雲霧ヲ減シ今ヤ幾分カ氣象上ニ變化ヲ及ホセルヲ將タ歐洲人ガ「すゑ」地峽ヲ掘リ割リ濠太利ノ曠野ヲ開拓スルカ如キヲ見ヨ一人類ハ自然力ヲシテ自然ノ法則ニ從ヒ使用スルノ能力ヲ有スルモノ「をめる」右ノ言ナルヲ了知シ得ルナラシ文明ノ民タルモノ豈ニ二地文上ノ欠點ニ左右セラレ座ヲ衰弊シテ可ナラシヤ呼豐州ノ人士奮飛セヨ今日ノ急務ハ只眞正愛國愛民ノ志アル金原明善的ノ人物及不屈不撓ノ精神ニ富ミ團結鉄石ノ如キ以

本國ノ開化

豊前ニ英雄
豪傑ヲ産セ
ス

ゆりたん^ル宗徒的ノ人物ヲ得ルニア
ル^ルニ決シテ其他ニアラザルナリ
史ヲ案スルニ往古本國ハ夙ニ王澤ニ霑ヒテ神武以下歷代ノ天皇及皇族等
ク駕ヲ此國ニ寄セ玉フ是本國ノ民夙ニ勤王ノ志アリテ百事征伐アル毎ニ多
ニアラスヤ又續紀ニ^フ和銅七年閏二月隼人闖荒野心未憲法ニ習ハス因テ
豊前ノ國民二百戸ヲ移シテ相勸導民速ク開化セシメ元來此國土地豊美ニ
セシム^ルトアルヲ見テモ知ルベシ
シテ人々皆樂居飽食シ得ルヲ以テ生存競争行ハレス爲ニ國人進取ノ氣象
ヲ少ク故ニヤ又本國ノ位置偏僻ニシテ日本交通ノ要衝ヲ避ケ加フルニ長
海佳港甚少ク從テ外來ノ刺撃ヲ受クルヲ鮮キ故ニヤ或ハ國ノ三面峻嶺ニ
限ラレ東南鶴見鹿鳴越ノ脈アリ西南英彦地勢甚薄クシテ區域狹少ナル故
ニヤ將タ蓋中世上ノ邦歷史以還主都ノ權力豊後大友中國毛利等ニアリテ英
雄ノ自此國ニ住スルモノナク降テ近世上同ニ及ヒテモ黒田細川等直ニ去リ
譜代大名永ク領知シテ因循姑息セル故ニヤ古來此國人ノ天下ニ運動セシ
ト嘗テ之レナク又英雄豪傑ノ此國ヨリ出テタルモノ一モ之レナリ獨僅ニ

人民ノ氣風

力士槻村六助劔客島田虎之助學者福澤諭吉等數人一己ノ名聲ヲ天下ニ揚
ケ得ルニ至リシモノアルノミ人民ノ氣風ハ今ヤ一体ニ古來數百年間養成
セル政治ト宗教トノ反應ヲ現シ來リテ國內各地同シカラズ即西豊前六郡
ハ寛永以來小笠原氏ノ領地ニ屬シ政令寬嚴其中ヲ得^テ不完全ナカ^ク宗教ハ眞
宗神道共ニ盛ニシテ信者甚多ク東豊前ハ享保以來與平氏ノ嚴政ニ支配セラ
レ其宗教ハ眞宗尤多ク^レ信心ノ度稍薄シ而シテ二藩ノ領地外ニ天領幕
領ノ及島原藩ノ領土アリテ其政寬大ナリ此故ニ小倉領ノ人民ハ其氣象優緩
ニシテ稍卒直^シ而レ^テ西豊前炭坑地方ハ將來人心敗壞中津領ハ敏捷ニシテ
稍狡猾天領島原領ハ傲慢ニシテ其天領ハ稍不仁而シテ中津ノ人民ハ活潑
ニシテ商機ニ敏キモ稍輕忽ニシテ忍耐力ニ乏シク其他凡テ山中中部ハ民質
朴温厚ナレ^テ海岸部ハ之ニ反ス然レ^テ本國ノ人民ハ亦信愛義勇ノ情ニ富
ム^ルモノ多ク常ニ之ヲ以テ他國人ニ敬愛セラル

信愛義勇ノ
情ニ富ム

人民ノ財産

又藩政ノ寛嚴ハ大ニ人民貧富ノ度ヲ制シ中津小倉ノ領内ニハ豪農巨族跡ヲ絶テ民富殆平均セリ天領嶋原領ハ之ニ又シ豪富兼并ヲ擅ニシテ貧富ノ差大ニ懸隔アリ(第四編參看)目下貴族院多額納稅者議員資格者ノ多少ヲ地價ヲ有セザレバ注意セヨ

士族ノ氣風

士族ノ氣風ハ其昔時ニ於ケルヤ與平小笠原兩家共ニ一ハ長篠ニ一ハ大阪ニ各本邦歴史上著名ノ痕ヲ留メタル名家程アリテ士氣凜烈壯武ニシテ忠勇節義ノ名士相次テ輩出セシガ哀哉譜代大名ノ家ナルヲ以テ徳川氏ノ奮フヤ共ニ奮ヒ其榮フルヤ共ニ榮ヘ其眠ルヤ共ニ眠リ遂ニ維新ノ革命ニ際シテハ人物浪然爲ニ堂々タル大藩ヲ以テ更ニ寸功ヲ立ツルヲ得ヌ碌々トシテ空シク時勢ノ變遷ニ從ヒ行クノミナリシ哀哉維新ノ際内藩皆孱弱座視傍觀シ外藩多クハ強盛ニシテ維新ノ功業ヲ創立ス此豈嘗ニ封地ノ大小ニヨラシヤ其他ニ必由ル處アリテ然ルナリ即内藩ハ徳川氏ト共ニ勝テ甲冑ノ緒ヲ弛ヘ而シテ外藩ハ之ニ反シ負ケテ愈士氣ヲ奮ヒシニヨラス

ハアラズ予明治二十一年史料探究ノ爲長防二國ヲ漫遊ス時ニ多ク有力卓識ナル同國舊藩ノ名士ヲ叩キ且古書實地ヲ對照シテ該藩ガ天下ニ先ジテ維新ノ大業ヲ翼成セル跡ヲ尋究シケルニ歴々トシテ長防二州ノ士民カ關原ノ舊憤ヲ散セシメガ爲其徳川氏ニ報セントセシ準備ノ奮ナラザリシヲ察スルニ足ル者アリタリキ(毛利氏ハ元就以來勤王ノ志厚カリシ故維新ノ際主トシテ攘夷ヲ實行セシガ如キハ敢テ私怨ニ出ツルコトナラズシテ全ク朝命ヲ奉戴セシモノナラシムルニ上心ニ討幕ノ時機ヲ窺ヒ居シトハ予ノ竊ニ推測スル處也)即該藩ガ夙ニ民心ヲ歸服一致セシメシガ爲勉メテ政令ヲ易簡コシ又大ニ富國強兵ノ基ヲ開カシガ爲山林ヲ保護シ道松(路傍ノ並木)ヲ植ヘ原野ヲ闢キ盤田ヲ造リ堤防ヲ築キ農業ヲ獎勵シ又藩士ノ家ニハ各桑麻果木ヲ植栽セシメ又教育ヲ興シテ士民ヲ論セシ盛ニ文武ヲ講究セシメ又不急ノ冗費ヲ節シテ撫育金ヲ山積シ以テ府庫ノ充實ヲ圖リ又士節ヲ監督シ民勇ヲ勵獎セシメ等凡國家富強ノ策ハ舉テテ洩ス處ナカリシ様ヲ研究シ得タリカレハ觀ルベシ彼國士民富強ニシテ藩勢誠ニ磐石ノ如ク慶應ノ役天下ノ老兵ヲ境外ニ迎フルハ恰モ猛獍ノ死猪ヲ弄フカ如クナリシヲ呼此時ニ當リテ長人ノ天下ヲ左右スル亦既ニ決シテ難事ニアラサルナリ聞ク薩州土州等強藩治民ノ方多ク皆斯ノ如クナリシト嗚呼山陽ハ嘗テ徳川氏ノ天下ヲ得タルハ大坂ニアラス關原ニアラスシテ小牧ノ戰ニアリト説ケリ予ハ將ニ云ハントス薩長人が明治ノ天下ヲ得タルハ鳥

羽伏見ニアラズ東征ニアラス實ニ慶長元和ノ際今ノ薩長人ノ祖先ガ切齒
扼腕ヲタル日ニアリト國家ノ盛衰興亡豈偶然ノ出來事ナラメヤ願テ内藩
ノ情況ヲ見ルニ事相全ク之ニ反シ因循姑息一ニ幕府アルヲ知テ皇室人民
アルヲ知ラス故ニ適々民業保護ノ爲堤防ヲ築キ新地ヲ開ク等ノ事アルモ
人民ハ徒ラニ夫役ニ驅使セラレハ終ルニ過キス又武備充實儉約令等多ク
吏胥ガ私利ヲ營ムノ機關トナリテ終ルニ過キス又武備充實儉約令等多ク
ハ名ノ練習ヲナスニ際リ例ヲ參謀殿令ヲ傳ヘテ本藩ニ兵士ニ召集ノ期ヲ告ケス
集ノ練習ヲナスニ際リ例ヲ參謀殿令ヲ傳ヘテ本藩ニ兵士ニ召集ノ期ヲ告ケス
故ニ兵士縮々トシテ其期日ヲ告ケ以テ過ナカクシメタリト夫如斯名聞ニア
ラサレバ(御固め番)ノ紛紜ノ爲ニ正法明令ヲ出スハ稀ナルヲナリキ其
他百姓町人ニ武術修行ヲ禁スルハ先可ナリトスルモ公ニハ藩士ノ農業ヲ
營ムヲ禁シテ私ニハ彼尤士氣人心ノ腐敗衰滅ヲ促ス砒毒ト稱スル處ノ商
書第(四編參看)嗚呼此等ノ狂事舉テ來リテハ豈只一二ニ止マラシヤ國家元
氣ノ衰亡セシハ恠ムニ足ラサルナリ予又明治二十一年一月舊藩ノ老名士
古宇田姑山翁ヲ訪フ翁予ニ語テ曰ク本藩古來勤王ノ文字ヲ傳フルモノナ
シ然ルニ今ヨリ七十年前當時ノ著書(蓋日本外史等平)ニ勤王ノ字アルヲ
見學館ノ教師及士大夫等始メテ武門モ亦朝廷ノ爲働クヘキ義務アリヤト

小倉士人ノ
西發

水戸派ノ最
後

上士派ノ最
後

士族家庭ノ
美風

恠ミケリ云々ト以テ内藩ノ事情ヲ想像スルニ足ルベシ(以上ハ只一ノ事
例トシテ掲ケタルマテニテ其他ノ事ニ至リテハ外藩ト雖惡政甚多カルヘ
ク内藩ト雖良所亦ナキニアラズ(然レモ小倉ハ維新ノ際長州ノ刺戟ヲ受
ケ一時顛沛流離ノ後却テ士氣ヲ振興セリ中津ハ終始嘗テカハル血烟涙雨
ノ災禍ニ遇ハサルヲ以テ士氣益沈醉シ降テ明治年間ニ至リテハ舊藩ノ際
殆本藩ヲ動かサントシタル彼有力ナル水戸派ノ如キモ十年ノ亂ヲ以テ最
後ヲ遂ケ後進生タルニ過キサレハ維新後同派ノ主領トナレリ彼文久亥歲
ノ建白者モ亦此派ニ關係アル人多シ此派ノ人物ハ皆有爲ノ士ニシテ
十年ノ役ニ關セザルモノモ皆此前後國ヲ去リ今他府縣ニ於テ立身セリ權力
財産並ビ高ク正直公義ノ心ニ富メル舊上士ノ一派モ明治十二三年ヨリ十
六七年ノ間ニ於テ悉最後ヲ遂ケタレバ(以上木書第 今ヤ士氣全ク萎靡不振
ナリト評スルモ敢テ不可ナカルベキ歟
茲ニ一言スベキハ本藩士族家庭ノ風俗之也男女品行端正ニシテ言容優美
ニ見人ヲシテ感セシムルモノアリ若夫之ヲ保存シテ加フルニ文明的教育

ヲ以テセハ實ニ本國ノ寶貨トナラシムルニ一例ヲ舉テ之ヲ証セシニ中津ヲナスモノ古來嘗テナキコナリ今本國ハ勿論京坂各地ニアリテ立身セル中津士族ニ就テ之ヲ觀バ亮然タラシ蓋往時小薩摩ト稱セラレシ中津武士ノ子孫ハ猶且茲ニ取ルベキモノアリタル存スル歟然レハ古ヲ鑒ミ今ヲ思ヒ奮小美事タルニ過キズ嗚呼中津ノ士人タルモ希クハ古ヲ鑒ミ今ヲ思ヒ奮飛發憤大ニ父祖ノ氣象ヲ發揮セラレシコトヲ

中津ノ位置

中津ハ北緯三十三度三十四分英國ぐりにけら偏東經百三十一度十分中央氣象上觀ニ當リ戶數二千四百三十二 明治二十二年十二月士族平 察ニ因ルニ當リ戶數二千四百三十二 男五千九百七十六 女三千七百七十六 年中死 納者一千戶人口一万二千三十三 男五千九百七十六 女三千七百七十六 年中死 亡二百五十五人出生三百十八人學齡兒童數二千七十七人 男千七百七十四 就學兒 童數千三百六十二人 男八百八十二人 女五百五十二人 而シテ明治十五年ニ比スレバ人口三百 十八人ノ減少ナリ各地ノ里程ハ京都小倉ヲ經テ東京二百九十八里大分十 九里熊本四十五里馬關十五里重要物産ハ團扇繭蠶種生糸博多織飛白茶等

物産

戶口

飲水

ニシテ中津港輸出重要品ハ米雜穀材木茶蠟生糸團扇等ナリトスサテ僕麻質 斯間歌熱ハ我地方ノ風土病ニシテ而シテ脚氣病モ近年其種子ヲ輸入セシ モノ、如シ飲料水ハ分拆上經驗上金谷地方即南部ハ井水ノ質佳ナレ北 部ニ及ヒテ漸ク不良ナリ今中津人ノ尤多ク飲用ニ供スル水道水ノ分拆表 ヲ左ニ示ス

明治廿一年七月	場處	判定成分	鹽素	硫酸	石灰	苦土	あひもにや	有機物
島田口	三口水	長中性	僅	痕	痕	○	◎	僅
水道口	長中性	僅	痕	痕	○	◎	◎	僅

右ノ外氣壓風位ハ下毛郡役所ニテ明治二十三年以來溫度ハ廿三年以來

商業

(從來ノ者ハ驗温器不完全ナレハ無功ナリ)實測ニ着手シ雨量及ビ海水満
 于ノ平均ハ予私費ヲ以テ近日器械ヲ据ヘ付ケテ之ニ着手スル筈ナレバ
 何レモ數年ノ後ヲ待テ知ルヲ得ベキ也
 抑當市商業ノ中心ハ新古博多町ニシテ東豐後西片端南勢溜上博及港口ノ
 四口ニ當レル町々ハ之ニ次テ繁昌ス而シテ堀川工石古魚町船町工木諸町染物
 等ハ職工多ク櫻町角木船場ハ料理屋多ク寺町ハ寺院多ク士族ハ大率南北
 兩邊ノ町々ニ住シ而シ昔時上士ノ專有セシ殿町片端三の町等ハ皆多ク商家ノ
 手ニ歸シ去レリ若夫之ヲ概論スレハ中部以南ハ諸方ノ入口ヲ控ヘタルカ
 爲稍繁盛ナレモ北部ハ港口ノ繁盛薄キガ故枯衰ノ狀ヲ呈セリ官衙ハ裁判
 所警察署監獄所郡役所町役所電信局等アリテ共同事業ニナリタル會社ノ
 如キハ田舎新報社中津銀行即昔ノ天保義社ニシテ明治二十二年日融社資本
 萬圓明治十九年一月大分銀行支店即昔ノ七十八國立銀行ニシテ明治廿一年
 月開業貸金營業

官衙
會社

萬圓ヲ以テ支店ヲ中津ニ置カシ明治二十三年四月
 年十月又八王子ヨリ大分ニ之ヲ賣渡セルナリ 末廣會社 明治二十三年四
 彌六郎ニ預ケタル年季明ケルヲ以テ改革ニ着手セントス適々前ニ同社ノ
 政府ニ借レル處ノ就産金九千余圓年賦返納ノ恩命ヲ蒙ルニ會フ仍テ一旦
 解社シ更ニ其就産金ヲ中津全士族千三 倉庫會社等ニシテ數年前ニ比スレ
 百人ノ共有ニ歸シ再結社營業ヲ始ム
 バ大ニ減少セリ又近時政談ノ勃興ト共ニ本年一二ノ政事俱樂部顯出セリ
 而シテ演劇場ニハ蓬萊觀常春觀アリ料理店ニハ忘言亭依齋亭等アリ共ニ
 他地方人ノ驚ク所ニシテ蓋土地ノ生産力ニ過クルノ建築ナリトスサレバ
 財貨多ク此方ニ流注シテ教育衛生殖産興業等有用ノ事業甚舉ラス識者竊
 ニ之ヲ歎息ス

第二編
上世紀

上世紀ハ太古ヨリ天正年間ニ至ルマテ凡二千二百四十余年間ノ
零記ニシテ中津草莽ノ時代ニ屬シ此地文化未進マエ纔ニ海濱ノ一
部落タルニ過キサリシ時代ナレハ歷史上ノ事實甚鮮シ然レモ黒
田氏特ニ此地ヲ選テ其居ヲトセシハ當時此地ノ文化國中ニ冠シ
且恰モ國ノ中央ニ位置シテ土地豊美要害堅固加フルニ海陸ノ運
輸ノ便宜多キガ故ニシテ後來中津ノ繁昌ハ黒田氏ノ入國ニ基スト
雖同氏ノ最初根據ヲ玆ニ定メシハ全ク上記ノ理由アルニ由テ也
史ヲ讀ムモノハ亦地ノ理ヲ考ヘサルベカラズ請フ世人本編記ス
ル處ニ因テ往事ヲ追考セラレシコトヲ

欠

MISSING

中津ノ稱考

シ洋大ノ稱何原ノ呼盧ニ非ナルナリ是ヲ以テ黒田氏大扇城ヲ三郷ニ築
 キ中津川西ニアリ大家川東南ニアリ周防洋北ニアリ地利介然眺瞻佳美
 荒山ニ登リ遙ニ之ヲ見レハ江海大扇城ヲ推ス猶番樓ノ瀛海ニ湧キ揚ル
 カ如シ云々○重春曰ク西ニ今井津アリ東ニ今津アリ中津トハ其中央ナ
 レハ斯ク名クト予以爲ラク之レ余リ牽強ニ過クベシ何トナレハ今津今
 井ノ兩地ノ名果シテ中津ヨリ以前ニアリシヤモ判然セス只中津大江等
 ト呼フハ此地江河ノ間ニ介マルヲ以テノ故ニアラスヤ強ヒテ附解スベ
 キニアラス又當時中津ト稱ズルハ後世中津川ノ川ノ字ヲ省キテ簡ニ從
 ヘル也豐前志ニハ黒田氏ノ比ヨリ中津ト改メシ由記載セリ○和名鈔ニ
 云下毛郡ハ山國大家麻生野中諫山宮石小楠ノ七郷ナリト而シテ諸書ヲ
 接スルニ大家郷ハ今ノ沖代中ノ村里ノ總稱ニシテ今ノ中津ノ地ハ三區ニ
 分レ南方ヲ荒卷莊ト云中央ヲ玉握莊ト云北邊ヲ勾金莊ト云ヒシモノ

中津三郷

如シ尙後章黒田氏ノ部ト參照スヘシ○豊前志ニ云景行天皇紀ニ冬十月
 碩田國ニ到ル其地形廣大又麗シ依テ碩田ト名ク」ト帆足萬里曰ク之レ大
 家郷沖代ナリト○中津譜誌ニ云中津ハ中津宮鎮座ノ地ニシテ上古中津
 島又中津江ト云中津宮ハ國華萬葉記及三才圖會ニ詳ナリ國史ヲ案スル
 ニ中津少童命ヲ祀ル處ナリ此神ハ海神ニ其鎮座ハ蓋開國ノ始ニ在リ
 其社地頗ル廣大ナリシモ純友反逆ノ時源經基中津宮ヲ鈴熊山ニ移セシ
 ガ應永年間大内大友爭亂ノ時兵燹ノ爲社地荒亡セリ後黒田家中津ニ入
 ルニ及ビ社司重松義和其再興ヲ請ヒシモ黒田家久シカヲサル内ニ筑前
 ニ移リシ故次ノ領主細川家ニ請ヒシガ亦果サズ遂ニ龍王豊日別宮ニ合
 祀セリ云々○原田直好曰往古小祝ト小犬丸トハ地續キニテ高濱ノ京泊
 ハ灣トナリテ泊舟ノ地ナリシガ後洪水ニテ之ヲ流潰シ遂ニ一條ノ川ト
 ナレリ其證ハ貞享三年中津小倉ト小祝ノ地所ヲ爭ヒシ時小倉役人ヨリ

出セシ書面ニ「小祝ト高濱の間は毎々の出水にて離れ島の様ニ相成り今
 より三十二年前ニ當ル」の大洪水にて遂ニ押切りたるなり云々トアル
 ヲ見テモ知ルヘシト○或書ニ小祝小犬丸間ノ切レシハ寛文九年七月十
 八日ナリト果シテ然ラハ前者ト年月ノ相違アルヲ見ルヘシ故ニ予案ス
 ルニ明暦ノ洪水ニテ少ク洗ヒ切り寛文ノ時遂ニ一條ノ大河ヲ生スルニ
 至リシナラシク歟而シテ享保時代ノ中津地圖ニ此河流ノナキヲ見レハ稍
 疑ナキニアラサレトモ之レ多クハ地圖ノ誤ナラント思ヘリ此河流ハ金谷
 堤ヲ築キタルカ爲自然ノ水勢ニヨリテ決潰セシモノナルガ故年々其河
 幅及深ヲ増シ遂ニ明治二十二年七月五日ノ大洪水ニヨリテ本流ハ殆
 磯砂ヲ以テ之ヲ埋メ小祝外馬場ノ間塞リテ滿潮ニアリ此支流ヲシテ全ク山
 國川ノ本流トナスニ至レリサテ我中津ノ海岸ハ豊前沿岸普通ノ顯象ニ
 背カス汀線上動ノ徴更ニ之ナク只汀線ノ下動ヲ見ルノミニシテ且前ニ

モ説ケル如ク歳々山國川ノ流出スル土砂ハ其河口ニ沈渣シテ砂洲ヲ作
 リ現ニ彼小祝寺山及古新開前ナル高洲ノ如キハ皆此所謂砂洲ヨリナル
 モノニシテ其作用ハ不斷繼續シ目下尙寺山及高洲ノ沖ニ數多ノ新洲ヲ
 築造シツ、アルガ如キ有様ナレハ河口ノ埋塞スルハ亦宜ナル次第ニシ
 テ彼運上場ニハ享保ノ頃マテハ干潮ノ時猶十反帆百石乃至二百石積ノ船自在ニ
 往來セシガ今ハ干潮ニハ漁舟ノ出入スラ全クナシ難キニ至レリ之ハ文
 政ノ頃三百間堤ヲ築キタルニ因リ斯ク一層速ニ港灣埋塞ヲ致シタル所
 以ニシテ遂ニ今ハ殆海運ノ便ヲ絶タシメントスルニ至レリ實ニ若斯ノ
 如クシテ今後尙百歳ノ星霜ヲ經バ汀線下動ノ自然力ト流水ノ作用トハ
 行々中津ヲシテ遠ク海濱ヲ距ラシムルニ至ラン歟嗚呼桑滄ノ變實ニ大
 也思ハサルヘケンヤ○豐前志ニ廣津河ハ金谷堤ヲ築カサル前ハ下宮永
 ノ邊ヨリ中津ノ市街ヲ廣ク流レテ海ニ入ルヲ中津川ト云ヒ大江社ノ南

中津ハ往古
 山國川ノ三
 角洲ナリ

東松江細手邊ヨリ分レテ島田村中津大江兩川ノ間ニノ東ヲ流レ礪瀨牛
 神ノ間ヨリ海ニ注クヲ大家川ト云云々ト今之ニ由テ按スルニ中津ハ往
 古山國河ノ三角洲タルヲ明ケン請フ觀ヨ耶馬溪ヲ刻開シテ急激ニ奔下
 セル山國河ハ其流水速度ノ減殺セル洲口ニ於テ遠ク上流ヨリ運送シ來
 レル泥砂ヲ茲ニ沈積シテ諸洲ヲ造リ而シテ又流水ハ此ヲ破リテ數多ノ
 岐流ヲナシ遂ニ幾多ノ三角洲ヲ營築セシマラ然ルニ星移リ物變ルノ後
 此新地ハ人事的繁盛ノ諸元素ヲ含ムガ故ニ植物茲ニ繁生シ人民茲ニ居
 ナトシ河流モ數々變遷シテ黒田氏入國ノ頃ハ地面モ漸ク増加シテ泥沙
 ノ堆キ處岡阜ヲナシ其少キ處低地ヲ造リ而シテ山國川其三面ヲ環流シ
 居レル也今試ニ之ヲ証センガ爲中津ノ地質ヲ檢スルニ表土ヲ剝クバ直
 ニ砂粘土ニシテ其次層ハ河原石河底ニ沈積セル礫々々ニ砂利ヲ夾雜セ
 ル者或ハ漣紋ヲ現セル砂層ヨリナリ礫石砂利ヲ交フル處ノ地層及漣
 紋アル砂層ノ如キハ往時急激ナ

ル水流ノ底處ニ沈積各層ハ互ニ整合シ恰モ厚板ヲ重テタル狀ヲナシ地
 セルモノタルヲ示ス 質學上皆同時期ニ堆積シタルモノタルヲ證セリ然レニ堀川町以北ハ地
 質稍之ニ異リテ前者ト時期ヲ違ヘテ漸次ニ生成セルモノタルヲ示ス以
 上觀來レハ則中津ハ地史上近古記最終ノ發生ニ係ル沖積層的地質ニ
 シテ凡豐前海岸ハ多ク此様ノ低地ナリト知ルヘシ○或舊記ニ山城ノ人
 大江備中守藤原幸範舊中津城四十間四面内ニ居ル此人ハ明德二年十月
 薨ス○角木町吉祥寺ニ葬ル法號ハ吉祥院殿丸山道統居士ト云此居士島田
 村ニ吉祥寺ヲ建立ス時ニ此村ノ河名金剛川ニ因テ寺ノ山號ヲ金剛山ト
 號ス此人十代ノ孫女古城末廣正行ニ嫁ス後黒田氏入國ノ節蠣瀬河原ニ
 替地ヲ命セヲレ玆ニ移ル云々ト 中津城ヲ丸山ト云ハ此 中津ノ往時ヲ考
 フル一ノ事證也

天平十二年藤原廣嗣ノ反セシ時官軍ノ將佐伯常人中津ニ來リ戰捷ヲ中津

紀元一四〇
 西曆七四〇
 佐伯常八來
 紀元一六〇
 西曆九四一
 六條王經基
 來ル

丸山城

雲雀床

宮ニ祈ル○天慶四年藤原純友ノ反スルヤ朝廷小野好古ヲ大將トシ源經基
 ヲ副將トシ之ヲ討セシム好古等中津ニ陣シ賊ノ諸城ヲ拔キ中津宮ヲ鈴鹿
 山ニ移シ其迹ニ城キテ藏人行家ヲシテ之ヲ守ラシメ終ニ進テ賊ヲ筑前ニ
 討テ純友ヲ伊豫ニ走ラス

豐日別宮緣起ニ云純友經基ト豐前柳浦ニ戰フ是ヨリ前賊中津ノ神宮ヲ
 シテ官軍ノ敗北ヲ祈ラシム神宮却テ賊ノ敗北ヲ祈ル官軍ノ將之ヲキ、
 大ニ神宮ヲ賞スト又經基當時丸山ニ城ツクト○宇佐郡記ニ據レハ中津
 宮ノ社地ハ山園川ノ西岸ノ地ノ如クアレヒ之レ如何ヤ分明ナラズ○豐
 前志ニ池永村三宮堂ノ茶白山ト云丘陵ニ雲雀床ト云小塚アリ土人傳ヘ
 テ懷良親王ノ墳墓トス鎮西文書編年錄ニ後醍醐帝五辻宮三位中將ヲ九
 州ニ遣ハセシガ蓋其後豐前豐後ノ間ニ薨セリ云々ト蓋五辻トハ元弘三
 年五月土兵ヲ率ヒテ北條仲時ヲ番坊峯ニ要シテコレヲ殺シ元嚴帝ヲ獲

タル人ニテ龜山天皇第五ノ皇子ナリ左レハ此墳墓ハ懷良親王カ將タ五
 辻ノ宮カ判然セサレハ懷良親王ハ既ニ肥後ニテ薨セシ一日本史及名
 和氏紀事ニ詳記シアレハ如何ナラソモ角往年此墳墓ノ破壊セシ時其
 骸骨ノ出テタルモノヲ觀レハ埋葬ノ風全ク貴人ニ似タレハ必由緒アル
 モノナラソ云々ト古歌アリ云ク「雲井にも昇るへき身乃さはなくて雲雀
 の床に音をのみぞおく」ト

明德ノ頃大友氏鑑國守大友親世ニ叛キテ自立セントシ兵ヲ起シテ二豊ヲ
 掠ム二豊ノ諸士應スルモノ頗多ク中津ノ主中津江太郎田中治郎左衛門尉
 等之ニ屬シ其兵凡三万三千余破竹ノ勢ヲ以テ二豊中之ニ從ハザル諸城ヲ
 攻撃セシガ後氏鑑力衰ヘテ滅亡スルニ及ヒ中津ハ復親世ニ降リケリ○永
 享三年正月十五日馬岳城主新田義高中津ニ死ス始是ヨリ前義高恣ニ菊地
 武忠ノ豐前諸郡ヲ侵掠スルヲ憤リ此日二百余騎ヲ率ヒテ馬岳ヲ發シテ中

中津江太郎

九二〇九
九四一四三

新田義高ノ
死

津ニ出テ重松田中及下毛郡ノ諸城主ト歡ヲ結ヒ此日宇佐大宮司宮成氏ヲ
 其黨ニ加ヘント進テ驛貫川ニ至ル而ルニ武忠既ニ義高ノ宇佐郡ニ入ルヲ
 知リ自三百余騎ヲ率ヒテヨシノ二隊ニ分チ一ハ川ノ西岸ナル瀨社ノ林中
 ニ伏シ一ハ川ノ東邊ナル小幡ノ森中ニ隱レ之ヲ待ツ義高更ニ其謀ヲ知ヲ
 ズ舟ヲ中流ニ泛ベテ將ニ渡フント武忠ノ兵俄ニ起テ兩岸ヨリ之ヲ射ル
 義高大ニ驚キ且怒テ之ヲ罵リ船田岡見小野木岡野等ノ勇臣ト共ニ死ヲ極
 メテ拒キ戰ヒ遂ニ兩箭ヲ冒シテ直ニ西岸ニ上リ武忠ノ姪掃部之助ヲ殺シ
 勇ヲ奮ヲテ戰フ一數時敵六十七騎ヲ斃シテ益々進ミ武忠ノ麾下ヲ馳突セ
 ントス船田小野木等馬ヲ扣ヘテ之ヲ切諫シ殘兵ヲ率ヒテ敵ヲ拒キ且小野
 木ハ漢ノ紀信ニ倣フベシト自義高ノ名ヲ冒シテ自殺シタルハ敵軍盡ク此
 ニ集ル此時當ニ黄昏咫尺ヲ辨セサルニ會ス義高西郷舟田麻生等ノ親兵數
 騎ト西走シ夜半中津ニ達ス時ニ遙ニ吹上坂ヨリ敵軍ノ追ヒ來ルヲ見ル義

重松刑部

高憤激事ノナスベカヲサルヲ知リ乃走テ路傍ノ辻堂ニ入り從臣羽川主計頭ヲ呼ビ之ニ命ヲ己ガ首級ヲ敵ニ奪ハルヽヲ勿ラシメ遂ニ慨然自殺ノ死ス羽川仍テ中津川神注重松刑部少輔ハ舟田入道ノ妻兄ナルヲ以テ急ニヨレテ告ケ其救ヲ請フ重松驚キ乃同僚矢野新右衛門等ニ命シ其死体並ニ重傷者麻生孫七郎ヲ興迎シ孫七郎ハ二郭ノ宗信ノ菴室ニ隠シ義高及羽川ノ殉死セシ死体ハ斃ニヨレテ菴室ノ後ニ埋メ以テ漸ク敵兵ノ害ヲ免レシム初武忠別ニ一千二百余騎ヲ左衛督武成ニ與ヘテ馬ヶ嶽ノ留主ヲ襲ハシム事不意ニ起リ義高ノ宗子左京大夫義通弟竹王等舉族只一時ニ滅亡シ獨三男義丸僅ニ遁ルヽヲ得タリ之ヲ以テ菊池ハ忽豊前ノ大半ヲ略取シ勢力大ニ張リタレト數日ニシテ大内盛見ノ大軍ニ破ラレ狼狽走リテ肥後ニ歸ルト云

當國元錄ニハ永享三年三月中旬義高宇佐宮ニ詣テケルヲ大宮司聞キテ

義高先年大友家ノ敗軍ヲ助ケス利ヘ大内家ニ降リシハ不義ナリ這回討滅ノ其讎ヲ報ヒント則伏兵ヲ以テ義高ヲ驛貫河ニ圍ム義高圍ヲ潰ソ大江郷マテ走リケレト追兵遂ニ已マス路傍ノ辻堂ニ入りテ自殺ス此辻堂ハ今瀨瀬村ヨリ大塚村ニ通スル道路ノ左ニアリスクテ義高ノ死骸ハ馬岳ニ葬リシガ數日ノ後大宮司ノ兵大友家ノ援兵ト共ニ攻寄セタルガ爲ニ馬岳落城シ義高ノ一族遁レテ大内家ニ倚レリ尋テ大内家亡フルニ及ヒ義高ノ三男智福丸中津ニ來リテ重松氏ニ倚ル重松氏終ニ智福丸ヲ養フテ子トナシ以テ其家ヲ嗣カシムト○中津記ニ義高ノ戰死ハ宇佐大宮司トノ對軍ニシテ戰死ノ場處ハ中津二の丸大松ノ下ナリ此大宮司ハ大友家ノ幕下ニテ義高ハ大内方ナレバ或ハ然ラント又古記ニ義高ハ大友中務大輔持直ト戰フテ死スト又一説ニ永享二年新田義氏逆意ヲ企テ大内ノ貴族ト牒シテ菊池ヲ滅シ永ク當國ヲ領センヲ謀ル菊池武成コレ

義氏社

ヲ聞キ中津ニ攻メ入りテ義氏ヲ討ツ云々ト此說妄証ニシテ取ルニ足ラズ何トナレバ義氏ノ卒期應永九年ヨリ永享二年マデハ殆三十年又義氏大内家ニ降リシ年即應安七年ヨリ永享二年迄ハ凡六十年ノ差アレバナリ只中津記ノ說ハ予ノ頗信用スル說ニシテ本文記載ノ說ト未何レカ是ナルヲ知ラス○中津片端ニ義氏社ナルモノアリ近年丸山神社ト號ス之レ應永九年八月義氏馬ヶ嶽ニテ卒ス義高中津ニ來リ之ヲ祀リシモノト云ヒ又ハ重松氏等義高ノ死ヲ哀ミ之ヲ祀ル時其父義氏ヲ裕祭シ後人專義氏社ト稱セシモノト云而ルニ當時義氏社ノ祭典ハ義高戰死ノ日ヲ以テスレト昔時ハ其祭日之ニ異ナリシト云ハ或ハ前說ノ正キヲ知ルニ幾シ但社傳ニヨレハ嘉禎三年龍王神社神主重松盛俊鎌倉ニ至リ足利義氏ト議ヲ鶴岡八幡ヲ祀ル弘安二年盛俊ノ孫盛氏足利義氏ヲ裕祀シ康正元年重松義春又征西將軍懷良親王ヲ合祭ス而ノ現在ノ祭神ハ此外ニ新

中津川義氏

田義氏ノ靈モアリト去レハ彼此何レカ可ナルヲ確言スルヲ得スサテ義高ノ墳ハ現ニ三ノ町北側桑園内ニアリテ昔時ハ此處ニ大松モアリシト云ヒ傳フルヲ觀レハ古書ニ二の丸大松ノ下ニ義高ノ墓アリトアルハ誤乎又現在片端町西方ニ地藏佛アリ古來口碑ニ義高ノ家臣ノ墓ト云ヒ傳フ考古家ノ說ニ之ハ四五百年以前ノ調刻ニ係ルト云フ聞ケハ口碑或ハ信ナルヘシ又山來記等ニ元錄十五年冬知貞尼ノ弟ニ猛火現ハレ種々ノ妊恠アリ古來此所ニ松ノ大木アリテ其下ノ古墳ヲ玉塚ト云小笠原修理大夫ノ時之ヲ神ニ祀ル之ヨリ神火鎮マル云々トノ記事アリサテ此塚ハ誰ノ塚ナルヤ明ナラサレト往時中津ノ稱サヘ王握ト云ヘルヲ觀レハ必由アル塚ナラン依テ因ミニ之ヲ附記ス○興羽觀蹟聞老誌ニ云野氏ニ云中津川義氏ハ豊前ノ人ナリ花山天皇ノ朝衛士トナリテ禁闕ニ侍スルコト三載郷里ノ夫人平安ヲ宇佐宮ニ祈ル國司某之口途ニ遇ヒ情ヲ寫シテ

艶書ヲ寄ス報セス之ヲ怨ムト甚シ譖愬ヲ大炊太納言經春ニ納ル帝信シテ義氏ヲ奥洲石虎里ニ竄ス夫人聞テ悲痛シ幼兒松若ヲ抱キ家臣湯原光好侍女冷泉ヲ從ヘテ奥洲ニ赴カント舟ヲ赤間關ニ掉ス偶光好ノ死スルニ遇ヒ頓沛ノ播州室津ニ至リ海賊蟻坂善太夫ノ家ニ宿ス國司京師ヨリ歸リ途ニ之ヲ知り搜索甚急ナリ夫人僅ニ逃レテ若狹ニ赴キ惡徒山三郎ノ誘拐スル處トナリ松若及冷泉ト別レテ越中ニ赴キ終ニ奥州ニ漂泊ノ太田高綱ノ家婢トナル既ニシテ義氏ト此家ニ邂逅シ共ニ大ニ喜ヒテ具ニ其狀ヲ陳メ冤ヲ訴フ帝始テ其由ヲ知り命ノ歸洛セシム後敕ヲ奉ノ豐前ニ歸リ國司ヲ討シ難ヲ報フ云々トアリ或ハ義氏社トハ此人ヲ祀リシ者ニアラズヤ亦一考スベキ者ナリ○重松等ハ中津ノ神官ナレト封ヲ有シ士ヲ養ヒ常ニ武ヲ研キテ嚴然一城ノ主將タル資ヲ備ヘオルガ如シ之レ今日ヨリ見ルルハ聊不當ニ似タレト史ヲ按スルニ往古ハ國造郡史等

紀元二二一
六四一五五

中津島津氏
ニ屬ス

中津ノ主

盡ク其國內ノ神事政事ヲ兼テ掌リタレハ敢テ怪ムニ足ラズ桓武帝紀ニ國造兼テ神主ヲ帶ブ云々トアルヲ見テモ知ルベシ
弘治二年四月大友義鎮毛利氏ノ豐前諸城主ヲ招キシヲ聞キ自ラ一万二千ノ兵ヲ率ヒテ宇佐郡ヨリ下毛郡ニ進ムヤ中津五名ノ土郡内ノ諸士ト共ニ軍食シテ之ヲ迎ヘ之ヨリ西豐前ニ向ヒ終ニ門司關ニ進ミ毛利ノ守將仁保就定ヲ逐ヒ豐前ヲ平定セリ○元龜中大友宗麟外教酒色ニ溺レテ將士離叛シ日向耳川ノ大敗アルニ及ビ島津義久其臣平田美濃守ヲ中津ニ遣シ其向背ヲ問フ仍テ中津ハ直ニ之ニ屬セリト云

宗麟西教ヲ信シ麾下亦之ヲ奉スルモノ多ク戰克テハ直ニ其地ノ社寺ヲ燒破シ封田ヲ奪ヒ僧侶ヲ殺逐ス宇佐彦山清水寺長谷寺等ノ靈場前後皆兵變ニカレリ○以上此時代ノ史ヲ按スルニ中津ノ地ハ中津或ハ中津川ヲ姓トスルモノ及重松橋本田中矢野大江等ノ五氏迭ニ立チテ領セシ

モノ、如シ而シテ元龜中ヨリ荒卷忠宗荒卷莊ヲ賜ハラルトノ事荒卷家ノ系圖ニ見ヘタリ忠宗ハ重松義重ノ弟ナル由サレハカ、ル豪族此時代中此地ノ統領トナリ時ノ守護國守ニ屬セシナラン

往古中津ノ人口戸數産物租税及人情風俗等更ニ詳ナルコト能ハズ而シテ其宗教ハ佛教渡朝以來漸次ニ蔓延シ一時ハ天台宗盛ニシテ東林寺以下古刹宗ナリ其後大友宗麟西教ヲ奉スルヨリ天主教亦次第ニ流行シ其信者頗多カリシト云

此時代中ニ創起セル神社ノ有名ナルモノハ先龍王豊日別宮ハ縁起ニヨレハ豊日別命ノ祀ル處ニシテ豊前志ニ祭神ハ豊玉彦豊玉姫安日雲磯長ヨリ豊日別宮アリ云々トアルハ非ナリト痛ク古史傳ニハ之ヲ知ラスシテ豊前中津ニ邊立包翁(山口縣ノ人ニシテ當時日本著名ノ國學者タリ)ハ此説ヲ贊成セリ案スルニ豊前志ノ著者ハ元ト大江社ノ祠官ニシテ竜王社トハ歎ナ

天崇天主
神 社
關 無 濱

レハ其説一概ニ信スヘキニアラサレ其説ク處頗ル割切ニシテ且古史傳ノ説亦聊疑意ヲ存スルヲ見レハ縁起ノ説モ妄リニ信スヘキニアラズ兎ニ角異説ノアルガマ、中津草創以來ノ古社也天徳ノ往時ヨリ毎年盛ヲ掲ケテ世ノ參考トス、中津草創以來ノ古社也天徳ノ往時ヨリ毎年盛ナル祭典アリ而シテ此社地ヲ龍王濱又暗無濱ト稱シ古松高ク踈生シテ精砂遠ク連リ風光ノ美三保高砂ノ勝地ニ讓ラス柿木人麿ノ歌アリ云ク「わさも子があかも泥ぬて植へし田を蒔りて納めんくらなしのはま」ト嘗テ黒田氏ノ時大塚ヲ濱涯三里ノ間ニ並ベ置キ號シテ亂概石ト云一ハ海潮ヲ防キ一ハ要害ヲ堅クスル也小笠原氏ノ時ニ及ヒ此石ヲ名ケテ万歳瀬ト云今濱北一里十二丁余ノ海中ニ散在スルモノ之也又此地ヨリ東方沼海二里ヲ隔テ、山尻村ノ偏ニ間々濱アリ往古國史ニ顯レタル勝地ニシテ万葉集ニモ歌アリ云ク「豊國のま、れ濱邊のまさご地のまなほしあらば何か歎くん」ト○大江八幡宮ハ即往古ノ大江岡ニアリテ今壹津村ニ屬ス應神仁徳堯道ノ二帝一皇子ヲ祀ル處ニシテ天平勝寶中ノ創始也

今中津第一ノ名社ニシテ日野大納言資枝卿ノ歌ニ云ク「豊國の大江の岡
 又神垣の松も榮えね万世左^マ右^マ」下今社地ノ東ニ當レル民舎ノ傍ノ扇池
 ハ此社ノ舊蹟ナリト云○中津權現ハ春日明神ヲ祀ル處ニシテ頗古社ト
 稱シ多ク舊記ニ見ル處ナレト云○既ニ廢亡シテ今其社地ダニ知ルコト能ハス
 豊前志ニハ現ニ鈴熊山ノ東麓ニアル一小祠是ナル乎トアリ○六所宮ハ
 新魚町ニアリテ社説ニヨレハ天慶四年小野好古等ノ加茂貴船稻荷松尾
 四社ヲ合祀セルモノニテ後又明四年之ニ祇園天神^{産靈太神及伊ヲ合シ}
 タルモノ也加來元竜ハ細川氏豊前六郡ノ神ヲ祭レリト云ヘト豊前志ニ
 ハ否細川氏ハ豊前八郡及豊後二郡ノ太守也何ヲ以テカ其領内六郡ノミ
 ノ神ヲ祀ルヘキ理アラシキマト痛ク之ヲ駁セリ○諸町蛭子神社ハ社説ニ
 ヨレハ元和二年細川忠興ノ祀ル處也○寺院ノ此時代中ニ創立セシ有名
 ナルモノヲ擧ケレハ東林寺^{禪宗臨濟派、妙心寺、地藏院、町松岩寺末、寺町}
 末鷹匠町ニアリ

寺院

ニアリ、重松氏系圖ニ仁治二年僧ト共ニ僧仁聞ノ刻セル佛像ヲ安置ス最
 圓爾本院及東林寺ヲ開クトアリト共ニ僧仁聞ノ刻セル佛像ヲ安置ス最
 古刹ニシテ往古東林寺ハ七堂伽藍アリシモ大友氏ノ亂ニテ兵燹ニ罹レ
 リト云○明連寺^{真宗西派、本願寺}ハ僧了空ノ開基ニシテ了空俗名ハ中津
 ノ主重松盛俊五代ノ孫義房ナルモノニテ本願寺巧如上人ニ從ヒ應永ノ
 頃本院ヲ中津川中小路ニ開ク其後黒田氏築城ノ時櫻町ニ替地ヲ命セラ
 ルト云而シテ現今ノ堂宇ハ文政九年三月ニ建築竣功セルモノ也徳勝
 寺^{天正十四年大友宗麟、善教寺ノ開基、僧深了、光善寺、慶長中僧了ノ三寺ハ宗規綱}
 領頒布前マテ木寺ノ寺中ナリシ○願慶寺^{真宗西派、本願寺}ハ永正十二年
 僧願慶ノ開基○安隨寺^{真宗東派、本願寺末}ハ弘治元年長尾晴景ノ臣タリシ僧安隨ノ
 開基○吉祥寺^{真言古義派、仁和寺末}ハ前ニ出ツ○其他明王院^{真言古義派、報恩寺}
 門院^{真言古義派、高野山金剛、等覺院、真言古義派、仁和寺、利生院、真言古義派、}
 正路浦^{真言古義派、高野山金剛、等覺院、真言古義派、仁和寺、利生院、真言古義派、}
 アリ、休閑院^{禪宗臨濟派、妙心寺末、南の丁ニアリ、等ハ其創始ノ年月詳}
 僧仁聞刻スル處ノ觀音ヲ安置ス、等ハ其創始ノ年月詳

ナラサレハ蓋此時代中ニ相違ナシ

第三編

中世紀

中世紀ヲ四回ニ分ツ第一ハ天正十四年ヨリ慶長五年マテ黒田氏治世十五年間第二ハ慶長五年ヨリ寛永九年マテ細川氏治世三十三年間第三ハ寛永九年ヨリ元禄十一年マテ小笠原氏八万石ヲ領セシ六十七年間第四ハ元禄十一年ヨリ享保二年マテ小笠原氏四万石ヲ領セシ二十年間トス而シテ又此四回ハ自二期ヨリ別ル第一期ハ中津文化開發ノ時期ニシテ第二期ハ中津文化發達ノ時期トス尙之ヲ詳言スレハ第一期ハ黒田細川二氏前后五十年間ニ去就

紀元二二四
西曆一五八

ノ其間戦争及新法令發布城市建设殖民等各種ノ新大事業ヲ起シ來リテ豊前全國ヲ震動シ其人民ノ舊來ノ有様ヲ一變シ且國內各部ノ力ヲ殺キテ漸ク其主權ヲ我中津ニ集メ中津ヲノ豊前國內ノ中心タラシムルニ至リシ時期トス第二期ハ則小笠原氏ノ治世ニ當リテ前期ニ啓發スル所ノ文化ヲ益大ニ發育セシメ中津ノ如キハ街衢益整頓シ交通自在ノ口増殖生業富般之ニ加フルニ文學宗教亦興隆ノ社會ノ秩序大ニ整ヒ眞ニ一都邑ノ面目ヲ備フルニ至レル時期トス故ニ本篇ハ頗愉快ナル記事多シ請フ讀者樂テ之ヲ讀マレヨ

第一章

中世紀第一 (黒田氏治世間記事)

天正十四年黒田孝隆勸解中津ニ入ル始大友氏世々九州探題ヲ以テ威ヲ西

◎ 黒田氏

◎ 四十四

黒田如水入
 國ニ震ヒシガ宗麟義統ノ代ニ至リ兵威大ニ擡テテ原田立花龍造寺等ノ諸氏皆自立シ且島津氏延元ノ比足利尊氏ヲ助クルノ功ヲ以テ亦九州探題別揆ノ格ヲ有シ加フルニ父祖五百年ノ積威ヲ籍テ荐リニ九國ヲ蠶食スルヨリ大友氏ノ驚懼甚シク原田以下ノ諸氏ト合從ノ纒ニ防拒ノ計ヲ爲シ而シ自上下洛ノ之ヲ豊臣氏ニ訴ヘ且屢々使ヲ遣ハシ其西征ヲ促ス此時ニ當リテ秀吉方ニ天下ヲ平ダ全國ノ諸侯皆入朝セザルモノナキモ獨北條氏直關東ノ險ヲ憑ニ島津義久西南ノ阪ニ據リ更ニ順服ノ風ナキガ故ニ此歲毛利氏ニ命シテ大友氏ヲ助ケ孝隆ヲ遣ハシ監軍トシ以テ島津氏ヲ豊前ノ間ニ討セシメ尋テ翌年三月終ニ意ヲ決シ自步騎十五萬ヲ卒ヒテ豊前ニ着シ先兵ヲ分テ沿道ノ諸城ヲ陷レ直ニ鹿兒島ニ臨ム五月義久降ヲ乞フ秀吉之ヲ許シ六月軍ヲ班ヘシテ大宰府ニ至リ大ニ功罪ヲ論シ豊前國宇佐下毛上毛築城仲津京都ノ六郡十六万石ヲ黒田孝隆ニ賜ヒ中津ニ居ラシム

小倉城

宇都宮跡所
反ス

此時企救田川ノ二郡ハ毛利勝信之ヲ領シ小倉ニ居レリ小倉城ハ正和ノ比其地ノ指月菴ナル寺院ヲ足立山ノ下ニ移シ其跡ニ城タルモノナリト云○黒田ノ中津ニ入リシハ宇佐郡記中津記其他ノ諸書盡ク天正十三年ト記シタレモ其十四年ナルコト孝隆ノ碑銘ニ明也ト重春ハ曰ヘリ

是時ニ際リ六郡ノ諸城主其數大小百數十ニ及ブト雖多クハ黒田氏ノ風ヲ望ミテ歸順セシガ獨茅切城主宇都宮鎮房城井ノ堅城ニ據リテ敢テ降ラズ始宇都宮氏文治元年後鳥羽院ノ宣旨ヲ以テ豊前國ヲ領シ城井ニ在城セシ以來茲ニ十八世戰國ノ間ニ居ルト雖外ニ一尺ノ地ヲ掠ムルヲ欲セス内ニハ士ヲ愛シ民ヲ撫シ文武生産ノ道ヲ勵ミ天下暗黒ノ時代ニ據ノ上下竊ニ太平ヲ樂メリ偶秀吉西征ノ令下ルニ及ビ鎮房病アルニ會ス仍テ子朝房ヲノ軍ニ從ハシム事平グニ及ビ秀吉朝定ヲ伊豫ニ封ズ鎮房曰ク豊前ハ疇昔父祖院宣ヲ受ケシ以來賴朝義滿兩府猶之ヲ賜ハリテ今我祖宗墳墓ノ地ナリ願

クハ永ク此國ヲ領セン伊豫ハ我望ム處ニアラザルナリト朝房己ムヲ得ズ
 印書ヲ秀吉ニ奉還ス秀吉大ニ怒リ更ニ封スル處ナクノ歸洛セシカバ鎮房
 父子カヲ失ヒ之ヲ毛利勝信ニ謀ル勝信之ヲ憐ミ己ノ領地田川郡赤郷白土
 襟原成光ノ三村ヲ給ソ此ニ居ラシム既ニ朝房父ヲ勸メテ曰ク吾輩碌々
 永ク此ニ幽居セハ恐クハ他日毛利家ノ旗下トナラン勇士豈空シク草木ト
 共ニ朽腐センヤト鎮房之ヲ然リトシ十月旗ヲ舉テ城井城ニ向ヒ黒田ノ守
 將大村助右衛門ヲ逐ヒ大ニ守備ヲ修メテ之ヲ守ル下毛郡池永城主池永重
 則左馬長岩城主野仲重兼頭兵庫大畑城主賀來統直守安藝犬丸城主犬丸越中守
 福島城主福島佐渡守上毛郡日隈城主日隈直次郎小次郎宇佐郡高家城主中島統
 次小倉城主渡邊統政頭左馬等十余人皆紀井ニ應シ斷然黒田ト相對シ大ニ軍
 備ヲ修ム是ニ於テ孝隆之ヲ秀吉ニ報シケレハ秀吉乃毛利氏ニ命シ孝隆ヲ
 助ケ之ヲ討タシム十一月孝隆毛利ノ援兵ヲ合セ二万騎ヲ以テ長政ニ授ケ

豊前諸城主
反ス

城井ニ向ハシム大野正重小先鋒トナリ毛利ノ援將勝間田彦六左衛門二陣
 トナリ城井ノ山脈ニ連リタル岩丸山ニ軍シ戰ヲ挑ム朝房預メ兵ヲ罅中ニ
 伏シ長政ノ全軍進テ山ニ登ルニ及ヒ俄ニ起リテ左右突撃シ之ヲ深谷ノ間
 ニ擠ス黒田ノ軍大ニ驚キ且地理ニ暗キヲ以テ後藤野村栗山井上毛利等ノ
 勇士奮撃血戦スト雖全軍終ニ散亂シ敗死スルモノ八百六十四人先鋒ノ將
 小辨城兵鹽山内記ニ殺サレ勝間田亦新具次郎ナルモノニ斬ラレ長政僅ニ
 五十騎ト馬嶽ニ向テ敗走ス時ニ城兵ノ追撃最甚シク馬嶽ニ達スル比從兵
 殘ルモノ獨八騎ノミ城井ノ群臣馬嶽ヲ襲ヒ長政ヲ渡ムコトヲ乞ヘ且鎮房許
 サズ曰ク我黒田ト怨ナシ只城ヲ守リテ公命ヲ俟ツノミト長政中津ニ歸リ
 且憤リ且懣チテ曰ク我再弓箭ヲ手ニセズト將ニ誓フ切ラントス孝隆笑テ
 曰ク凡武將ノ敵ニ勝ツ其法三アリ一ニ曰ク勇武ヲ以テ之ヲ制ス二ニ曰ク
 和親ヲ以テ之ヲ欺ク三ニ曰ク金玉ヲ以テ之ヲ驕ラス今戰利アラズト雖我

黒田字部宮
爾家和隆ス

和親ヲ鎮房ニ結ヒ之ヲ滅サソフ三年ヲ出テスト之ヨリ遙ニ密謀ヲ秀吉ト
 議シ陽ニ和親ヲ結ヒテ翌十六年鎮房ノ女千代姫ヲ以テ長政ニ嫁セソフヲ
 約シ且印書ヲ秀吉ヨリ下ノ封邑ヲ與フル故ノ如クシ以テ城井ノ君臣ヲ安
 ヒシム○十六年正月十一日中津城ノ建築ヲ創ム始孝隆ノ中津ニ入ルヤ大
 塚山ノ舊壘ヲ修メテ之ニ居リシガ是ニ至テ更ニ丸山ノ六所宮及ヒ神官重
 松氏等ノ邸ヲ他ニ移シ求菩提山ノ僧玄海ヲ召シテ地鎮ノ祈ヲ爲サシメ民
 夫ヲ徵ノ地ヲ平ケ溝ヲ濬リ壘柵ヲ結ヒ且樓門至塙ヲ築キテ稍城廓ノ構ヲ
 ナシ號ノ丸山城ト呼ヒ以テ居城トス
 大塚山ハ如水ノ久シク住セシ壘ニノ今如水井アリ予其井側ノ石ニ當時
 ノ年号ヲ刻セルヲ見タリト重春ハ曰ヘリ又丸山ハ豊前志ニ片端殿町新
 魚町邊トアリ按スルニ今片端殿町及ヒ城内ハ盡ク丸山ニシテ金谷菴津
 ハ大江岡ト稱シ深林鬱茂シテ兩丘相連リ東南大家川ニ臨ミ西方中津川

中津城創建

津城名稱

ヲ控ヘ大江宮六所宮等其間ニアリシナラン又當時黒田氏ハ六所宮ヲ丸
 山ノ南端ナル今ノ新魚町ニ移セルナリ○黒田ハ秀吉ヨリ國郡切取ノ命
 ヲ受ケ居リシト云切取トハ戰國ノ時勇士ヲ封スルノ一法ニシテ其各自
 ノ兵力ヲ以テ討平ゲシ敵國ハ盡ク之ヲ與フルノ法ナリ○諸書ニ云中津
 城ハ地名ニ依リテ丸山城ト稱シ郷名ニ依テ大家城ト稱シ又如水犬丸越
 中守ノ居城ヲ毀テ其材木ヲ以テ中津城ヲ修造ス故ニ戰勝ヲ記スルガ爲
 小犬丸城ト稱スト又城地ノ扇形ニ似タルヲ以テ扇城ト稱ス又扇ニ因メ
 要城ト号スト然レモ後年小笠原家ノ代ニ至リ屢妖怪アルヲ以テ要城ノ
 名ヲ廢スト蓋要ノ字ヲ分ツトハ西ノ女ニシテ西ノ女ハ中津ヨリ見レハ
 城井氏ノ女ニ當ルヲ以テ之ヲ不祥ト爲シ斯ノ如クセシナラン而シテ與
 平家ノ時ニ及ヒテハ專屬城ト稱シテ他名ヲ呼ハズ○中津記ニ云此城文
 錄年中マテハ大家三郷トテ三村ニ分テ三屋敷ナリ故ニ孝隆中津ニ入

中津二天守
ナシ

リシ時先今ノ京町中の辻ニ當ル伊豫屋彌右衛門ト云町人ノ宅ヲ本陣ト
シテ此城ヲ修造セリ云々○一説ニ云黒田氏ノ時マデハ天守アリタレモ
一國一城ノ外天下御制禁ノ時之ヲ毀チシナリ其故ハ如水豊後陣ノキ勘
定奉行相原一茶ヲシテ天守ニ積ミ置ク處ノ金銀ハ皆出シテ之ヲ奉行人
ニ與フベシトアレバナリト然レモ諸説ヲ參考スルニ黒田氏ハ中津ノ舊
壘ヲ修メテ城廓ノ体ニ成シタルノミトアリ且閑居草摺記ニモ「黒田ハ城
ノ土手カキアゲ松ナト裁ヘタルノミナリ」ト記セルヲ見レハ天守アリタ
リトハ誤ナラソ乎藤田順則曰ク天守アリシハ甚疑フベシ恐クハ櫓ノ下
ナラソト後人尙能ク考フベシ

長政諸城ヲ
攻ム

全年三月長政ヲシテ坂城征討ノ將帥トシ栗山四郎右衛門安田五右衛門池
田九兵衛後藤又兵衛黒田兵庫頭全圖書井上九郎右衛門野村市右衛門等ヲ
福師トナシ先近隣ヨリ平グベシト五日歩騎三千余ヲ以テ日隈城ニ薄ル城

日隈城ヲ攻

緒方川底ニ
城ヲ居ル

池永城ヲ攻

主直次預ノ其報ヲ聞キ乃小栗村岡等ノ老將ニ命ジ城ヲ出デ、防戦セシム
時余ニ及ブ比川底城主城井知房如法寺孫四郎ト兵一千騎ヲ以テ來リ援フ
長政軍ヲ分テ前後ノ敵ヲ撃チ斯須ニシテ其援軍ヲ破リテ知房ヲ殺シ益城
ニ迫ル城殆陥ラントス直次悞レテ降ヲ乞フ則之ヲ許シ尋テ緒方川底ヲ屠
リテ上毛郡ヲ平グ直ニ池永城ニ向フ城主重則族黨及大貞ノ神官八百五十
人ヲ以テ之ヲ守リ敵來ルヲ觀門ヲ開キテ防禦ス既ニシテ松本次郎今永内
侍等股肱ノ勇士悉死シ樂所別當承議ナルモノ鉄棒ヲ以テ奮戦シ多ク黒田
ノ兵ヲ傷クト雖終ニ亂兵ノ間ニ戦死セシカハ城中既ニ拒クニ術ナク重則
終ニ中野、東、徳永、一松、等ニ命シテ敵ヲ防ガシメ嫡子乙次郎ヲ三藏法印ニ
托シテ城ヲ遁レシメ一族二十余人ト皆自殺ス實ニ三月十日ナリ此日重則
ノ妻薙刀ヲ提ケテ戦既ニ酣ナルキ城中ヨリ走り出テ自名乗テ敵ニ當リ瞬
時ニ十三騎ヲ斬殺シテ城ニ走り入レリト今傳ヘテ奇談トス同二十日福島

福島大旗ニ
城ヲ攻ム

大丸城ヲ攻
ム

正行寺

長岩城ヲ攻
ム

◎黒田氏

城ニ向ヒケレハ城主佐渡守削髮シテ降ヲ乞フ則之ヲ許シ二十一日加來村
 大旗城ヲ攻メント大貞原ニ陣シ軍ヲ五隊ニ分テ糧水ノ道ヲ絶チ四面齊
 ク城ニ薄ル城將加來統直堅ク守リ新野駿河守加來勘助正木孫兵衛等ヲシ
 テ之ヲ拒カシム勘助直ニ門ヲ開キ出テ、後藤基次ト戰ヒ繼テ灘七郎辦城
 小六塚本次郎藤木金彌等鋒ヲ揃ヘテ突出シ決戰數合勝敗未決セズ時ニ黒
 田ノ兵火箭ヲ以テ頻ニ城ヲ射撃セシカバ城兵大ニ困ニ前門忽守ヲ失ヒ敵
 兵悉城ニ入ル統直事ノ去ルヲ觀テ出テ戰ハントス新野馬ヲ扣ヘテ豊後ニ
 遁レシム秣大炊助兵ヲ幕の峰ニ伏セ統直ノ過クルヲ待チ之ヲ殺ス此ヨリ
 更ニ大丸城ニ進ニ城主結城越中守族黨二百五十騎ト共ニ籠城シケルヲ長
 政數千ノ勝兵ヲ以テ之ヲ圍ムガ故ニ須時ニシテ城ヲ陷レ亦大炊助ノ計ヲ
 以テ越中守ヲ深氷村瑞泉寺ニ繫チ之ヲ殺ス
 福島佐渡守ハ剃髮シテ祐了ト號シ上洛シテ教如上人ニ從ヒ後長久寺ト

稱ス大旗城ハ源義經ノ築ク處ニシテ加來惟興始テ此城ヲ守リ統直ニ至
 ルマデ二十二代ナリ○因ニ記ス永添村正行寺ハ俗ニ黒田ノ爲ニ亡ボサ
 レシト云ヘヒ之ハ天正七年野中兵庫頭當時ノ城主末廣對馬守正行ヲ攻
 メシニ正行剃髮シテ名ヲ妙玄ト改メ出降ル云々諸記ニ見ヘタリ
 左レハ長政破竹ノ勢ヲ以テ四月五日三千五百騎ヲ率ヒ大野ノ宮ニ陣シ遙
 ニ長岩城ヲ圍ム抑此城ハ津民莊ノ山中ニ在リテ後ニ峨々タル峻嶺ヲ負ヒ
 前ハ滔々タル大河ニ臨ミ懸崖絶壁所謂一夫守レハ千夫進ムヲ能ハサルノ
 要害ヲ有シ建仁年中宇都宮重房ノ城ク處ニ係リ世々強宗野中氏ノ居城タ
 リ是ヲ以テ長政輒ク近クヲ得ズ更ニ陣ヲ征ガ峰ニ移シ漸々城下ニ迫リ
 ケレバ城將重兼近隣ノ豪士一千五百五十人ヲ併セ上下死ヲ極メテ堅ク
 守リ以テ防戦ノ備ヲナス黒田ノ將堀尾與三衛門石松羽右衛門松熊藤三郎
 先ツ進テ城兵ノ拙木原ニ在ルモノヲ繫ツ是ヨリ兩軍迭ニ進ニ激戦三晝夜

◎第三編 中世紀

ノ久キニ及ビ將卒ノ死傷筭スルニ勝ヘズ伏屍山ノ如ク流血河ヲ爲ス黒田ノ將小口彌七郎津田才藏城將大池龜次郎甲斐七郎等共ニ戰死シ勝敗更ニ決スルコトナシ時ニ城中ヨリ野依主馬之助佐藤美濃守大神右衛門太夫等大砲ヲ以テ狙撃シ黒田ノ兵爲ロ死スルモノ三百余人然レモ元來數倍ノ大軍ナルヲ以テ竹楯巨板ヲ横タヘ諸隊交々進テ遂ニ追手ノ樓門ヲ破ル時ニ城中百富河内守俄ニ内應ヲナシ且後藤基次井上九郎右衛門等万軍奇傑ノ勇將黒田ノ兵ヲ指揮スルヲ以テ城遂ニ陥リ野中ノ舉族悉自殺シテ亡フ此日長政首級ヲ獲ルコト三百五十皆城外ニ梟シテ之ヲ辱ム斯クテ是ヨリ翌十七年春ニ及フ迄ハ領内處々ノ小砦ヲ破リテ悉之ヲ從服セシメシガ全三月一日時枝十太夫ヲ嚮導トナシ三千余騎ヲ以テ宇佐郡高家城ヲ圍ム城兵上下七百五十黒田ノ前軍城下ニ達スルニ及ビ射戰良久クシテ城將中島雅樂允同彈正忠高玄蕃允等百四十余人門ヲ開テ突出シ奮戰大ニ黒田ノ先鋒ヲ破

高家城ヲ攻

小倉城ヲ攻

ル既ニシテ諸將終ニ皆死傷シ而シテ黒田ノ兵益迫ル時ニ城將統次樓門上ヨリ指揮セシガ城兵悉敗走セルヲ觀怒リテ三人張リノ強努ヲ操リ長政ニ注キテ之ヲ射ル矢長政ノ鎧袖ニ中ル長政悞レテ後陣ニ退キ兵ヲ更々シテ疾ク攻メシム統次乃自出テ戰ハントス恆吉繼殿允其大友氏ニ倚ルベキヲ勸ム仍テ夜竊ニ向野ニ走リ其外戚松尾民部ノ宅ニ入ル民部之ヲ黒田ニ告グ追兵來リテ之ヲ圍ム統次民部ノ反覆ヲ怒リ忿激出テ戰テ敵十三騎ヲ殺シ屠腹シテ亂槍ノ間ニ死セリ先之小倉ノ城主渡邊鎮弘世々大友氏ノ旗下ナルヲ以テ敢テ黒田ノ命ニ服スルヲ欲セズ嚴然籠城ノ備ヲナセシガ三月五日長政兵ヲ分テ二トナシ一ハ糸口原ヨリ一ハ木行坂ヨリ進ニ城ヲ圍テ之ヲ射ル城主統政精銳數十人ト共ニ門ヲ開テ突出シ直ニ長政ノ麾下ニ進テ短兵急ニ接戰ス長政悞レテ軍ヲ退ク迄ニ之ヲ圍ムト數重以テ之ヲ苦ム統政事終ニナスベカヲザルヲ知リ將ニ自殺セントス其將山下傳六兵衛

諸城皆降ル

利害ヲ陳シテ降ヲ勸ム統政之ヲ容レ使ヲ遣リテ其意ヲ述ブ長政直ニ之ヲ許シ陣ヲ時村ニ移シテ酒ヲ將士ニ賜ヒ之ヲ勞ス偶土岐修理允赤尾源三郎來リ降ル尋テ土井ノ城主萩原種親亦降ヲ乞フ長政皆之ヲ許シ遂ニ軍ヲ中津ニ班ス○四月二十日黒田父子宇都宮鎮房ヲ中津ニ殺ス始兩家ノ婚ヲ約スルヤ長政先城井ニ赴キ其禮ヲ修メ且贈ルニ金帛ヲ以テシ使者往來驩ヲ結フ一甚厚シ孝隆仍テ宇都宮父子ヲ中津ニ招キ更ニ之ヲ饗セント既ニ日ナ尅シテ期ヲ約ス秀吉又朝房ニ命シテ肥後ニ至タリ佐々氏ノ後事ヲ治メシム鎮房中津ニ答フルニ朝房肥後ヨリ歸ルヲ俟テ而シテ後往カソフヲ以テス孝隆事情ヲ陳シテ期ノ延ハスベカラザルヲ以テシテ之ヲ強フ城井ノ君臣衆議決セズ老臣芳賀四郎右衛門等其兩主同時ニ城ヲ出ツルメ不可ヲ論スレヒ鎮房遂ニ意ヲ決シ後事ヲ老臣ニ委シテ父子各驍騎ヲ從ヘ相分レテ兩地ニ向フ是日孝隆城中ヲ警シメ預メ勇士ヲ帳内ニ伏シテ之ヲ侍ッ宴

宇都宮氏亡

紀元二二五
西曆一五九

如水豐後陣

半ニシテ孝隆信號ヲ示ス吉田六郎太夫毛利太兵衛曾我太郎兵衛等座ニアリテ杯ヲ執ル皆刀ヲ拔テ起テ直ニ鎮房ヲ斬ル其從臣皆戰死ス仍テ更ニ千代姫ヲ捕ヘテ獄ニ下シ其從婦數十人ト共ニ之ヲ廣津川原ニ磔殺セリ朝房亦肥後赤葉ニ至リ小西行長ニ殺サルト云長政之ヨリ自將トシテ城井ニ入リ其城ヲ襲テ宇都宮ノ舉族ヲ討滅セリ○慶長三年十一月長政朝鮮ヨリ凱旋ス○五年關原ノ役起ル是ヨリ前大友義統罪アリテ封ヲ失ヒ周防山口ニ漂泊セシカ之ニ至テ舊領ヲ復セント欲シ三成ニ黨シ秀頼メ命ヲ以テ檄ヲ兩肥豐筑六國ノ舊臣ニ傳ヘ大坂ヨリ海路直ニ濱脇ニ上陸シ先宗像鎮繼ヲシテ杵築城ヲ攻メシメ殆之ヲ陷レントス時ニ長政家康ニ從テ關原ニアリ如水中津ニ留守ス之ヲ聞テ直ニ兵ヲ發シ九月四日犬丸原ニ軍ヲ閱シ即日豐後ニ向フ其勢凡八千行々諸城邑ヲ取リ兵ヲ分テ杵築ノ急ヲ救ヒ而シテ石垣原ニ至リ實相寺山ニ陣ス十三日兩軍石垣原ニ會戰ス此役ヤ大友ノ兵鋒

頗銳ク黒田ノ兵爲ニ披靡シ死傷堆積勝算殆去ル然レモ黒田ノ部將井上六
 右衛門野村佐右衛門等指揮頗其宜ニ適ヒ且如水親至リテ其軍ヲ監セシテ
 以テ兵氣復大ニ振ヒ大友ノ名臣吉弘統幸以下盡ク戦死ス義統事ノナスヘ
 カラサルヲ觀テ將ニ自殺セントスルヲ如水諭ノ降ヲ納レシメ遂ニ之ヲ中
 津ニ檻致ス之ヲ世ニ如水ノ豊後陣ト云如水既ニ豊後ヲ平ゲ更ニ西向シテ
 毛利勝信ヲ小倉ヨリ逐ヒ筑前ヲ經テ久留米ニ至リ毛利秀包ノ居城ヲ取リ
 テ榎津ニ出テ加藤清正ト合シテ皆股ニ陣シ將ニ島津氏ヲ攻メントス時ニ
 關原ノ役既ニ終リ薩州亦家康ニ降ルト聞キ遂ニ兵ヲ引キ中津ニ歸ル○此
 冬長政父子關原ノ戦功ヲ以テ筑前五十二万石ニ封セラレ福岡ニ移ル
 吉弘嘉兵衛ノ墓ハ今石垣原ニアリ嘉兵衛ハ大友ノ名臣ニシテ義統國除
 ノ後ハ柳川ニ寓セシカ關原ノ役起ルニ及ビ義統ノ子義乘徳川氏ニ從ヒ
 美濃ニアルヲ聞キ之ニ起カント大坂ニ至ル偶義統ト豊後ニ還ルニ遇フ

黒田氏筑前ニ移ル

吉弘嘉兵衛

後藤基次

嘉兵衛之ヲ極諫メ聽カレヌ而シテ又棄テ去ルニ忍ヒズ遂ニ石垣原ニ奮
 戦シテ敵首二十ニテ擧ケ己亦重傷ノ爲自殺セントシタルヲ黒田ノ將小
 栗治右衛門ニ刺サレテ斃ル○後藤基次其邸ハ片端ノ西端舊大坂館城ヲ
 逃ル、ヤ復中津ニ還リ本郡金吉村ノ妾宅ニ潜居シ文字ヲ村童ニ教ヘテ
 其日ヲ送リシガ秀頼薩州ニ薨セシヲ聞キ大ニ落膽シテ再事ノナスベカ
 ヲサルヲ知リ一夜感狀寶器ヲ火キテ燈下ニ自殺スト云今同村伊福ニ其
 墓アリ正面ニ義弼智光居士ト記シ上ニ梵字アリ銘ニ云居士俗名ハ又兵
 衛何處ノ人タルヲ知ラヌ昔此村ニ來リ寓居スルコト三年其人ト爲リ志氣
 英威武徳俊高而シテ眼光人ヲ射ル憶フニ諸侯太夫ノ世ニ逆ヒ而シテ適
 居スルモノ乎承應三年正月二十九日夜劍刃ニ自殺ス之ニ因テ里人古ヲ
 慕ヒ新ニ石碑ヲ建テ冥福ヲ資助ス寶曆十三癸未歲六月願主金吉村伊福
 茂助ト蓋コレ徳川氏ヲ憚リテ碑銘ヲ隱昧ニセルナリ又因ニ記ス觀村六

觀村六助

助木田孫ノ墓ハ本郡槻木村ニアリ之レ六助ノ朝鮮ニ戰死セシ後里人ノ建テシモノ也本章記スル處ノ兵數甚多ケレドモ恐クハ古書ニハ夫卒ノ類マテヲ算入シテ記セルナラシテ死傷者ノ數ニ至テハ仮令敢爲接戰ノ余ニ出ツルトスルモ稍多ニ過グルガ如シ只未ダ確証ナキガ爲須ヲ古書ノ儘ヲ寫セリ

第二章

中世紀第二

(細川氏治世間記事)

慶長五年冬細川忠興越中全忠利内父子興州波關原ノ戰功ヲ以テ丹後田邊十一萬石ヨリ轉シテ豐前八郡及豐後國速見國東ノ二郡三十二萬石ヲ徳川氏ニ受テ十二月二十六日小倉城ニ若シ忠興ハ之ニ居リ忠利ハ中津城ニ住ス○六年沿ク領内ノ田畑山林池溝原野ヲ檢量シテ始テ地籍ヲ作ル○九年忠興祝髮シテ三齋宗立居士ト號シ家ヲ忠利ニ讓リテ小倉城ヲ興へ自六萬

檢地

細川氏入國

○寛元二二六
○西曆一六〇

○寛元二二七
○西曆一六一

石ヲ領シテ中津ニ退隱ス此歲三齋領内ノ古城趾ヲ觀ント沿ク十郡ヲ巡視シ社寺舊蹟ノ廢亡ヲ興シ又民ノ疾苦ヲ問フ○十二年夏大ニ旱シ宇佐郡最甚シ忠興痛ク之ヲ憐ミ夫役ヲ領内ニ課シテ元重村ニ堤防ヲ築ク池ノ周圍三十余丁號シテ小倉池ト云奉行長岡内膳杉生佐兵衛大庄屋麻生禪爾後近傍二十許村ノ灌溉甚ダ便利ヲ極ムルニ至レリ○元和元年夏大坂ノ役起ル忠興兵僅ニ三百ヲ率ヒ海路ヨリ直ニ大坂ニ至リ忠利ハ宗徒ノ大軍ヲ卒ヒ陸行シ九月九日大坂ニ着ス時ニ其前日ヲ以テ城既ニ陥リ秀賴父子自殺シテ事全ク平キ居レリ初メ忠利切ニ海路ヲ取ランコトヲ乞ヘモ忠興許サズ是ニ至テ大ニ恐恨セリト云

宇佐郡記等ニハ細川領地三十九萬石トアリ或ハ云四十萬石ト○事跡考及中津記ニハ忠興小倉ニアルコト二十年其後祝髮シテ中津ニ移リ居ルコト十三年ナリ云々又云大坂ノ役ニ忠興ハ小倉ヨリ海路ヲ進ミ忠利ハ宗

中津城建築

徒ノ大軍ヲ卒ヒテ陸行シ期ニ後ル云々
 元和六年秋中津城ノ修築工ヲ竣フ本丸ノ廣五千五步二三九ノ廣凡一萬六千七百九十步大手西門黒門櫓木北門外城ノ西東北ニアリ土椎木鉄門水門牙城ノ東北西ニアリ而シテ池溝深ク防壁堅ク共ニ内外城ノ周圍ヲ繞リ牙城ノ北方高キ處ヲ上段ト云以テ藩主ノ居處トナシ其南方低キ處ヲ下段ト稱シ以テ藩廳トナス其外廓ハ市街ノ四邊ヲ以テ限トナシ西ニ小倉口廣津口南ニ金谷口島田口東ニ斬瀬口大塚口海濱ニ船宮口アリテ深濠土堤亦之ヲ繞ル始三齋中津ニ入ルヤ城廓甚ダ狹隘ナルヲ觀遂ニ夫ヲ發シテ工ヲ起シ黒田氏營ム處ノ規模ヲ弘メテ大ニ之ヲ修メ又更ニ金谷堤ヲ築キテ大家川ノ流ヲ塞ギ樋ヲ藍原村大堰手ヨリ埋メテ山國川ノ水ヲ城内ニ引キ奉左馬行大工頭孫且町割ノ令ヲ出シテ十助堀ヲ埋メ此ニ新博多町ヲ作リテ大ニ城市ノ面目ヲ改ム

城内ノ水道

金谷堤

中津市街

中津稱呼考ニ云三齋觀永堤ヲ築ク自出テ、工ヲ督ス本陣ヲ上小路ニ構ヘ金屏風ヲ聯チテ壁トナシ黃帷ヲ張リテ牆トナス噉ニ先チ出テ星ヲ戴テ入ル衆遙ニ之ヲ望ノハ金壁旭日ニ輝キ黃雲夕陽ニ映ス是ヲ以テ金屋茶亭ト號ス是ヨリ降テ終ニ此地ノ地名トナシ稱シテ金屋ト云後証江ニ訛シ又金谷ト變スト○豐前志ニ云中津ノ市街ノ全ク成就セシハ寛永ヨリ寛文ノ際マデ三十四年ノ間ナルベシサテ其比ヨリ近里或ハ近國ヨリ人々集リ來リテ終ニ町ヲナセシガ故京町博多町豐後町姫路町等ノ名アリト寛永ハ小笠原家中津ニ入リシ比ナレト予案スルニ細川家町割ノ時新古博多町京町米町姫路町豐後町新魚町角木町諸町掘町堀川町船町古魚町櫻町ノ十四町トセシモノ歟外ニ枝町六條アリ武家町モ當時建設也其以前迄ハ上小路中小路下小路等ノ町名モアリシ今聞ク處ニヨレハ上小路ハ今ノ金谷中小路ハ今ノ諸町新魚町下小路ハ今ノ下小路出町邊

◎細川氏

◎六十四

コソ接スルニ黒田氏丸山大江岡等ヲ拓キテ城市ヲ造リ初テ此等ノ町名ヲ附セシナラン○藍原村大堰手ハ三口ニアリテ堰ノ口三ツニ分ル西ノ口ヨリ發スルモノハ宮永村ヲ經テ島田村ノ東ヨリ北流シテ海ニ入り金剛川ト稱ス東ノ口ヨリ發スルモノハ宮夫村ノ東ヲ經テ自見村ノ西ニ出テ海ニ注キ柳川ト云其中流ハ即水道ニシテ中津城市ノ飲料ニ供セラル此堰ハ保延元年築キシ處ニシテ沖代千余町歩ノ田園ニ灌漑シ後世與平家ノ時ニ及ビ此田地ノ高殆八千七百石ニ達ス其廣大ナルヲ知ルベシ始宇佐神領ノ内ナリシガ中古湯屋彈正相原内記一松六郎兵衛万田左京小畑四郎右衛門中殿八郎兵衛宮永左兵衛七人ニ之ヲ分賜ス然ルニ此地洪水ノ爲堰ヲ流潰セラル、多ク民皆大ニ之ヲ困苦ス仍テ七八ノ地頭其處置ヲ識シタルニ湯屋彈正謂テ曰ク昔ヨリ人柱ヲ以テ堰ヲ築クキハ崩潰ノ憂ナシト今予輩苟モ民ノ父タレバ一命ヲ損テ、其苦ヲ救フハ仁

鶴市神社

義ノ道ニアラズヤト衆之ヲ然リトシ嗣ニ代フルニ各袴ヲ水ニ投ジ先ツ沈ミタルモノ死スベキヲ約ス彈正ノ袴先沈ム其家臣古野源兵衛ノ娘ニ鶴ナルモノアリ彈正ニ請フテ曰ク妾等數世高恩ヲ辱フス然ルニ今君ノ死ヲ座視セハ何ヲ以テカ他人ニ面スルノ顔アラシヤ願クハ妾カ身ヲ以テ君ニ代ラント其子市太郎時ニ十三歳亦曰ク兒幼ナリト雖男子也若君母ヲ殺サハ世人兒ヲ呼ヒテ怯夫トナサン願クハ兒之ニ代ラント終ニ全年八月十五日母子共ニ水底ニ沈ミ人柱トナレリ之ヨリ堰堤全ク堅固ニシテ百世万民ノ生ヲ安スルニ至ル今三口ノ丘上ニ鶴市神社ト稱シテ宏麗奇瑞ノ靈社アルモノ即此忠臣孝子母子ノ靈ヲ祠レル處ナリ因ニ記ス藍原村ハ明治二十年隣村永添村ニ附屬セルヲ以テ其名絶フ後人之ヲ誤ルヲ勿レ

寛永九年徳川氏特ニ細川父子積年ノ武功ヲ賞シテ肥後國ニ封ジ五十四萬

細川氏ノ政

石ヲ賜フ是ニ於テ忠利小倉ヨリ熊本城ニ移リ忠興亦中津ヨリ同國八代城ニ入ル三齊政ヲ治ムル公明果決毫モ偏私スル處ナシ其憲法ニ云凡武家町人ト爭論スル時ハ若是非應對セハ武家ヲ罪スベシ何トナレハ武家ハ町人ニ比スレハ是非ヲ辨フルモノナレハナリ町人百姓ト爭論スル時ハ若是非應對セハ正ニ町人ヲ罪スベシ何トナレハ町人ハ百姓ニ比スレハ見聞モ智慧モ優リ且武士ノ儀法ヲモ觀馴レテ是非ヲ辨フルト多キガ故ナリト三齋晩年最西教ヲ忌ミ士民ノ之ヲ奉スルモノハ罪ヲ三族ニ歸シテ之ヲ誅夷シ刑殺甚多シ是ヲ以テ一時頗ル殘忍ノ譏アリシガ大友以來蔓延セン天主教此ニ至テ全ク其迹ヲ中津ニ絶テリト云三齋又頗父函齋ノ風アリテ歌道ノ奧義ヲ極メ且典故ニ通シ兼テ茶儀散樂ヲ好ム世ニ細川流ノ式法ト稱スル一弟ノ故ヲ以テ中津ニ住スルコ前後十數年其間百事常ニ清淡ニシテ奢侈驕傲ノ風ナク民皆之ヲ悅服セリ

三齊佛ヲ信ス

耶蘇教

三齊最佛ヲ尊ヒ小笠原家累代又頗ル佛寺ヲ敬セシ故市内及領内ノ寺院多ク此時代ヨリ盛昌ニ赴キ新ニ堂宇ヲ建立スルモノ亦少カラスト云而シテ茲ニ豐前ニ於ケル耶蘇天主教ノ景况ハ之ヲ一言セサルヘカラス抑大友宗麟父子ノ該教ヲ信仰シタル頗末ハ皆人ノ知ル處ニシテ實ニ宗麟ガ該教ヲ昇認センハ遠ク天文ノ末年ニアリ宗麟ハ深ク内亂ノ起ラント盡シ且家族及臣民ノ之ヲ奉教スルコトハ默許スレトテ躬自ハ天正爾來宣教師ノ初年家ヲ其子ニ讓ルマテ敢テ公然タル信者トハナラサリシ豐後及我豐前ヲ以テ家トナヌ者甚多ク爲ニ天正ノ初年ニハ既ニ二豐ノ信者數萬ニ及ヘリト云斯クテ黒田氏ノ中津ニ入ルヤ專ラ其力ヲ國郡經畧ノ一點ニ注キ且此國ニ居ルコト歲尙甚淺カリシガ上ニ征韓從軍等ノ事モアリケレハ未心ヲ宗教ニマテ及スニ至ラヌシテ止メリ故ニ該教ハ依然トシテ自然ノ成行ニ任シテ進歩セリ尋テ細川氏ノ入ルニ及テハ該教ハ大ニ同氏ノ政略ニ左右セラレテ消長榮枯幾回ノ轉變ヲ經タルガ

如シ西教史ヲ閱スルニ細川忠興ノ夫人明智氏ハ彼豊臣秀吉ガ始テ嚴令ヲ布テ該教ヲ禁セシ頃天正十四年頃ニ當リテ洗禮ヲ受ケタル人ナリケルガ元來忠興ハ佛教ノ信者ナレハ夫人ノ改宗ヲ痛ク慨嘆シ屢之ヲシテ復宗セシメシメテ計リタレハ夫人ノ信心堅固ニシテ遂ニ其志ヲ奪フコト能ハサルヨリ或時ハ憤怒シテ苛虐ノ待遇ヲナシ又或時ハ斷然之ヲ離婚セソトスルノ念ヲ發シタルコトナギニシモアラサレハ夫人ガ天成ノ國色ト其貞節婉麗ナル意行トハ遂ニ勇猛傲邁ナル忠興ノ心ヲ和ケテ室家ノ樂ヲ至ニスルコトヲ得セシメタリキ而シテ此夫人ハ慶長五年關原ノ役ニ會シ西軍ノ圍ム處トナリテ潔ク節ニ殉セシガ忠興ハ凱旋ノ後之ヲ觀テ悲哀痛楚ノ情ニ堪ヘス善美ヲ極メテ葬儀ヲ行ハシメテ已ノ嘗テ最憎惡セシ處ノ彼耶蘇ノ教師等ニ乞ヒ諸費ヲ供シ悲嘆ニ咽テ自葬儀ノ席ニ列座セリト云ヘリ夫斯ノ如ク夫人ノ改宗ハ大ニ細川一家臣屬ノ心ヲシテ該教ニ

傾カシメタレハ其殿中ノ女輩ハ勿論臣僚中多クノ信者ヲ續出シ且忠興モ之ヨリ稍心ヲ和ケテ厚情ヲ該教ニ盡スニ至リ而シテ封ヲ中津ニ轉スルニ及テハ中津滯留ノ宣教師「西班牙人ト」セセベです「テ」ルモノ直ニ忠興父子ニ昵近シテ之ヲ籠絡シタリケレハ爾來忠興屢資ヲ教會ニ投シ該教ノ爲周旋盡力セシコト抄カヲズ然レモ未幾クナラスノ慶長十五年此せずペでモハ病ヲ以テ中津ニ没シタリケレハ之ヨリ朝夕忠興ヲ德憑スルモノナク且忠興ガ一時該教ニ好意ヲ表セシハ全ク妻ノ愛情ニ絆サレタルノミナレハ當時該教禁止令ノ一層其嚴ヲ加ヘタル秋ニ當リ英明ナル忠興何ヲ以テカ能ク久シク一個ノ愛情ニ拘戀シテ將軍ノ好意ヲ傷ヒ元來已ノ好マサル處ノ該教ヲ保護スルガ如キ否策ヲ取ラシヤサレハせずペですノ死後ハ其該教ニ對スルノ處置全ク一變シテ年々該教信徒ヲ屠戮スルニ至レリ然レモせずペでモ死セシ時豐前ニハ此人ノ外尙中津

一人ノ宣教師及數人ノ傳導師傳導師ハ皆日本人ニテ宮永某ナド名乗ルモノアレハ中津近傍ノ人モアリシナアリ小倉ニハ四人ノ宣教師ト數人ノ傳導師アリテ此等ハ皆此以前ヨリ豊前國內ニ布教セシガ殊ニ彼せずハ日本ニアルコト三十四年間多クハ中津ニ住シテ此近傍ヲ宣教シケルガ故ニ當時豊前國內ノ信徒少クハ三四萬人ヲ下ルコトナカルヘク按スルニ當時豊後ニハ信徒ノ數十萬以上アリシト云而シテ又當時忠興該教徒ヲ處置スルニ當リ其領内ノ信徒甚多キニ畏懼スル處アリテ刑罰ヲ加フルコト能ハサリシトノ説アレハ以テ當時信徒ノ數ノ多カリシコト知ルヘ加之忠利ハ稍忠興ト異リテ衷心該教ニ親切ナル處アリケレハ飯令一方ニ忠興ノ猛盛ナル攻撃アルニ拘ハラスセトペデトノ死セシ翌年即慶長十六年ノ如キハ中津市街ノミニシテ一歳間ニ五百二十人ノ信者ヲ増シ該教ノ傳播ハ一時益猖獗ヲ極メタリキ然ルニ忠興ノ攻撃既ニ説ク處ノ如ク且該教禁止ノ令日ニ月ニ其嚴ヲ加ヘ忠利ノ力之ヲ奈何トスルコトヲ得サルヨリ後忠利モ亦國法ニ因テ已ムヲ得ス父子相共ニ該教

ノ撲滅ニ力ヲ盡スニ至リケレハ其刑殺ノ數ノ如キハ實ニ甚多クシテ之ヲ佛教徒ノ報告ニ徴スレハ前後殆三千人ニ及フト云豈驚クヘキ大數ニアラスヤ

第三章

中世紀第三 (小笠原氏前紀治世間記事)

寛永九年十二月十一日小笠原長次信濃播州龍野ヨリ中津ニ移リ八万石ヲ領ス長次幼名幸松此時歳十九ナリ小笠原家ハ新羅義光ノ遠裔ニシテ長次ノ父忠脩及祖秀政共ニ元和ノ役ニ戰死シ其功ヲ以テ長次十一歳ニシテ龍野六万石ノ新知ヲ受ケ是ニ至テ叔父忠真ト共ニ豊前ヲ分領スルニ至レリ長次ノ母本多氏ハ忠脩戰死ノ後忠真ニ嫁スルヲ以テ長次忠真父子ノ約ヲ結ベリサレハ長次ハ小笠原家ノ嫡宗ナレハ世ニ有名ナル小笠原流弓馬ノ秘訣禮式ノ故實ハ皆長次ニ傳ハレリト云○元和ノ役長次ノ叔父忠

紀元二二九
西曆一六三

小笠原氏入

小笠原氏ノ功

眞亦戰功アルヲ以テ秀政ノ遺領信州松本六万石ヲ賜ハリ翌年更ニ明石
 十万石ニ封セラレ寛永九年長次ト共ニ豊前ニ移サレ小倉十五万石ヲ領
 ス
 長次既ニ中津ニ入り賢臣犬飼半左衛門小笠原治郎兵衛同修理丸山將監溝
 口式部等ト君臣心ヲ一致シテ内ニハ士ヲ擇ビ外ニハ民ヲ恤ミ字佐大貞六
 社龍王古表雲乃宮羅漢寺御許山清水寺善光寺長谷寺其他菩提所開善寺法
 性寺大洪寺及ヒ祈禱所光久寺愛染寺東學院等神社佛閣悉寄附ヲ付シ上下
 安寧四民泰平ヲ樂メリ○十五年二月是ヨリ前長次天草ノ役ニ從ヒ大ニ戰
 功アルヲ以テ將軍更ニ日田六万石ヲ預地トシテ之ヲ賜フ之ニ於テ長次竹
 内伊右衛門ヲ遣ハシテ日田郡丸山城ヲ守リ之ヲ治メシメ且將士ノ勞ヲ慰
 メント凱旋ノ後直ニ源右府ノ例ヲ用ヒ赤尾ノ野ニ鳥ヲ追ヒ妙見ノ山ニ猪
 ヲ狩リ凡佃遊三晝夜ニ亘リテ止ム

字佐八幡宮ハ今字佐那字佐驛ニアリ中津ヲ距始和銅ノ初年屢奇瑞アリ
 仍テ其五年 敕定ヲ以テ神殿ヲ造リ之ヲ安ッ即鷹居瀬社は也靈龜二年
 神敕ニ由テ祠ヲ小山田ニ移シ造リ神龜元年又神詔ニ由テ豊前守宇努首
 人 敕ヲ奉シテ小倉山ニ宮ヲ造リ二年正月祠ヲ小山田ヨリ遷シテ祭祀
 ヲ行フ小倉山ハ即今ノ字佐宮ノ社地是也斯クテ 應神天皇ヲ祀ルノ後
 天平五年又比降大神ヲ合祀シ弘仁十四年 神功皇后ヲ合祀スサテ御許
 山馬城 權現ハ山顛ニ八幡太神三所ヲ祀レリ各石休也此處ニ磐石アリテ
 其水四時涸レヌ天台宗ノ僧坊アリ豊前志ニ字佐縁起ニ 應神帝御靈行
 ノ昔御示現ノ一處也トアルハ信シ難シ蓋彼三女神ノ天上ヨリ降り給ヒ
 シ所ナルヘシト思ハル、由アリ云々ト抑此字佐ニハ多ク國史ニ關係ヲ
 有スル事アルガ中ニモ 神武帝東征ノ時日向ヲ發シテ第一ニ御駐輦ア
 リシ一柱騰あしづつあかりか宮ハ尤有名也其故址ニ就テハ豊前志ニ考証アリ云通証ニ今

宇佐神宮ノ西ニ驛館川編者曰古ハアリ其水源ニ大石ニ穴ヲ穿チタル處菟狹川ト云アリ多ク傳ヘテ云此其故址也ト去ナガヲ斯ル處ハ今土人ノ口碑ニ遺レ
ル地モアラズ云々ト又云雜徴ヲ見ルニ宇佐宮ヨリ一里余西南ニ當リテ
河ニ副ヒテ拜田村アリ河ヨリ五六丁許隔リタル處ニ小高キ松原アリ南
北ニ通ヒテ大道ノ跡存ス其處ヲ村人ハ塔ノ山足上リト云塔ノ山ハ騰ノ山
足上リハ足一騰ノ畧歟又此國ニ土用座頭ト云テ四土用編者曰四季ニ古
跡ナドヲ誦シ物乞フ盲僧アリ其誦スル辭ノ中ニ拜田ノ上ノ宮ト云フアル
ハ少シ謂レアリゲニ聞フレモ確ニハ定メ難シ云々ト次ニ有名ナルハ神
護景雲三年賊僧道鏡ノ皇位顛踰ノ時和氣清磨ノ參籠セシ處ハ今ノ社地
ニアラスレテ社地ヨリ東ニ當ル大尾山ト云丘陵也此丘上ニハ今神護景
雲元年宇佐公池守ノ勸請セリト云八幡宮アリ此地ハ實ニ清磨ガ一身ヲ犧
牲ニ供シ血涙ヲ揮テ我天壤無窮ノ皇位ヲ妊雲惜憎ノ中ニ護リ奉リタル古跡

ナレハ予輩ハ彼四條噺神社及元寇紀念碑ノ如ク此ニ壯大ナル神社若ク
ハ紀念碑ヲ設立センコトヲ望テ已マサル也此小倉山大尾山ニ龜山ヲ合セ
テ此三山菱ノ形ノ如シ故ニ菱形山ト傳稱ス山容優美貴人ノ咏國史ニ存
ス其麓ニアルモノハ豊前四名地ノ一ニナル菱形池ニシテ紀貫之ノ歌人
口ニ膾炙ス「豊國のひしの池あるひしの根をとりてや妹が袖ぬらすらん」
ト○大貞八幡ハ中津ノ東南一里半大貞驛ニアリテ一ニ薦社ト云宇佐宮
ニ亞ゲル舊社ニシテ仁明天皇承和年中大ニ殿宇ヲ修メ三層ノ樓門ヲ築
ク寛永十七年以來毎年領主盛ニ祭典ヲ行ヒ寛文中又能樂ヲ合セ寄進ス
ルニ至ル社西ノ靈地ヲ薦池寶池又三角池ト稱シ豊前四名池ノ一ニシテ
傳ヘテ仙士公池さかのひけの池守翁ノ舟遊セシ處トシ又池中ノ蔭ヲ以テ往時宇佐八幡
ノ枕ヲ造リタリトシ俗ニ蔭枕ト云歌ニ云ク「大貞や三すみの池のまゐを
草何をよよりよととと生ふん」ト池中三島アリ以テ三種ノ神器ニ擬シ玉

古表八幡宮

澤鉾澤鏡澤ト名ク池ノ四堤ハ老樹枝ヲ交ヘテ陰然之ヲ覆ヒ水底ノ魚龍
 林間ノ禽獸皆怡々然トシテ其生ヲ樂メリ櫻馬場翁道敎使道相生の松等
 勝地舊蹟甚多ク實ニ塵外潔秀ノ名地ナリ○古表八幡ハ中津城ノ對岸吹
 出高濱ノ勝地ニアリ後明皇太子創始ニシテ境內最風光ニ富ム○羅漢寺
 ハ耶馬溪ノ北端跡田村ニアル著名ノ巨刹ニシテ山號ヲ耆闍崛山ト稱ス
 中津ヲ距ルル南方三里半往古釋光勝空也ノ錫ヲ留メシ地ニシテ其古蹟
 今尙古羅漢ニ存ス其後聖僧龍照覺豐後國田漣郷ヨリ來リテ浮圖ヲ搆ヘ
 且釋迦五百羅漢千体地藏六地藏等ノ像ヲ造ル時ニ仙士逆流建順ナル者
 亦照覺ヲ訪フテ玆ニ來リ大阿羅漢石佛ヲ刻ス北朝光明帝曆應元年建武
 亦當ル當國ハ北朝ノ領地ナ悉ク落成シ始メテ羅漢寺ト號ス石佛ノ數三
 千七百休堂宇岩洞ニ據リテ搆ヘ造營巧妙入ヲシテ驚嘆セシム屏風岩阿
 彌陀峯石橋等結杖捨掌返鉢耳戶大松達磨岩窟內ノ勝地凡二十四

羅漢寺

領元二二二
西曆一六五

水道工事

紀元二二二
西曆一六六

長次卒ス

過客ノ吟咏數ナルニ勝ヘズ耶馬溪名勝ノ一ナリ

承應元年町奉行澤渡志摩大工頭内海作兵衛ノ二人ニ命シテ樋ヲ市街ニ埋
 メ以テ清水ヲ藍原村ヨリ引カシム所謂水道之ナリ此歲日田郡鎌田村及出
 口村事ヲ以テ爭論シ終ニ幕府ノ裁斷ヲ請フニ至ル長次性易簡ニシテ煩雜
 フ好マズ直ニ領地ヲ幕府ニ奉還ス○萬治中又領内ニアル宇佐神領ノ支配
 ナ止ム始宇佐大宮司宮成到津ノ二氏長次ノ命ニ違フ事アリ老臣丸山將監
 兵士ヲ遣ハシ到津主膳ヲ捕ヘ藩廳ニ於テ之ヲ結責ス到津頗無狀ナリ乃古
 博多町松屋四兵衛ノ宅ニ幽ス宮成事ヲ幕府訟フ歲シ越ヘテ決セズ終ニ大
 宮司罪ヲ獲テ閉門ヲ命セシメ中津神領支配ノ事モ亦止メリ○寛文六年五
 月長次病ニ罹リ日ヲ追フテ益重シ於之上下大ニ驚キ典醫町醫ハ云モ更ナ
 リ小倉ノ侍醫西筑前ノ侍醫鶴原長崎寓居ノ明醫入徳等ヲ招キ醫藥其精
 ナ竭セ且更ニ驗ナク同月二十九日終ニ卒ス享年五十二廣津村臥牛山中日

寺ニ葬リ長松寺殿ト諡ス士民皆大ニ悲ミ哀悼ノ詩歌道路ニ盈テリ始長次
 病儘カナルニ及ビ老臣ヲ召シテ遺言シテ曰吾死セハ家ヲ長勝ニ讓ラソ汝
 等能ク之ヲ輔ケヨト長次恩顧ノ諸士二十余人相議シテ殉死セントス之ヨ
 リ先寛文五年五月幕府令シテ殉死ヲ嚴禁シ若違フモノアルハ多少ヲ論
 セズ家名ヲ斷絶スト之ヲ以テ小笠原次郎兵衛反覆其理ヲ述ヘテ諸士ニ諭
 シ之ヲ止ム長次既ニ卒ス老臣等相議シテ曰ク嗣子上野介ハ淫酒ニ耽リ人
 君ノ器ニアラズ宜シク遺言ニ因リテ二子長勝ヲ立ツベシト時ニ納戸役古
 川小右衛門侍醫中山省仙先主ノ愛妾三ノ君ニ戀慕シ毒酒ヲ進メテ先君ヲ害
 シ且上野介モ亦之ニ與スト風聞區々人心洶々タリ小笠原次郎兵衛等之ヲ
 憂ヒ直ニ古川中山ノ二人ヲ誘フテ之ヲ襲殺シ以テ人心ノ動搖ヲ鎮シテ犬
 飼半右衛門ハ中津城ヲ守リ小笠原次郎兵衛ハ江戸ニ到リ長勝ヲ嗣トセン
 一ヲ乞フ九月二十五日從五位下ニ叙シ信濃守ニ任セラレ封ヲ襲キ内匠頭

長勝立ッ

三紀元二二三
 三西暦一六七
 長勝修

ト稱ス明年八月始メテ入ニ國ル〇八年二月肥前島原ノ領主高力左近太夫
 隆長封ヲ奪ハル家臣等皆憤激ノ死ヲ極メ籠城ノ備ヲナス幕府長勝及松浦
 肥前守ニ命シテ其城ヲ受取ラシム此時松平備前守上使トナリ空川小左衛
 門内藤新五郎内田傳左衛門監察トナリ稻葉能登守島原城番ヲ命セラル三
 月十九日長勝士卒二千百三十二人夫二千二百六十八人乘馬百三十八頭小
 荷駄二百三十頭ヲ以テ中津ヲ發シ四月二十七日終ニ城ヲ受取り之ヲ城番
 稻葉氏ニ授ク於之幕府命シテ高田領二万八千石ヲ中津ノ預地ニ賜ハリ以
 テ其功ヲ賞セラル〇延寶元年長勝病アリ精神鬱結久フノ快カラズ群臣之
 ヲ憂ヒ相議シテ其體ヲ散セシメント上毛郡幸子村ノ河岸ニ離亭ヲ設ケテ
 長勝ヲ之ニ奉ス後更ニ四十八室三層ノ樓閣ヲ築キ珠玉金銀ヲ鏤メテ之ヲ
 飾リ名畫珍器ヲ集メテ之ヲ裝ヒ且園内ニハ奇木異草ヲ以テ之ヲ充タシ京
 都大坂ノ名妓數十人ヲ聘シテ日ニ歌舞宴遊ス既ニシテ北山與次太夫城安

石等ノ工夫ニヨリ方八間ノ浴室ヲ設ケテ日夜温湯ヲ湛ヘ或ハ淀ノ川瀬ノ水車ト稱ソ寢殿ニ清水ヲ流シ以テ樂トスルニ至ル一日ノ費用三千貫倉庫空乏シテ國用足ラズ終ニ江戸參勤ノ禮ヲ修ムルヲ能ハズ是ニ於テ其欲ヲ補ヒ更ニ倉庫ノ富ヲ謀ラント賤士岩波源三郎ナルモノヲ舉ケテ國政ヲ委ヌ岩波ハ巧佞才幹ノ士ニシテ催科ノ術ニ長シ延寶六年慶長ノ式目ニ戻リ自百三十條ノ憲法ヲ制シ先家中ノ地方領ヲ沒收シテ切扶持トナシ運上場ニ稅關所ヲ設ケテ嚴ニ港内出入ノ物品ニ運上ヲ徵シ炭紙綿木綿茶漆果樹等ニハ繼物高ノ法ヲ用ヒテ苛稅ヲ課シ又定免ニ過免ヲ加ヘ麥作ニ新稅ヲ徵シ法鏡寺ニ關テ擯ヘテ宇佐參宮及往來ノ旅客ニ通行稅ヲ納シメ領内神社ノ祭典佛事供養ヲ停止シ庶民ノ葬婚吊賀等都テ酒餅ノ飲食ヲ禁ジ加フルニ貧民ノ金穀ヲ他ニ借レルモノハ皆之ヲ返償スルヲ勿ラシメ訟獄爭論一モ苞苴ニヨリテ取捨シ更ニ棒擗ノ法ヲ造リテ酷烈殘忍ノ刑罪數フルニ

岩波源三郎
新法ヲ出ス

堪ヘズ旱水ノ害年ニ繼テ起リ穀果登ラズ餓孚塗ニ充テ夜々領内ヲ脱シテ他國ニ走ルモノアリ既ニシテ事江戸ニ聞ヘ延保六年終ニ幕府ノ詰責蒙ル岩波悞レテ一夜國ヲ去リ江戸ニ走ル後遂ニ罪ニ服シテ其家籍沒セラレタリ世ニ之ヲ岩波ノ得政ト云

當時ノ繼物高ハ如何ナル法ナリシヤ分明ナラスト雖與平家ノ時ニ及ビテハ藩府ヨリ人民ニ貸與セシ金ヲ繼物高ニテ徵收セリ其方ハ郡奉行元奉行協議シテ米價ヲ定メ郡奉行ハ人民ノ爲ヲ計リ勉メテ米價ヲ貴ラ故ニ之ニ反ス米價ヲ定ムル法ハ其年中各月ノ米相場ヲ平均シテ之ヲ用フルコトアリ或ハ江戸大坂下關三處ノ時相場ヲ平均シテ之ヲ用フルコトモアリ其貸附ケタル金額ニ相當スル米穀ヲ返納セシムルナリサレハ當時ノ法モ亦此ト大同小異ナリシナラシメ○長勝ノ代家臣中小笠原治郎兵衛元吉最名アリ元吉臂力絶倫弓馬ノ術ニ精ク曾テ書ヲ讀ム能ハサレヒ天性理義明辨ニシテ憚ル處ナシ先主長次三ビ其祿ヲ増セヒ辭シテ受ケズ

小笠原治郎

◎小笠原氏前紀

執政タルニ及ヒ諸士ノ風俗一變シ農商皆之ヲ喜フ天草出陣ノ如キ海路ノ
軍士大ニ命ヲ拒ミ將ニ大事ニ至ラントスルヲ元吉百方之ヲ説キ終ニ事
ナキヲ得タリ後致仕シテ家ヲ子彦七ニ讓ル

紀元二三四
西曆一六八

長勝卒ス

長胤立ツ

長胤遷移

天和二年十一月二日長勝江戸ニ卒ス孝徳寺ニ葬リ寒松院殿ト諡ス長勝性寛
弘文武ノ與術ニ達シ願人君ノ器アリシモ不幸ニシテ中途政ヲ失ヒ永ク後
人ノ笑フ處トナル眞ニ惜ムベキナリ○三年正月二十五日修理太夫長胤封
ヲ嗣キ例ニヨリテ從五位下ニ任セラル長胤ハ長次ノ嫡子上野介長知ノ長
男ニシテ童名大助ト呼ビ時ニ歳十六ナリ長胤性愚ナラズ封ヲ嗣クノ初頗
心ヲ政事ニ留メシガ幾クナラズシテ近臣栗屋三左衛門宮部七郎兵衛小田
勘五兵衛萩野彌三右衛門僧正等ヲ寵シ其言ヲ用ヒテ大ニ土木ヲ起シ奇
物珍寶ヲ集メテ之ヲ玩ヒ且京都大坂奈良伏見大津坂本ノ遊女ヲ聘シ更ニ
家中及農商家ノ稍容色アル女子百有余人ヲ強致シテ侍女トナシ宴樂晝夜

基外和尙謀
死ス

折出權ノ得

ヲ分タス加ルニ肝臣左右ニアリテ忠言ヲ杜塞シ富家ノ財神社ノ領地ヲ沒
收シテ驕奢ノ資ニ充テ終ニ貞享三年宮部義三等殺生ノ禁地宇佐郡推谷の
瀑ニ綱シテ鴛鴦ヲ捕ヘ長胤ニ供ス忽ヨシテ宇部ノ邸宅雷火ノ爲ニ燒失シ
尋テ此月二十六日更ニ長胤ノ居室ヨリ發火シテ城内瞬時ニ炎上シ重器名
寶悉灰燼ニ化シ去リ獨源家累代ノ各刀大黒丸西川善兵衛ノ火中ヨリ收ム
ル處トナリ纒ニ全キヲ得タルノミ時ニ世人此火災ヲ稱シテ神明ノ罰ト
ナスサレハ諸士相謀リテ其狀ヲ幕府ニ訴ヘント訴狀ヲ作り箱中ニ藏ム既
ニシテ栗屋三左衛門其謀ヲ知リ金井軍次郎ヲシテ之ヲ長胤ニ告ケシメ而
シテ自偽鍵ヲ用ヒテ箱ヲ開キ其狀ヲ奪フテ長胤ニ呈ス長胤大ニ喜ヒ乃三
左衛門ニ祿三百石ヲ増與シ宮部義三ニ二十石ノ退隱料ヲ與ヘ之ヲ賞ス是
ヨリ前法性寺基外和尙屢々長胤ヲ諫ムト雖用ヒラレス然レモ身ヲ以テ國
ニ殉ヘ民ヲ塗炭ノ中ニ救フハ佛門ノ本意ナリト唱ヘ國家ノ危急民生ノ慘

紀元二三四
西曆一六八

◎小笠原氏前紀

◎八十四

狀ヲ俗歌ニ作リテ小僧沙彌ニ之ヲ歌ハシメ且自極諫ノ詩歌及文ヲ草シテ
 長胤ニ獻シ斷食十四日ニシテ終ニ憤死セリ長胤及近臣等皆之ヲ笑ヒ以テ
 狂僧トナス○元祿二年六月長胤江戸ニ勤シ與詰衆ヲ命セラル是ヨリ更ニ
 吉原ノ妓廓ニ遊ビ起居往來都テ諸士ノ隨從ヲ禁シ獨侏儒美人ヲ伴フテ亂
 淫ノ行ヲナス在國ノ諸士皆痛ク憂懼シ遙ニ之ヲ諒ムルモノ多シ長胤怒リ
 使ヲ中津ニ遣ハシテ大老犬飼半左衛門丸山將監二人ノ祿ヲ奪ヒ之ヲ追放
 ス之ノ實ニ元祿七年正月四日ナリ
 由來記ニ犬飼等ノ追放セラレシハ老臣島立内藏介ノ元來大老ノ望アル
 ヨリ長胤ニ讒セシニ因ル云々ト見ヘタリ
 七月小笠原彦七島立内藏介原太夫溝口兵右衛門富田勘兵衛等二十四人追
 放セラレ大貞ノ神職池永數馬亦犬飼等ヲ送リテ宇佐ニ到ルノ罪ヲ以テ捕
 ヘラレテ裸体追放ノ刑ニ處セラル是ニ於テ城中茫然亦一人ノ是非ヲ言フ

弊政百出

モノナシ既ニシテ近臣小島與右衛門大老トナリ内田治郎左衛門村田三多
 左衛門二木惣兵衛同彌右衛門老臣トナリ後藤與三右衛門今村彌八郎主務
 トナリ斗屑ノ小人樞要ノ地位ヲ占メテ弊政百出亡國ノ兆昭然トシテ現ハ
 ル是時ニ當リ復岩波ノ遺法ヲ用ヒ各種ノ新法ヲ編制シテ先士卒ノ祿ヲ減
 ノ半知トシ農民ニハ先納米先納銀ヲ課シ富豪ニハ用銀ヲ課シ其他商人
 ニハ呉服、小間物、茶、紙、油、布、木綿、炭、薪、鹽、酢、酒、七鳥筵、笠、煙草等及職人ニ
 ハ檜物、塗物、鍛冶、染物、指物屋、ニ至ルマテ苛稅ヲ徵シ且檢見奉行田中理兵
 衛瀧原彌四郎ナルモノ「引き返去」ト稱スヲル新法ヲ制シテ土免ノ上ニ三
 分ノ切免ヲ課シ正貨空竭シテ更ニ交換ノ資ナク紙幣僅ニ貳分七厘ニ下落
 シテ物價大ニ騰貴シ加フルニ貞享年間樋田堰手ノ工事ヨリ尋テ元祿二年城
 櫓建築ノ土木ヲ起シ賦役愈々重リ人民年ニ困窮シ所在飢疲シテ皆中津ノ
 城下ニ集リ救ヲ求ム士家町家寺院等多ク粥ヲ煮テ之ヲ施與スト雖貧民ノ

◎第三編 中世紀

◎八十五

小笠原氏領
主没收

種田井手工
車

四方ヨリ集ルモノ道路ニ填塞シ日ニ餓死スルモノ數十百人ノ多キコ及フ
 是ニ於テ有司非人組ニ命シテ龍玉無縁寺ノ濱ニ大孔ヲ穿テ一孔十屍或ハ
 二十屍ヲ集メテ之ヲ埋メ牛馬ト更ニ選フ處ナシ而シテ長胤江戸往復ノ途
 次ニハ毎朝己刻ニ起キ午ニ立テ酉ニ休ミ子丑ニ泊リ士卒未足ヲ洗ハズ而シ
 テ雞鳴クニ往々アリ時ニ其風説天下ニ喧シク終ニ元禄十一年七月二十八
 日江戸傳奏ニ於テ老中列座土屋相摸守台命ヲ傳ヘ小笠原家ノ領土ヲ没收
 シテ長胤ヲ小倉ニ遷シ城主小笠原右近將監ノ監護スル處トナス後寛永六
 年三月二十七日小倉ノ配處ニ卒ス時ニ歳四十三本源院殿ト諡ス
 長胤ノ諡號始東竹院殿ナリマカ之レ中納言有雅雅卿ノ諡號ト同シケレ
 バトテ俄ニ本源院ト改メタルナリ世ニ長胤ハ有雅卿ノ再現シテ小笠原
 家ニ執スルナリト云尙此事ハ長圓ノ處ニ詳ナリ○種田堰手ハ一ニ荒瀬
 ト稱シ種田村ニ起リテ佛坂、白木、諫山、ヲ經之ヨリ東北二十八ヶ村千余

町ノ田園ニ灌漑ス其間岩石ヲ穿テ水道ヲ通スルヲ六百三十間溝ノ長三
 里十二町余ニシテ工事甚奇壯ヲ極ム之レ嘗テ草木銀山ノ採鑛奉行タリ
 シ片桐九太夫ノ創意セシ處ニシテ大里正今津作右衛門大工頭内海作兵
 衛等之ヲ助ケ長胤ニ請フニ其工事ヲ起サントヲ以テス長胤之ヲ許シ竹
 内求馬ヲシテ監察セシム竣工ニ至ルノ間前後八年財ヲ費ス一巨万民ヲ
 役スルヲ勝テ敷フベカラズ今日ヨリ之ヲ見ル時ハ頗公益事業タリト雖
 當時弊國ノ殘民其負擔ニ堪ヘサリシヲ知ルベシ○先納米トハ例年貢米
 徴收期ノ前ニ米ヲ前納セシムル法ニテ先納銀トハ繼物高ノ法ニテ米價
 ヲ預定シ置キ其相場ニ準シテ貢米ヲ銀納セシムル法ナリ

第四章

中世紀第四

(小笠原氏後紀治世間記事)

長胤封ヲ禱ハル、ノ翌日幕府特旨ヲ以テ長胤ノ同母弟長圓ヲ下毛宇佐二

長圓新知ヲ
受ク

忠臣復讐

郡ノ内四万石ニ封シ從五位下信濃守ニ叙任シ中津城ヲ賜フ長圓幼名宮内
 時ニ歳二十三此報中津ニ達スルヤ上下ノ驚愕一方ナラス人心洶々トシテ
 浮説街巷ニ滿ツ長圓江戸ニアリ急使ヲ發シテ士民ヲ鎮撫シ尋テ大ニ賞爵
 ナ行ヒ先長胤逐フ處ノ舊臣小笠原彦七島立内藏介原安太夫飛田勘兵衛竹
 内求女等ヲ各地ヨリ召シテ舊職ヲ授ケ哲正以下ノ奸臣ヲ捕ヘテ悉ク追放
 シ且栗屋三左衛門ハ逆臣ノ首魁ナルヲ以テ中津十四町ヲ引キ廻ハシ三族
 ヲ舉ケテ之ヲ無暗濱ニ誅シ更ニ小笠原次郎兵衛ヲシテ手書ヲ齊フシ中津
 ニ下ラシム其略ニ云先祖相傳譜代ノ家臣ハ這回依然召抱フヘキモ長次以
 來ノモノハ各其意ニ任シテ去就ヲ決スベシ若小祿ヲ厭ハス尙留マラント
 欲スルモノハ本望ノ至ニ付扶持致スベシ云々ト是ニ於テ諸士或ハ止リ或
 ハ去リ各好ム處ニ從ヘリ○十二年長圓大ニ藩政ヲ革ノ人物ヲ淘汰シテ諸
 士數十人ニ暇ヲ賜フ世ニ稱シテ之ヲ小笠原家ノ人選ト云

小笠原家ノ
遺徳病

今回改易ノ際ニ當リテ前后暇ヲ賜ハリシモノ家中足輕中間ニ至ルマテ
 凡千人ニ及フト云○栗屋三左衛門一族上下數十人無暗濱ニ誅セラル之
 ヨリ此濱ヲ名ケテ地獄濱ト云

長圓書後

長圓多病常ニ沈鬱ノ風アリ諸士之ヲ愛ヒ仍テ元祿ノ晩年其病ヲ養ハシメ
 ン爲城東東濱村新田村ノ間ナル松原ニ離亭ヲ建テ室内装フニ海北友仙ノ
 筆ニナリタル唐畫ヲ以テシテ琴瑟絲竹基石ノ玩物之ニ充テ庭泉築山花園
 等美ヲ悉シ精ヲ極メ更ニ蠣瀬大塚ノ濱ヲ堀リテ川トナシ舟ヲ浮ヘテ城内
 ヨリ直ニ此ニ相通スルヲ得セシム此地東ハ間々ノ濱ニ連リ西ハ關無濱ニ接
 シ柳川ニ臨ミ周防灘ヲ控ヘ四時ノ風光且夕ノ眺望皆以テ千金ノ値アリ加
 フルニ江戸吉原第一ノ全盛小紫ナルモノヲ聘シ且士民ノ女子數百人ヲ召
 シテ日夜ノ宴遊傲奢ノ景狀崎昔延寶天和ノ時ニ倍セリ之ヨリ冗費多端國
 用給セス士卒ノ祿多クハ公費ニ充テ半知ダモ興ヘズ老臣飛田勘兵衛上原

◎小笠原氏後紀

十右衛門鄉役人前澤仁右衛門岡本三郎右衛門重松嘉兵衛和田興右衛門等
 政ヲ專ニシ國費ヲ助クルヲ以テ名トシ定免ニ四分八厘ノ上免ヲ課シ更ニ
 商品製造品ニ重稅ヲ徵シ且元祿十五年九月以來新ニ紙幣ヲ發行シ年ニ其
 數ヲ增ノ終ニ天和ノ時ト同シク二分七厘ニ下落シテ物價大ニ上騰シ人民
 困窮怨嗟ノ聲道路ニ盈ツサレハ其風說喧シキヨリ老臣相議シテ之ヲ長圓
 ニ訴ヘ寶永二年九月大ニ奸臣ヲ糾彈シ土肥左仲等數十人ヲ追放シ飛田勘
 兵衛等數人ヲ捕ヘテ獄ニ下シ翌年十一月終ニ之ヲ誅シ稍改革ヲ行ヘリ然
 レモ人心既ニ腐敗シ國力既ニ衰弊シ且長圓ノ驕傲猶依然然ムル處ナキヲ
 以テ賦歛愈々重ク民誅求ニ苦メリ○寶永七年秋公子造酒介長造（長造）江戸ノ邸
 ニ生ル次年春芳姬生レ其翌年又次子喜三郎生ル長圓大ニ喜ビ子孫ノ福ヲ
 祈フント欲シ前大貞宮司池永數馬ノ子主計頭ヲ復シテ正五位下ニ補任シ
 復神職ヲ授ク此歲領内神社ノ森林ヲ伐ルヲ止ム是ヨリ先財政既ニ困難

四分八厘ノ
加免
紙幣増發

○經元二三七
○西曆一七一

五社八幡

ヲ極メ江戸京大坂堺長崎ノ藩債大ニ増加シテ亦如何ニスヘカラザルニ至
 リシカハ領内下毛郡津民組正木山今津組犬丸如水原及宇佐郡敷田組糸口
 原等ノ林木數万本ヲ伐採シテ之ヲ備前ノ商人ニ賣リ稍藩債ヲ償フト雖猶
 足ラズ仍テ更ニ領内神社ノ社樹ヲ伐採セシカバ怪ムヘシ工夫等皆忍奇病
 ヲ發シテ惱死シ妻子ニ至ルマテ多ク災害ニ罹ルトノ風說頻ナリ是ニ於テ
 有司懼レテ神罰ノ然ラシムル處トナシ終ニ之ヲ止ムルニ至リシト云
 鶴岡八幡ハ下毛郡平田村ニアリ建久六年十二月宇都宮重房ノ勸請セシ
 處ナリ○毛藏八幡ハ曾木村ニアリ節婦「首刀自賣」ヲ祀レル處ニシテ首
 刀自賣ハ下毛郡ノ人大領越野勝宮守ノ妻ナリ後宮守死シテ人之ニ再醮
 ヲ勸ムレモ更ニ肯セス朝夕亡夫ヲ慕フテ其靈ニ事フルヲ生時ニ異ナラ
 ズ正長四年正月詔シテ終身其戸課役田租ヲ免スト北園記日本後記人物
 史列女傳其他諸書ニ見ベタリ又此處ニ賢女藏三日月池等アリテ皆刀自

古蹟ト稱シ最著名ナリ殊ニ三日月池ハ豊前四名池ノ一ニシテ刀自リ歌アリ云ク「松が枝の縁は宿る鳥のは乃錦と洗ふ三日月の池」ト又想夫戀ノ歌ニ「忘をせばやれ見し人の俣を一夜はうつせ三日月の池」ト○猪山八幡ハ社説ニ云和氣清磨呂ノ流サル、ヤ船松崎浦ニ漂泊ス此時大猪一疋田口村ノ山中ヨリ出テ、清磨ヲ字佐ニ導ク即其猪ヲ祀レルナリト○末弘八幡ハ成恒村ニアリ縁起ニ云「日神御宇佐知彦命」ヲ祀ル處ニシテ神功皇后ノ時末弘八幡ト稱ス云々ト○八幡本宮ハ今斧立八幡ト號シ白木村ニアリ宇佐造營記ニ云宇佐第三ノ御殿ノ拙取ヲ此地ノ楠ニテナセルガ故手斧立ト云ト以上ヲ總稱シテ世ニ之ヲ五社八幡ト云最著名ノ神社ナリ

此歳春又長圓大ニ檜原山ニ獵ス始長邕ノ近臣疱瘡藥兔血丸ヲ製シテ長邕ニ献セント前年冬ヲ以テ宇佐郡赤尾山ニ狩兔ノ遊ヲナス長圓之ヲ悦ヒ更

体器ニ因テ
誕日ヲ發ス

深ムヘ七長
個ノ神聖病

ニ命シテ寛文ノ例ニ倣ヒ士卒ハ勿論領内七組ノ百姓ニ至ルマテ壯者ハ盡ク狩子トナシ其數凡八千人之ヲ五隊ニ編シ二道ニ分レテ一ハ福土山ヨリ一ハ津民谷ヨリ鐘鼓ヲ鳴シテ東西ヨリ檜原山ニ薄リケレハ山谷爲ニ崩ル、ガ如ク數千ノ禽獸背ヲ並ベテ奔リ出デ遂ニ前後五日ニ亘リテ其獲ル處幾何ナルヲ知ラズ時ニ長圓疲勞甚シク歸城ノ後身体大ニ熱シテ精神ヲ失ヒ戰慄狂ノ如ク嘗テ寛永以來八十年間刑死者ノ事ヲ言フ上下大ニ驚キ懼レ乃領内ノ社寺ニ祈禱シ且古川小左衛門中山省仙等以下刑死者數十人ノ爲メ法性寺開善寺ニ於テ數日大供養ヲ行ヒシカハ其病稍快愈シ僅ニ江戸ニ到ルコトヲ得ル而レハ幾クナラスシテ復發シ日夜頻リニ叫号シテ更ニ復昔承久ノ役戰死セシ佐々木中納言有雅ノ事ヲ語り全身播擲病頗ル危篤ノ狀アリ上下再大ニ驚キ急使ヲ中津ニ遣ハシテ白銀五十枚ヲ羅漢寺ニ献シ怨靈ノ魂ヲ祭ル而レハ病全ク癒ヘヌ翌正徳三年九月請フテ國ニ就キ十月

◎小笠原氏後紀

◎九十四

長清卒ス

病大ニ革マル長圓自起ツヘカラサルヲ知リ老臣ヲ召シテ遺屬シテ曰ク我
 近年多病ニシテ親ク政ヲ省ズ是ヲ以テ有司專横賂賄ヲ貪リ且寺社ヲ沒收
 シ苛税ヲ徵シテ農商ヲ苦ムト我今ニ及ヒテ甚之ヲ悔フ願クハ造酒介ヲ以
 テ封ヲ繼ガシメ汝等能ク之ヲ輔ケ勉メテ我カ弊政ヲ改革シ以テ國家ニ謝
 スベシト言畢リテ卒ス歳三十八眞淨院殿ト諡シ廣津山ニ火葬ス

小笠原系圖ニ云承久三年五月後鳥羽院北條氏ヲ伐ツノ詔ヲ發ス義時即
 兵ヲ起シ諸道ヨリ京師ヲ攻ム小笠原長清等東山道ノ首將トナリ道ニ院
 宣使ノ來リテ長清等ニ勸ムルニ官軍ニ與スルヲ以テスルニ遇フ長清肯
 セス益進ミテ美濃「大井戸渡」ニ軍シ官軍ト戦ヒ之ヲ破リ長驅ノ京師ニ
 入ル後義時罪ヲ糾スニ及ヒ公卿多ク流殺セラル中納言有雅ハ長清ノ檻
 スル處トナル長清之ヲ甲州板垣庄古瀬村ニ誅スト東鑑ニハ入道二位ノ
 兵衛督有雅捕ヘラレテ長清ニ預ケラル有雅二位ノ禪尼ニ因リテ哀ヲ請

正元二二七
三西曆七一
三三
長清卒ス

ハント欲ス長清聽カズ途ニ甲州稻稜庄小瀬村ニ之ヲ殺スト小笠原系圖
 附錄ニ云承久ノ役義時檢東竹ナルモノヲ捕ヘ之ヲ長清ニ預ク東竹請フ
 テ曰ク我故アリテ鎌倉ニ訴ヘタル事アリ數日ヲ經バ其報アラン願クハ
 死シ俟ヤ玉ヘト之ヲ待テ報ナシ東竹再數日ノ延刑ヲ請フ長清遂ニ
 聽カズシテ之ヲ誅ス仍テ東竹大ニ憤怨シテ死セリト又家記ニ貞慶ノ
 愛臣水竹五郎左衛門ナルモノアリ冤罪ヲ以テ誅ニ伏ス後屢々妖怪ア
 リシト歌アリ云ク「小笠原の家をたをそ者としてハ昔は東竹今も水竹」
 ト

正徳三年十二月二十七日造酒介長ササ封ヲ嗣ク○四年長邕豊後日出ノ城主
 木下氏ト共ニ京都后宮ノ造營ヲ命セラル仍テ秋末ヨリ領内田口深水平田
 屋形津民等ノ諸村ニ課シテ材木三万本ヲ出サシメ又大竹三千本中竹二千
 束小竹三千束ヲ七組ニ分當シテ之ヲ買上ケ且繩ハ高百石ニ十五束薦全三

◎第三編 中世紀

◎九十五

十枚草履全三十足十二月朔シテ之ヲ調ヘシム○五年二月老臣原四郎兵衛奉行ト也用人賄方用度万醫師横目足輕中間大工木挽石工鍛冶桶屋人夫凡二千入ヲ卒ヒ上京ス時ニ更山崎屋庄右衛門ノ賂ヲ受テ細草履等ハ粗造ニシテ用ニ堪ヘストナシ半バ廉價ヲ以テ之ヲ山崎屋ニ賣ル而シテ又其前ニ伐ル處ノ竹木等ノ代價及費用ハ皆藩倉ヨリ出ツルト雖奸吏中間ニアリテ悉之ヲ奪ヒ終ニ人民ニ其價ヲ償ハス加之當時更ニ納御無心ト稱シテ四分七厘ノ加免ヲ徵收セルヲ以テ一時領内大ニ騷擾セリ○八月諸士連判ノ内訂起ル始長圓ノ卒スルヤ老臣島立内藏介長圓ノ姪大膳ヲ立テント欲シ又諸士中竊ニ長勝ノ子孫次郎ニ心ヲ屬スルモノアリ獨小笠原次郎兵衛堅ク長圓ノ遺言ヲ執リテ動カス自馳セテ江戸ニ到リ犬飼半左衛門丸山丹下ニ木園右衛門等諸老士ト之ヲ議ス内藏介ノ子新吾左衛門時ニ江戸ニアリテ其議ヲ沮ミ一日ニ木園右衛門ヲ招キテ之ニ謂テ曰ク宗子造酒介ノ幼齡

政府反苛究起ル

ナル若不幸ニシテ早世セハ國法ノアル處當家忽滅亡セン須ク親族ノ人ヲ選ビテ封ヲ繼カシメ以テ宗子ノ成長ヲ待ツニ加カズト圍右衛門大ニ其理ニ服シ直ニ之ヲ贊ス然レモ次郎兵衛竊ニ小倉ノ城主右近將監ニ請フテ其カヲ藉リ終ニ長勝ヲシテ封ヲ繼カシム内藏介中津ニアリ此報ヲ聽キ伊勢參宮ニ托シテ江戸ニ到リ事ヲ謀ラント既ニ大坂ニ到リシ時偶々現ハレテ途ヨリ逐ヒ還サレ且新吾圍右二人共ニ江戸勤役ヲ免セラル是ニ於テ小笠原次郎兵衛江戸ニアリテ長勝ヲ輔テ犬飼半左衛門城代トナリテ中津ニアリ溝口兵右衛門丸山又右衛門原四郎兵衛等之ヲ副ケ又丸山丹下江戸勤役トナリ其弟龜右衛門京都勤役トナリ共ニ政ヲ專ニシテ權勢最盛ナリ島立父子大ニ之ヲ憤リ譜代ノ諸士數十人ヲ會シテ丸山兄弟ノ奸橫ヲ語ル諸士之ヲ聞キ皆大ニ怒リテ或ハ直ニ之ヲ殺サント云或ハ書ヲ以テ之ヲ執政ニ訴ヘ其職ヲ褫ハント云議論紛々日夜會議スルヲ前後凡九十日終ニ一日儒士

河野見龍論語ヲ講スルニ托シ上下五百余人相會シテ連判同盟シ且訴狀ヲ
 調ヘテ共ニ與ニ犬飼ノ官邸ニ迫リテ之ヲ呈シ丸山兄弟ノ職ヲ免セソコヲ
 請フ犬飼溝口ノ兩老士論シテ曰ク卿等ノ舉ハ實ニ一ニ邪説ノ爲ニ煽動セ
 ラレタルモノニシテ殊ニ徒黨連判ハ國法ノ禁スル處タリ宜シク速ニ退キ
 テ其盟ヲ散シ各幼主ニ忠仕スベシト衆毫モ肯ゼス更ニ抗言シテ曰ク予輩
 ノナス處ハ皆幼主ノ爲ナリ糞ニ丸山丹下擅ニ當家ノ古例ヲ破リテ新法ヲ
 立テ且已ノ昵近ヲ薦メテ重祿ヲ與ヘ妄リニ賄賂ヲ貪リテ奢侈遊逸家士ノ
 面目ナシ加フルニ龜右衛門京都五千貫ノ借銀其支出全ク明ナラズ是ヲ以
 テ舊例ニヨリ速ニ二人ノ職ヲ剝キ之ヲ逐フベシト半左衛門又曰ク古來世
 上此ノ如キ多數ノ徒黨ヲ結ヒテ事ヲ訴ヘタルノ例ナシ卿等ノ舉實ニ粗暴
 ニシテ一ニ義心ニ乏シキノ致ス所ナリ宣シク速ニ其黨ヲ散シ各幼主ニ忠
 仕スベシト二木藤右衛門之ヲ聞キ眼ヲ瞋ラシテ半左衛門ニ向ヒ大聲叫ヒ

テ曰ク公ノ皆言誤レリ觀ヨ頼朝ノ時諸侯五十三人相同盟ノ梶原ノ姦ヲ訴
 ヘ長祿大戰ノ時忠義ノ士相同盟シテ勝頼ニ退軍ヲ勸メ秀吉ノ代正義ノ諸
 侯十三人相同盟シテ石田三成ヲ除カンコトヲ請フ其他忠臣義士ノ國ヲ思ヒ
 家ヲ憂フルモノ相同盟シテ事ヲ訴ヘシ例勝テ數フベカラズ何ゾ古今例ナ
 シト謂フヲ得ンヤト山内彌三左衛門又進ミテ半左衛門ニ向ヒ言テ曰ク公
 今我輩ヲ呼ヒテ義心ニ乏シトナス其言モ亦過キタリト謂フヘシ聞ケ我家
 ハ當家ニ仕フルト茲ニ九代殊ニ我長次公ニ仕ヘテ以來既ニ五代ノ主君ニ
 歷事シ感狀及紅裏ノ恩賜スラ之ヲ蒙レリ若今ニシテ緩急ノ日アツハ椎木
 門ニ於テ紅裏ノ色ヲ添ヘ以テ貴覽ニ供スベシ何ゾ妄リニ義心ナシト謂フ
 ヲ得ンヤト腕ヲ扼シテ叫喝セシカハ犬飼ノ家士五十余人大ニ戒心シテ皆
 鎧ヲ横ヘ次室ニアリテ其動靜ヲ窺フ同盟ノ諸士モ亦皆刀ヲ扣ヘテ進ミ出
 テ議論頗激烈ヲ極メ事甚急ナリ溝口兵右衛門大ニ之ヲ憂ヒ先諸士ヲ慰諭

◎小笠原氏後記

シテ之ヲ退カシムルニ加カズトナシ故ラニ温言以テ衆ニ語々テ曰ク卿等ノ言亦理アリ宜シク議シテ後答フベシト終ニ其訴狀ヲ領收ス諸士乃相卒ヒテ退キ去ル十一月小倉藩小笠原權右衛門ヲ中津ニ遣ハシテ同盟ノ首魁島立父子二木園右衛門ヲ獄ニ下シ山田太兵衛ヲ追放シ尋テ更ニ丸田權右衛門ヲ遣リ大ニ諸士ノ罪ヲ論シテ其輕重ニヨリ各道放減知ノ科ニ處ス○享保元年五月今回此同盟ニ加ハラサル諸士ヲ賞シテ皆加祿勤役ヲ命ス此輩仍テ大ニ權力ヲ得殊ニ澤渡犬飼陶山遺藤溝口等勢内外ヲ傾テ專恣横逸ノ行多シ六月郡代澤渡清左衛門自ラ六十三條ノ法ヲ頒ツ此法頗苛酷ニシテ疇昔岩波ノ法ニ比スレハ亦一層ノ甚シキヲ加フト云即其大畧ヲ舉ケレハ人民ノ伊勢參宮佛事祭禮等凡テ人ト交ルヲ禁シ田地賣買及嫁娶結婚ノ禮ヲ停メ又社寺ノ經營下駄雪駄傘塗笠ヲ用フルヲ禁シ且公料ノ銀米ヲ借ルヲ禁シ加フルニ工商ノ諸運上四分七厘ヲ増徴シ貢納米ハ之ヲ粒糶

延元二三七
西曆一七一

反對せし
テ政再盛
也

長澤幸シ國
除セラル

セシメ人民ノ困難一方ナラズ既ニ有司又相謀テ諸寺ノ代參ヲ停メ且線香料ノ定額ヲ減ズ是ニ於テ求菩提山奥の坊先抗疏シテ曰ク當山中興ノ座主玄海嘗テ中津城ノ地鎮ヲナセシヨリ以來年々供料ヲ受クルノ例アリ何ヲ以テ今此古例ヲ廢スルヤト次ニ開善寺亦上疏シテ曰ク本寺ハ貞宗公創願ノ靈場ニシテ第一ノ菩提寺ナリサレハ仮令供料ヲ供セザルモ何ッ代參ヲ廢スルヲ得ンヤト有司大ニ怒リテ或ハ僧侶ヲ追ヒ或ハ寺院ヲ毀ツ時ニ譏政ノ樂書城壁ニ滿ツ七月同盟ノ士山内彌三左衛門父子ヲ成恒村ニ二木藤右衛門全園右衛門ノ二人ヲ諫山村ニ移ス又此月大正里佐知彦右衛門ノ職ヲ奪ヒ小袋村農長又兵衛ヲ追放ス始二人藩政ノ過失多キヲ憤リ私ニ上訴ノ計ヲナス故ニ事茲ニ及ヘルナリ九月一日長澤病作リ六日終ニ沒ス時ニ歳七ツ江戸光徳寺ニ葬リ靈覺院殿ト諡ス時ニ長澤幼稚未嗣ナキヲ以テ國法ニヨリ十月十二日終ニ城地ヲ沒收セラシ弟喜三郎播州完栗赤穂佐用ノ

◎第三編 中世紀

◎小笠原氏後紀

◎一〇貳

三郡内ニ於テ一万石ヲ賜ハリ同國安志村ニ移ルノ命ヲ受ク是ニ於テ上下
震駭シ江戸往復ノ使者織ルカ如ク有司相議シテ退城ノ方ヲ定ム十一月重
四島立ニ木等以下ノ犯人ヲ小倉ノ吏ニ托シテ處置セシム十二月暇銀トシ
テ銀十枚ヅ、ヲ家中ニ五枚ヅ、ヲ切米方ニ三枚ヅ、ヲ足輕仲間大正里ニ
百疋ヅ、ヲ農長ニ各之ヲ賜ヒ而シテ領内ニハ上免三千石ヲ免シ種子扱貸
符高二千二百石ヲ賜ヒ以テ之ヲ賑ハス

當時小笠原ノ高四萬石ト稱スト雖其實ハ五萬千八百三十二石之ニ新地
ヲ加フレハ五萬四千六百石而シテ其内譯ハ九千三十二石五斗唐原組二
千二百四十七石平田組八千七百七十一石五斗蠣瀬組一万二千六十石今
津組一万五千三百三十石敷田組六千八百八十石佐知組二千八十三石津民組ナ
リ因ニ記ス此比豊前國惣高ハ二十七萬三千八百一石八斗四升八合三勺
アリシト又大正里トハ一組ノ長ニシテ農長トハ村長ニシテ領内七組ニ

中川氏入國

百十人アリ又今度領内ニ賜ハリシ種粃ハ細川家ノ時貸附ケタルモノナ
リト云

二年正月七日中津城請取ノ命ヲ奉シ豊後岡城主中川内膳正久忠步騎雜人
六千余ヲ以テ福島村ニ着クシ長久寺ニ陣ス同二十二日上使小田切勲負徳
永兵部代官辻彌五右衛門勘定頭平岡彦兵衛神谷武右衛門馬場源五郎海上
彌兵衛高瀬村ニ着シ直ニ中川家ト相議シテ此月二十四日ヲ期シ城地ヲ請
取ラントス二十三日上使中津ニ入り魚町辻ニ高札ヲ建テ條目十四條ヲ示
シ以テ領民ヲシテ其備ル處ヲ知ラシム此夜中川内膳正兵ヲ分テ城外ノ諸
要地ヲ守ラシメ而シテ自ヲ中津ニ向フ中津城代犬飼半左エ門等相議シテ
曰ク若中川家無狀禮ヲ失フ時ハ輒ク城ヲ授クベカラズト上下八百人死ヲ
以テ諸門ノ守ヲ堅クス二十四日黎明中川ノ先鋒追手門ニ達シ古典ヲ按シ
テ各射禮ノ式ヲ行ヒ終ニ城ニ入ル城代犬飼半左衛門城國ノ地圖及武器郷

中津城地図

◎第三編 中世紀

◎一〇參

村ノ簿冊數百部ヲ出シテ之ヲ内膳正ニ呈シ事全ク畢ル是ニ於テ上使ハ即日歸途ニ就キ中川家モ亦家臣中川求馬ヲ留メテ城番トシ兵六百五十ヲ以テ城ヲ守ラシメ翌二十五日長久寺ヲ獲シテ豐後ニ歸ル代官辻彌五右エ門勘定役平岡彦兵衛等悉ク郡村ノ政ヲ預カリ之ヲ治ム小笠原家既ニ城ヲ出テ上下相率ヒテ櫻町明蓮寺ニ移リ老臣列座シテ永ク暇ヲ諸士ニ賜フ皆涕泣敢テ仰ギ見ルモノナシ時ニ諸士中數年以來扶持知行米ノ不足ヲ憤リタルモノ五百余人金谷若宮八幡宮ノ境内ニ會シ首領十七人ヲ選舉シテ將ニ訴フル處アラントス物情騒然人々皆疑懼シ亦爲ス處ヲ知ラス平田半藏馳セ至リ大聲衆ニ諭シテ曰ク凡國家多難ノ秋ハ事常ニ錯誤多シ昔承久ノ亂天王寺ノ燈料地ヲ沒シ又住吉春日ノ神田ヲ奪ヒシ例渺カラス卿等願クハ能ク此等ノ往事ヲ顧ミテ今日ノ狀ヲ想ヒ幸ニ怒ヲ弛メテ小笠原家ノ末路ヲ全フセラレシヲ其扶持知行ノ不足ノ如キハ正ニ貨幣ヲ以テ之ヲ償フ

ベシト乃家中ニ銀各十枚切米方ニ銀各五枚足輕ニ銀各三枚中間ニ銀各二枚ツ、ヲ分賜シ事漸ク平クヲ得タリ二十六日代官以下ノ諸有司皆小笠原家藩士ノ邸宅ニ移リテ之ニ居リ内城外廓ノ守ヲ堅クス二十七日領内七組ノ大庄屋蠣瀬庄右衛門唐原有右衛門平田太右衛門今津作右衛門敷田万右衛門佐知條右衛門津民儀右衛門ヲ召シ二十八日領内小庄屋百九人及中津町年寄ヲ召シテ并ニ代官ニ謁見セシメ更ニ中津十四町ノ人民ニ命シテ島田口小倉口金谷口蠣瀬口大塚口渡守口ノ六關門及侍屋數百五十三軒足輕組屋敷三百九十四軒ヲ交番衛護セシム二十九日納米千石ヲ以テ城米ニ附ス二月十日犬飼半左衛門中津ヲ去リ小倉ニ赴キ終ニ江戸ニ往ク始小笠原家ノ諸士明蓮寺ニ相別ル、ヤ或ハ舊主ヲ慕フテ安治ニ赴キ或ハ仕ヲ求メテ江戸京坂各地ニ移リ或ハ中津遠近ノ村里ニ散住ス一松村ニ阿部作右工八原彌七守岡市郎右工門野中作右工門清水作平原安美門重右工門中根軍衛垣生平右工門牛神村ニ松山伊兵衛蠣瀬村ニ佐々木彌三兵衛下宮永村ニ

山脇茂兵衛高倉權右工門原源左工門高瀬村=小見彈藏勝野四郎右工門左
 田元右工門万田村=村上彦五郎溝口次郎左工門中勝村=高木甚八全次右
 工門相原村=木下藤兵衛宮夫村=村上惣右工門上池永=松本平内湯屋村
 =掛岡右工門下池永=日下助右工門島田=鹿鳴軍右工門上宮永=芹河元
 規下正路=江見興一兵衛大新田=榎本佐五右工門佐々木作兵衛金谷=西郡
 甚兵衛茂呂吉右工門小山吉右工門二木傳右工門佐々木兵衛萱津=西郡
 興右工門乙部六右工門田尻=二木庄右工門是則=堤左平太井下倉右工門
 大悟法=佐々軍右工門中原=大熊權七永添=安田才右工門大池四郎右工門
 門日岐源市左工門横井所右工門福島=光早太光源太郎右工門澤渡清左工門
 土屋石翁伊藤田=秋本伊兵衛野依=水城勘七前橋八郎右工門鍋島=小門
 原森右工門加來=藤川異夕字野=澤渡朝右工門掛○一兵衛山○權右工門山
 久保田彦兵衛佐々木佐右工門穗野市左工門西澤九郎平尾七郎右工門見玉
 添權右工門垂水=笠原十兵衛全軍八直江=小出彌平太幸子=坂部佐市右工
 安右工門垂水=笠原十兵衛全軍八直江=小出彌平太幸子=坂部佐市右工
 門宮本源七別府=和田與右工門以上正徳六年ノ浪人獨犬飼等ノ諸老臣數
 モアリ又今回ノ浪人中ノ漏レタルモアルガ如シ
 八恩顧ノ商家ニアリテ中津ニ止マリシカ茲ニ至テ皆多ク江戸ニ移ル二十
 六日八面山鳴動シテ山腹大ニ破裂ス六月一日斧立ノ道路割ク横三尺五寸

深十丈長三十丈乃チ人夫三百五十人ヲ發シ三日ニシテ之ヲ修ム此日樋田村
 佛坂ノ巖石亦大ニ崩レ道路ヲ填ム九日辻彌五右衛門俄ニ死ス始メ彌五右
 衛門等ノ郡村ヲ治ムルニ中リ加來大悟法ノ人民大貞ト境ヲ争ヒ敗訴ノ民八
 人獄ニ下ルニ遇フ加來村ノ人民乃金玉ヲ以テ吏ニ賂ヒ終ニ其罪ヲ贖フ是
 ヲリ菴葺漸ク行ハレ且代官以下皆次第ニ政治ニ倦ミ櫻町茂右衛門出小屋
 甚兵衛八百屋清兵衛等ニ命シテ高松ノ遊女三十余人ヲ聘シ日夜歌舞淫樂
 ヲ事トス是ニ於テ給用足ラズ仍テ中津人民ノ六關門及侍屋敷ノ監守ヲナ
 スモノヲ捕ヘテ其懈怠ヲ責メ之ニ罰金ヲ徴シ宴遊ノ資ニ供シ或ハ道路ヲ
 運輸スルノ貨物ニ課スルニ通行税ヲ以テシ之ヲ己等ノ私費ニ充テ横政虐
 行至ラサル處ナシ嘗テ小笠原家ノ浪士光早太家僕ヲ卒ヒテ古道具ヲ擔ハ
 シメ通行ス奸吏等群至シテ過銀五百目ヲ課ス早太大ニ怒リ直ニ代官處ニ
 抵リテ大呼其過銀徵收ノ由ヲ詰ル彌五右工門等大ニ悞レテ之ヲ謝ス之ニ

リ過銀徵收ノ事ヲ癩スト雖猶樽代見舞、服乞、袖銀、等ノ名ヲ以テ煩ニ苛稅ヲ徵收スルヲ以テ人民困苦皆頸ヲ延キテ明主ノ此國ニ入ラシヲ希フ既ニ六月十九日ヲ期シテ奥平家入國ノ報達シ五月二十八日其先手中津ニ入ル時ニ人民嗟嗟ノ聲坊市ニ溢レ村里荒蕪滿領衰微ノ徵察スルニ堪ヘタリ與平家ノ諸有司皆大ニ驚キ稍々代官等ノ奸ヲ悟ル彌五右工門大ニ漸悞シ是ニ至テ遂ニ自殺ス

間居草摺記ニヨレハ小笠原末路ノ慘狀ハ察スルニ余アルモノアリ中ニ小笠原ノ舊臣ガ次第ニ困窮スル狀ト及當時紙幣大ニ下落シテ元來紙幣一匁錢八十文ノ價アリシモノ僅ニ二十文トナリ米價一石四百匁ニ上リ諸品從テ騰貴シ恰モ玉ヲ蒸桂ヲ燒ノ思アリト云フガ如キハ尤モ想像スルニ堪ヘタリ予案スルニ天保饑饉ノ際紙幣四十文ニ下リ米一石三百目從來百二十酒一舛三匁五分位ニ上リテサヘ諸民困窮一方ナラサリシ

神社

ト聞ケハ當時ハ天保年度ニ過クルノ數層ノ甚シキヲ知ルヘシ○小笠原家ノ去ル時其墓ヲ明蓮寺ニ遺ス故ニ同寺之ヨリ小笠原家ノ徽號三階菱ヲ用フルニ至ル○茲ニ此中世紀中ニ創立セシ社寺ノ著名ナルモノヲ記セシニ先中津城内ノ城井權現ハ宇都宮鎮房ヲ稻荷明神ハ鎮房ノ從臣ニテ當時城内ニ戰死セシモノヲ元錄十五年四月恠異ニ因テ小笠原氏之ヲ祀ルト古記ニ見ヘタリ又此時千代姫ヲ其刑場小犬丸河原ニ祀テ宇賀神社トスト云○圓應寺知恩院末、淨土宗、鎮ハ天正十五年僧眞譽ノ開基○合元寺光明寺末、淨土宗、西ハ天正十五年姫路ヨリ移ル黒田氏ノ菩提處也○西蓮寺本願寺末、眞宗、西ハ天正十六年亦播磨ヨリ移レリ○大法寺末、日蓮宗、一、致、派、寺、助、ニ、アリハ天正十六年亦播磨ヨリ移レリ○慶長五年仲津郡今井村淨善寺三世村上良慶細川忠興ニ從テ來リ木寺ヲ創立シテ之ヲ孫良殘ニ傳ヘテ歸ル○永照寺本願寺末、眞宗、東ハ元和元年細川行

寺院

宗ナル者ノ創立○本傳寺京都木能寺末、日蓮宗ハ元和五年創立○安全寺
 長州大寧寺末、禪宗曹ハ寛永元年大寧寺七世洪山鏡和尚ノ開基○祥雲寺
 洞派、角木村ニアリ、ハ寛永元年大寧寺七世洪山鏡和尚ノ開基○祥雲寺
 京都大德寺末、禪宗臨ハ寛永二年清巖和尚ノ開基○淨安寺知恩院末、淨土
 濟派、新魚町ニアリ、ハ寛永十七年小笠原伯耆守政直ノ建立ニ係ル○閻魔堂及海藏院應
 寺末、淨土宗鎮西派、角木村ニアリ、一ハハ寛永年中一ハ寛文十年ニ圓應
 ハ閻魔ヲ安シ、一ハ阿彌陀ヲ安ス、一ハハ寛永年中一ハ寛文十年ニ圓應
 寺三世本興上人ノ開基○圓龍寺知恩院末、淨土宗鎮ハ承應元年專譽上人
 ノ開基○安養寺大德寺末、禪宗臨ハ萬治年中唐叔大和尚ノ開基○阿彌陀
 寺合元寺末、淨土宗西山ハ延寶六年合元寺十二世盤山ノ建立○其他觀定
 派、森の丁ニアリ、大寧寺末、禪宗曹洞等ハ創立ノ年月明ナラザル
 寺、本願寺末、眞宗東、壽福寺大寧寺末、禪宗曹洞等ハ創立ノ年月明ナラザル
 派、萱津ニアリ、内ナラシテ自性寺妙心寺末、禪宗臨濟派、松岩寺妙心寺末、禪
 寺、蓋中世紀ノ内ナラシテ自性寺妙心寺末、禪宗臨濟派、松岩寺宗臨濟派、
 寺、妙心寺末、禪宗曹洞派、上州最興寺末、ノ四寺ハ興平氏ニ從テ中津ニ入レル也
 以上四寺ハ、サテ之ニ因テ觀レハ我中津ノ佛教ノ盛昌ニ赴キタル其一班
 後ニ再出ス

宗敬

ヲ知ルヲ得ノ且又寺院ハ眞宗敢テ多キニアラサレ而レ其門徒ノ
 數ニ至テハ明遺寺一院ニテモ能ク全町他宗ノ總壇徒ニ超過スルガ如キ
 有様ナレハ眞宗最盛大ニシテ之ニ亞クモノヲ禪宗ト士族ハ古來殆トス眞
 言宗ノ如キハ現今實ニ寧々タルモノナリ

中津歴史上
終

中津歴史下

東京	小幡篤次郎校閱
中津	村上田長校正
中津	廣池千九郎編述

第四編
近世紀

本編ハ享保二年奥平氏ノ入國ヨリ明治四年廢藩置縣ニ至ル百五
 十三年間中津ガ空前絶後ニ尤繁昌セシ時代又領内人民ガ前代ノ
 毒政ヲ免レ稍太平ヲ謳歌セシ時代ノ記事ニシテ而シテ現在中津
 地方人民ノ言語風俗人情習慣氣質并ニ教育宗教職業及貧富生活
 ノ情狀等ハ皆此時代間ニ陶冶馴成セシモノナリハ吾人ノ殊ニ尤
 考究ヲ要ス可キ時期トス故ニ本編ノ記事ハ之ヲ他ニ比スレハ最

精密ニ叙述スルヲ以テ讀者若前後彼此ヲ對照概括シテ注意活讀
 玩味スル處アラハ則奥平氏ノ民政享保以降六七十年間ハ稍穆到
 ニシテ凶歲ノ際ニ居リツ、民自安堵セシモ寛政以後ハ漸次ニ弛
 衰シテ百弊恰モ小笠原氏ノ季路ニ比スヘキニ至リシ景狀並ニ藩
 府内閣ノ顛覆ハ常ニ藩士ノ生活上ニ關係シ且藩士ノ騷擾ノ如キ
 亦多クハ生活上或ハ上下兩級士族ノ軌轢ニ過キズシテ政治上ノ
 争ノ如キハ異ニ稀有ノ事ナリシ有様等其他各種ノ政治的社會的
 上珍奇ナル現象ヲ編中ニ發見スルコトヲ得テ其得ル處蓋鮮少ナラ
 サルヲ信ス然リ而シテ又下ノ上ニ倣フハ自然ノ勢ナレハ奥平氏
 藩風ノ地方人民ニ傳ハリシハ勿論當市ニ宇都宮ノ言語ナルカ故
 ニ特ニ本編ニハ奥平氏ノ系譜ヲモ掲ケ置ケリ希クハ意ヲ用ヒヨ

奥平氏治世間紀事

紀元二三七
西曆一七一

奥平氏人國

奥平氏系譜

見玉兒

氏行

享保二年十月奥平昌春江戸ヨリ舊領宮津ヲ經テ中津ニ入ル始此歲二月昌
 春中津ヲ領スルノ命ヲ受クルヲ以テ先諸有司ヲシテ中津ニ來リ政務ヲ調
 査セシメ尋テ老臣奥平定賢書圖生田勝峯郡夏目治部勸解由等ヲ遣リ幕府ノ上
 使算新太郎川勝刑部ノ檢閱ヲ經テ六月中津城ヲ中川家ノ城代ヨリ受取リ
 而シテ九月自江戸ヲ發シ是ニ至テ始テ國ニ就ク

奥平氏姓ハ源具平親王ニ出ツ親王十二世ノ孫赤松則景治承四年安藝ヨ
 リ關東ニ徙リ源賴朝ニ從フ則景二子アリ長チ家範ト云赤松氏ヲ繼グ二
 子氏行九八郎ト稱シ後庄右衛門ト改メ出テ、外舅兒玉氏ヲ繼グ兒玉氏
 ハ藤原伊周ニ出ツ伊周九世ノ孫朝行武藏秩父ヨリ上州小野郡ニ移リ兒
 玉黨ト號ス朝行ノ子ヲ忠行ト云忠行子ナシ氏行ヲ養フテ嗣トナス既ニ
 シテ氏行其家ヲ去リ離別シテ源姓ニ復シ其子孫世々上州奥平郷ニ居ル
 因テ氏トス軍配團扇、五三桐、澤瀉、半月、九曜、並ニ家紋タリ軍配ハ赤松家
 子表シテ五階

◎ 貞平氏

ハ松ヲ用ユルモノヲ鏡軍配ト云輪廓ナシ竹ヲ用ユル者ヲ輪軍配又笹軍配ト云親族之ヲ用ユ或ハ家臣ニ衣服ヲ賜フヤ其紋章アルモノハ概シテ松ヲ以テシ松ヲ許サス氏行ヨリ持貞繼定高定滿定政定家ヲ經テ貞俊ニ至リ始テ三河ニ徙リ作手城ヲ領ス貞俊ノ子貞昌貞昌ノ子貞勝監物ト稱ス世々今川氏ニ屬ス弘治二年貞勝今川氏ニ叛キ族定良ヲシテ兩山寨ヲ守ラシム地勢險惡要害甚佳ナリ八月今川義元ノ將菅沼定村來リ攻ム貞良奇策ヲ設ケ敵ヲ包ミテ定村ヲ狙撃シ之ヲ殺ス然レモ今川氏ノ兵益進ニ城殆陷ラントス貞勝懼レ復今川氏ニ降ル永祿二年五月徳川家康糧ヲ尾州大高城ニ入ル此日定勝大ニ家康ノ軍ヲ破ル三年義元丸根城ヲ攻ム貞勝ノ子貞能力戰シテ功アリ四年貞勝貞能共ニ徳川氏ニ降ル家康固ヨリ貞平氏ノ豪族タルヲ知リ甚之ヲ重ツ十二年三月之ヨリ先家康今川氏眞ヲ掛川城ニ攻ム時ニ定能ノ從臣名倉五郎作捨法ニ長ス力戰シテ敵ヲ破ル五月城兵糧ニ乏シク氏眞頗困苦ス家康則貞能ヲシテ和ヲ謀ラシム

◎ 第四編 近世紀

貞能今川氏ノ將小倉内記ニ善シ因テ書ヲ作リテ家康ノ使ト共ニ城ニ入ラシメ内記ニ就キテ和ヲ勸ム氏眞終ニ降リ後城ヲ出テ、相摸ニ走リ北條氏ニ依ル元龜元年六月家康信長ヲ救ヒ淺井朝倉ノ二氏ト姉川ニ戰フ貞能家康ノ左先鋒トナリ大ニ功アリ此歲秋三河盡ク武田氏ニ屬ス貞能亦己ムヲ得ス徳川氏ニ叛シテ之ニ屬ス天正元年正月信玄野田城ヲ攻メ守將菅沼定盈松平忠正ヲ擒ニス貞能信玄ニ謂テ曰ク吾曹ノ質徳川氏ニアリ請フニ將ヲ以テ之ニ易ヘント信玄之ニ從フ四月信玄病テ卒ス其子勝頼暗劣國政日ニ亂ル六月貞能復竊ニ疑フ徳川氏ニ送ル時ニ武田氏ノ諸將皆貞能ヲ疑ヒ質ヲ召ス貞能族黨ヲ集メテ之ヲ議シ終ニ幼子仙九信昌ノ妻阿風及族臣與平虎之助等ヲ送ル既ニシテ武田信豐黑瀬ニ次シ貞能ヲ招ク家臣皆之ヲ危ム貞能從士ヲ戒メテ曰ク我首ヲ見ラズンバ動クト勿レト既ニ到ル信豐問テ曰ク聞ク子近日異心アリト其故如何ト貞能

伴リ驚キ既ニシテ除コ笑テ答ヘテ曰ク今ヤ亂世父子互ニ猜疑ス若人言
 ナ輕信セバ恐クハ敵ノ謀ニ陥ラフ質子既ニ貴門ニアリ何ヲ以テカ異心
 アラソヤト信豐猶疑ヒ棋ヲ圍マソフ求ム貞能之ヲ諾シ又晝食ヲ喫ス
 信豐別ニ人ヲシテ貞能ノ從士ニ向ヒ告ケシメテ曰ク貞能友ヲ以テ誅セ
 ラルト從士動カス是ニ於テ信豐疑釋ケ且告クルニ密計ヲ以テス貞能辭
 シ歸リ即夜部下ヲ率ヒテ作手城ヲ去リ濱松ニ奔ル貞勝及貞能ノ弟常勝
 從ハス武田氏ノ兵追擊甚急ナリ貞能石堂金阪ニ返戦シテ敵ヲ卻ケ走リ
 テ岩崎村瀧山ノ舊砦ニ入ル時ニ家康松平伊忠等ヲシテ來リ助ケシム貞
 能其兵ヲ合セ之ヲ防守シ多ク銃手ヲ以テ甲斐ノ兵ヲ傷ケ北クルヲ追フ
 テ大ニ田原坂ニ戰フ既ニシテ甲斐ノ軍終ニ全ク敗衄シテ遠ク遁ル勝頼
 之ヲ聞キテ大ニ怒リ質子仙丸以下ヲ捕ヘテ盡ク之ヲ磔殺ス三年二月家
 康武田氏ノ屬城長篠ヲ拔キテ貞能父子ノ勳功ヲ賞シ之ヲ信昌ニ賜フ是

貞能武田氏
 ヲ去レ

信昌長篠ニ
 籠城ス

ニ於テ信昌大ニ塹壘ヲ修メ防備ヲ堅クシテ之ヲ守ル五月勝頼大舉シテ
 來リ城ヲ圍ムテ數重嚴ニ糧道ヲ絶ヤテ大ニ攻具ヲ設ケ隧道ヲ鑿テ攻
 撃晝夜ヲ連テ城陥ルテ旦夕ニアリ信昌自士卒ヲ督勵シ防禦甚勉ム既ニ
 シテ糧殆盡キ纒ニ數日ノ食ヲ余スニ過キス信昌一夜衆ヲ聚メテ謂テ曰
 ク士氣精銳以テ事ヲナスニ足ル恨ラクハ糧食欠匱數日ヲ支ヘ難シ誰カ
 能ク城ヲ出テ救ヲ促スモノゾト衆顧ミテ敢テ應スルモノナシ獨賤卒鳥
 居勝高進テ曰ク臣請フ往カント信昌大ニ悅ビ乃家康ニ告ケシメテ曰ク
 城郭堅カラサルニアラス兵甲足ラサルニアラス獨闕ク處ノモノハ糧食
 ノミ若急ニ援ヲ賜ハスソバ則信昌自殺シテ以テ士卒ニ代ランノミト勝
 高命ヲ脚ミ乃暗號ヲ約シテ曰ク臣城ヲ出ツルヲ得ハ烽火ヲ舉ケテ以テ
 信トナサント十四日夜城ニ絶シテ塹ヲ踰ヘ明旦長篠ノ前山ニ達シ烽火
 舉ク城中望ミ觀テ大ニ悅フ勝高馳セテ家康ノ營ニ抵リ狀ヲ白ス家康曰

ク信長父子既ニ岐阜ヲ獲ス而シテ予亦今日途ニ上ラントスト勝高夜ニ
 乘シテ壘際ニ至リ將ニ城ニ入ラントス甲斐ノ將馬場信房勝高ノ風ヲ怪
 ミ捕ヘテ家康ノ返書ヲ奪フ信房勝頼ノ命ヲ受ケ勝高ニ勸メテ曰ク汝城
 際ニ至リ城中ニ向ヒテ大呼ソ言ヘ信長家康來リ援フヲ能ハス速ニ出テ
 降ルヘシト此ノ如クセハ則厚ク汝ヲ賞セント勝高伴リ諾ス十七日勝高
 甲斐ノ壯士數十人ニ環擁セラレ城下ニ至ル遙ニ城ヲ觀テ大呼シテ曰ク
 援軍來ルヲ三日ヲ出デス諸君夫努力セヨト言未畢ヲス橫槍ノ下ニ死ス
 勝頼大ニ怒リ其屍ヲ城外ニ磔ス勝高性剛強右衛門ト號シ時ニ歳三十
 六辭世ノ歌ニ云ク「我君の命よのぼる玉の緒比何厭ひけん武士の道」ト
 勝頼更ニ信長ノ偽書ヲ作リテ城中ニ贈リ降ヲ勸ム十八日家康兵二万ヲ
 以テ來テ高松ニ軍シ該夜信長兵五万ヲ以テ設樂ニ陳ス信昌之ヲ望ミ鈴
 木金七ヲシテ書ヲ齎ラシ告ケシメテ曰ク城中猶守ルニ足ル若敵急ニ迫

鳥居源右衛門

七 族
五 老

蒲城ノ諸士

ヲハ則鐘ヲ鳴シテ之ヲ報セン請フ輕々シク進ミテ敗ヲ取ルヲ勿レト家
 康大ニ悦ビ之ヲ賞ス二十一日味爽貞能酒井忠次ニ從ヒ武田氏ノ屬壘齋
 巢ヲ襲ヒ之ヲ陷ル此日齋巢ノ戰起ルヲ期トシ兩軍大ニ長篠ノ城外有見
 原ニ戰ヒ旦ヨリ晡ニ至リ兩軍鋒ヲ交フルヲ五十八合甲斐ノ軍終ニ大ニ
 敗レ老將雄卒悉戰死シ勝頼僅ニ身ヲ以テ免ル信昌門ヲ開キテ突出シ甲
 軍ヲ追躡ス家康大ニ信昌ノ戰功ヲ嘉シ長篠阪嶺吉良田原刑部吉北新
 莊山梨高遠ノ地三千貫ヲ賜フ且親族與平貞友久兵衛全貞置修全勝正但全
 勝次周全勝吉次左門全定正與兵全定友佐及重臣山崎信宗善兵衛生田勝重四郎
 兵藤勝末新左衛門甚右夏目某兵衛等ヲ賞ス七族五老ニ田原矢の
 信長モ亦貞能父子ヲ賞シテ物ヲ賜フ籠城ノ士ハ一族及六人ノ小親族與
 衛與平大隅與平仁右衛門與平十郎左門伊與田助右門阿知波孫左衛門
 門與平覺兵衛平野彦兵衛櫻井兵左門伊與田助右門阿知波孫左衛門
 阿知波七兵衛權田市右衛門後藤五右衛門片岡彌右工門原作之右工門中
 島久藏天野與四朗河中小右工門羽田野源次郎曾沼久左工門景山彌兵衛

細井系右工門夏目八兵衛齊藤又左工門伊與田市藏恩田半五左工門河合磯右工門竹下彦左工門中西藤九郎神谷久左衛門豐田三太夫清水善右衛門夏目市兵衛鈴木孫左工門小野田源右衛門夏目小兵衛伊與田治助同清藏今泉内記山内三郎九郎與平三朝兵衛同治郎右衛門同加賀同五郎右衛門同小平衛片岡惣右衛門與平佐忠同喜七朝鈴木金七郎曾沼治太夫岡田五兵衛夏目小六討死ノ士ハ今泉内記與平次郎右衛門山内三郎九郎伊與田助右衛門酒井理兵衛平野彦兵衛鈴木孫右衛門同金七郎夏目市兵衛伊與田市藏清水善右工門夏目小六中島久藏神谷久左工門阿知波七兵衛同孫右工門伊與七月家康更ニ其長女龜姫ヲ以テ信昌ノ室トナス時ニ龜姫田清藏全治助

武考之助

歳十八此月織田信忠岩村城ヲ攻ム信昌功アリ乃其城ヲ賜ハル八月信昌酒井忠次ト共ニ岐阜ニ赴キ援軍ノ勞ヲ謝ス時ニ信長甚信昌ノ弱年寡兵孤城ニ懸リテ善ク大敵ヲ防キシヲ嘆シ稱シテ武夫ノ魁トナシ名ヲ武者之助ト賜ヒ且寶刀衣服ヲ賞ス十年四月信長武田氏ヲ滅シ歸路濱松ヲ過ク信昌迎ヘ謁ス信長復長篠ノ往事ヲ語りテ其功ヲ稱揚ス六月信長其臣明智光秀ニ弑セラレ所在騷擾ス信昌酒井忠次等ト信州ニ入り伊奈郡ヲ徇

フ時ニ家康其功ヲ賞シテ遠州榛原郡ヲ信昌ニ賜フ十二年豊臣秀吉織田信雄ト隙アリ三月家康信雄ヲ助テ秀吉ト小牧ニ戦フ信昌酒井忠次松平家信等ト先鋒トナリ敵將森長可ノ羽黒ノ陣ヲ討チ奮戦シテ大ニ之ヲ破リ首級三百余ヲ獲タリ十四年家康秀吉ト和シ十月京師ニ入ル信昌從ヘリ時ニ秀吉信昌ヲ呼ビ羽黒ノ戦狀ヲ語りテ其強武ヲ稱揚ス十六年信昌ノ二子某駿府ニ至リ家康ニ謁ス家康乃養フテ子トナシ松平氏ヲ冒サシメ元服ヲ加ヘテ偏名ヲ賜ヒ名ヲ家治ト稱セシム此歳又信昌美作守ニ任シ從五位ニ叙セラレ家治右京太夫ニ任シ從五位下ニ叙セラレ十八年四月秀吉北條氏直ヲ小田原ニ攻ム信昌子弟ヲ卒ヒテ軍ニ從ヒ宮城口瀝取口ノ戰特ニ功アリ七月事平ラキ八月信昌上野宮崎一万石ニ封セラレ貞能小幡三万石ニ封セラレ十九年家治上州長根ノ地七千石ヲ賜ハル文錄元年三月卒ス桃林院殿ト諡ス歳十四年五月徳川秀忠信昌ノ三子忠七

信昌宮崎一
万石
貞能小幡三
万石

郎ヲ召シテ偏名及松平氏ヲ授ケ忠政ト名ク後忠政曾沼定利ノ養子トナ
 リ養父ノ遺領上州吉井二万石ヲ嗣ク十月貞勝卒ス貞勝晩年髪ヲ剃テ道
 文ト號ス始貞能父子作手ヲ去ルノ時道文獨リ武田氏ニ屬ス之ヲ以テ家
 康ヲ憚リ甲州村山ヨリ竊ニ逃レテ三州宮崎ノ故城ニアリシガ之ニ至テ
 病没ス歳八十四慶長三年十二月貞能卒ス歳六十二壽昌院殿ト諡ス五年
 關原ノ役起ル信昌舉族軍ニ從フ時ニ信昌ノ叔父貞治監使タリ松尾山ニ
 赴ク途ニ敵ノ伏兵ニ狙撃セラレ奮戰多ク首級ヲ得レト終ニ丸ニ中テ死
 ス既ニシテ徳川氏大ニ捷ツ忠政秀忠ニ從ヒ上田城ヲ攻ム信昌ノ部將朝
 日千助奥平左衛門等先登シテ功アリ家康京師ニ入リ信昌ヲ以テ京都所
 司代トナシ幾旬ノ政令ヲ主ラシム加藤正次板倉勝重大久保長安之ニ副
 タリ時ニ信昌關原ノ敗將安國寺惠瓊ヲ捕フ始吉川廣家公命ヲ以テ惠瓊
 ヲ鞍馬山ニ索メテ得ズ偶惠瓊ノ驪近江ノ僧樂鎮ナルモノ來リテ信昌ニ

加納十方石

忠政

信昌ノ功勞

告ケルニ惠瓊ノ本願寺子院ニアルヲ以テス信昌卒ヲ獲シテ之ヲ捕ヘン
 トス惠瓊之ヲ知り肩輿ニ乘リテ東寺ニ走ル我兵急ニ之ニ追ル惠瓊ノ從
 士井戸九郎等其免ルヘカラザルヲ知り刀ヲ抜キテ之ヲ輿中ニ刺ス惠瓊
 殊セス我兵終ニ之ヲ捕ヘ創ヲ療ス十月信昌公命ヲ以テ石田三成小西行
 長及惠瓊ヲ三條磔ニ斬リテ其首ヲ梟シ又伏見ノ反徒十八人ヲ粟田口ニ
 磔ス六年九月美濃加納十方石ニ封セラレ信昌内城ニアリ六万石ヲ領シ
 而シテ忠政家ニ復リ松平氏ヲ稱シ從五位下ニ叙シ飛騨守ニ任セラレ
 外城ニアリ四万石ヲ分領ス七年信昌致仕シテ外城ニアリ忠政牙城ニ移
 リテ六万石ヲ領シ十三年從四位下ニ叙シ待從ニ任シ十四年更ニ攝津守
 ニ轉シ十五年父ノ封ヲ合セ十方石ヲ食シ十九年十二月卒ス歳三十三信
 昌忠政ノ子忠隆ヲ以テ嗣トナシ封ヲ承ケシム元和元年三月十四日信昌
 卒ス歳六十一久昌院殿ト諡ス信昌性俊遇文武ニ達シ兼テ易ニ通ス嘗テ

○奥平氏

父貞能武田氏ニ仕へ竊ニ心ヲ徳川氏ニ歸ス而シテ甚去就ニ苦ム信昌則
 占シテ曰ク蛇年ノ人必死スト蓋信玄大永二年癸巳ヲ以テ生ル果シテ信
 玄此歳ヲ以テ死シ勝頼暗愚其國久シカラスシテ亡ブ長篠ノ役信昌歳僅
 ニ二十善ク孤城ヲ以テ大敵ヲ支ヘ又羽黒ノ戰森勢ヲ破リ西兵十萬ヲシ
 テ膽ヲ寒カラシム其他信州小田原關原等戰功前後十余回終身ノ業一ニ
 徳川氏ノ爲ニ盡ス後世子孫十萬ノ封未其勞ニ酬フルニ足ラサルナリ七
 年忠隆從五位下ニ叙シ飛騨守ニ任セラル寛永九年正月卒ス歳二十五實
 相院殿ト諡ス嗣子左京猶幼ナリ十二年七月卒ス歳四嗣絶へ國除カル世
 ニ之ヲ加納奥平家ト稱ス而シテ中津奥平家ノ祖先家昌ハ信昌ノ長子ニ
 シテ母ハ徳川氏小字ハ九八郎天正五年生ル九年十二月家康首服ヲ加ヘ
 偏諱ヲ賜テ家朝ト云後家綱ト改メ更ニ家昌ト改ム十八年四月小田原征
 討ノ軍ニ從ヒ功アリ文錄四年三月從五位下ニ叙シ大膳太夫ニ任セラル

加納奥平氏
 國除
 家昌

宇都宮十萬石

家昌時ニ歲十四始家昌ノ弟家治天正十六年十一才ニシテ叙爵ス之ヲ以
 テ世或ハ家昌ヲ稱シテ正母徳川氏ノ出ニアラスト云モノアリ然レモ之
 レ當時ノ事情ヲ知ラサルノ論ナリ家治幼ナリト雖嘗テ家康ノ養子ト慶
 ナル故ヲ以テ叙爵ノ早キト亦宜ナラスヤ請フ世人之ヲ誤ルト勿レ慶
 長四年從四位下ニ叙シ待從ニ任セラル七月徳川秀忠ニ從ヒ奥田幸村父
 子ヲ信州上田城ニ攻ム九月七日兩軍俄ニ城外ニ遇ヒ大ニ戰フ我兵奮擊
 城外ノ一堡ヲ破リテ進入シ首級三十余ヲ獲テ退ク六年二月家昌父信昌
 ノ舊領三萬石ヲ領ス十二月下野國宇都宮ニ封セラレ十萬石ヲ食ム始宇
 都宮ハ蒲生秀郷ノ領スル處ナリシカ是ニ至テ會津ニ轉セシヲ以テ家康
 其後守ヲ僧天海ニ問フ天海曰ク宇都宮ハ關東咽喉ノ要地ナリ宜シク外
 孫奥平氏ヲシテ之ヲ守ラシムヘシト家康欣然笑テ曰ク之レ吾心ヲ得タ
 リト仍テ此命アリ勝次五千五百石勝吉二千三百石勝正二千三百石
 シ居レリ老臣山崎二千三百石生田十年之ヨリ前七族皆無役ナリシガ是
 ニ至テ始テ老臣ノ事ヲ行フ十六年十月家昌ノ夫人本多氏卒ス十九年大

○第四編 近世紀

阪前役起リ十月九日家昌江戸留守ヲ命セラル十日病テ卒ス壽三十八六通
 院殿ト諡ス家昌性寛厚好テ小鼓ヲ拵ツ家昌始父祖ノ忠烈ヲ受ケ且家康
 ノ外孫タルヲ以テ夙ニ地ヲ宇都宮ニ領スト雖子孫未必シモ此小封ニ止
 マラザルベシ惜哉早世終ニ大阪ノ役ニ從フコ能ハス爲ニ其封ヲ増スニ
 至ラザリシヲ長子忠昌此歳十一月ヲ以テ封ヲ繼ク始テ七歳忠昌幼字
 千福九八期ト稱シ諸老臣之ヲ輔ケ江戸城ニ留守ス元和元年正月長篠ノ
 舊例ニヨリ七族五老忠昌ニ從ヒ家康ニ謁ス老臣桑名勝成水主山崎勝宗兵
 衛奥平綱正左兵衛全正頼衛武兵衛四人謁見ヲ許サル之ヨリ代々例トナルト
 云二年三月忠昌又駿府ニ至ル賢臣桑名主水之ニ從フ時ニ家康不豫ナリ
 乃寢室ニ謁見ス家康首ヲ搖ケテ呼ブ曰ク千福汝何ヲカ望ムト手ヲ印籠
 巾着根付緒等ヲ出シ之ヲ賜ヒ且白鳥ノ槍及葵紋付鞍置馬ヲ賜フ白鳥ノ
銘長サ三寸量目二十九匁源爲朝ノ鐵ニシテ舊青貝柄ナリシカ嘗テ逸見
三郎兵衛其柄ノ弱ナルヲ憂ヒ書院ニアリテ之ヲ振リ其柄ヲ折ル之ヨリ白

忠昌

白鳥ノ槍

古河十一万石
宇都宮十一万石

木ヲ以テ柄ヲ作リ深ク藏メ五年十月宇都宮ヲ轉シ下総國古河ニ移リ十
 一萬石ヲ食ム七年十月從五位下ニ叙シ美作守ニ任セラル八年八月復宇
 都宮ニ轉シ封土故ノ如シ始土居大炊頭上使トシテ古河ニ來リ信昌ノ夫
 人徳川氏ニ謁スルヤ徳川氏告グルニ古河ノ偏僻ナルヲ以テス故ヲ以テ
 終ニ再舊領ニ復セリト云十一年九月從四位下ニ叙セラル寛永元年忠昌
 夫人鳥居氏ヲ迎フ此時鳥居氏引出物トシテ具足五十領持參ス後此ヲ五
小性具足ト稱シテ江戸中津ニ分テ藏メタリト云
 月信昌ノ夫人徳川氏加納ニ卒ス歳六十六盛徳院殿ト諡ス六年幕府此歳
 ヨリ諸侯ノ妻子國ニ歸ルコトヲ禁ス仍テ忠昌家族ヲ繼ノテ皆江戸ニ至ル
 七年奥平綱正同正頼始テ老臣トナリ綱正千五百石正頼千石ヲ給セラル
 十四年桑名勝成老臣ニ列セラル十年七月長子昌能生ル十五年定次圖亦
 家老トナル十七年十月江戸木挽町ニ中屋敷ヲ賜ハル正保三年昌能從五
 位下ニ叙シ大膳亮ニ任ス承應元年八月老臣黒屋正輝内藤允ニ奥平氏ヲ賜

フ明曆二年七月芝高輪二本榎ニ下屋敷ヲ賜ハル三年正月江戸大火日比谷上屋敷木挽町中屋敷類焼ス寛文元年三月家中指物ノ制五條ヲ定メ之ヲ藩士ニ領ツ十一月正定ヲシテ父綱正ノ後ヲ繼ギ其家ヲ再興ス八年二月十九日忠昌卒ス壽六十一立光院殿ト諡ス忠昌性英敏嘗テ始テ東照公ニ謁スルノ前老臣山崎信興日ニ應對ノ言語ヲ教ヘ之ヲ演習セシム忠昌之ヲ苦ム乃問テ曰ク汝ガ教ユル處吾能ク之ヲ知ルト雖若他問アラバ亦何トカ答ヘンヤト信興曰ク若他問アラバ方ニ主公ノ思フ處ヲ以テ答フヘシト忠昌笑テ曰ク然ラバ則始ヨリ毫モ一事ヲ學ブヲ要セスト時ニ歳七歳聞クモノ感嘆ス此日家臣杉浦右工門兵衛殉死ス親族集議シ狂死ヲ以テ幕府ニ訴ヘントス昌能懸直其實ヲ訴フ三月二日忠昌ノ二週忌會ヲ宇都宮興禪寺ニ行フ奥平守雄集奥平正輝ト茶室ニ爭論シ終ニ互ニ短刀ヲ以テ相闘ヒ共ニ傷ヲ蒙ル正輝ノ族兵藤玄蕃之ヲ制シテ漸ク止ム始守

杉浦某殉死ス
奥平華人
奥平正輝

昌能山形九万石ニ移サ

雄正輝ト隙アリ而シテ忠昌ヲ葬ルノ夜守雄又興禪寺ニアリテ試ニ正輝ニ問フニ同寺ノ寮額ノ文字ヲ以テス正輝之ヲ讀ムト能ハズ慚恨スルト甚シク仍テ事遂ニ茲ニ及フ四月正輝怒テ自殺ス幕議殉死國禁ヲ犯シ且喪中騷擾家政修マラザルヲ以テ封土ヲ収メ更ニ特旨ヲ以テ八月三日昌能ヲ出羽山形ニ封シ九万石ヲ賜フ此日幕府杉浦右衛門兵衛國禁ヲ犯スノ罪ヲ罰シ其長子善右工門次子權田吉十郎ノ二人ニ死ヲ賜ヒ且其家族近親ヲ盡ク追放ノ刑ニ處ス九月二日守雄及正輝ノ子源八共ニ暇ヲ賜ハル此日又兵藤玄蕃奥平傳藏共ニ正輝ノ自殺ヲ蔽ヒ病死ヲ以テ藩府ヲ欺クノ罪ヲ以テ暇ヲ賜ハル是ニ於テ正輝ノ族夏目内記平野土左衛門桑各友之丞弟頼母同三七細井又右衛門同嘉兵衛曾沼次太夫上曾甚吾右衛門武居傳兵衛川俣三之介大内重太夫各家族ヲ卒ヒ凡七十余相與ニ宇都宮ヲ去ル十月山形城ヲ受取リ之ニ移ル九年七月夏目外記奥平傳藏等守

雄ノ弟與平正俊主馬ヲ討テ之ヲ殺ス始外記傳藏等源入ヲ擁シテ宇都宮
允ヲ去ルヤ下野國深澤ニ寓シ離敵守雄ヲ討テ以テ其讎ヲ報セント欲シ煩
ニ之ヲ求メテ得ス是ニ於テ傳藏同志ニ謀ルニ先正俊ヲ殺シ而シテ後守
雄ニ及バンコヲ以テス外記等之ヲ肯セスシテ曰ク正俊ハ敵ノ枝葉ノミ
只志ス處ハ守雄ニアリ若主敵ニ遇ハズシテ早ク既ニ同志ヲ傷カハ恐ク
ハ事成ラシト傳藏又奮テ曰ク日月流ルガ如シ奚ソ開ヲ竊ムニ忍ビソ
ヤ且若正俊ヲ討タハ守雄ノ居處亦自之ヨリ知ルヲ得ヘキニト慨然トシ
テ語リケレハ衆習之ヲ然リトシ乃老者ト幼者ヲ除キ壯士十五人此月初
日深澤ヲ發シ山形ニ赴ク時ニ源八歳僅ニ十三猶幼弱ナルヲ以テ之ヲ留
ム源八鵬ガズ仍テ夜ニ乘シテ之ヲ舍テ去ル衆既ニ山形ニ至リ竊ニ同國
米澤領赤湯ニ伏シテ其動靜ヲ窺フ十一日夜同志山田權平馳セ來リテ告
テ曰ク正俊其兄ヲ助ケンガ爲領主ニ乞フテ暇ヲ受ケ將ニ明日ヲ以テ山

形ヲ發シ米澤領ヲ過キントスト衆大ニ喜ビ即夜結鑿シテ沿道藤江村ノ
徑路ニ埋伏シテ之ヲ待ツ十二日昧爽正俊其同志小野德兵衛柴田勤右衛
門等七十余人ヲ率ヒ弓銃ヲ以テ隊伍ヲ編シ日夏左平太ヲシテ其進退ヲ
司ラシメ威氣凜然トシテ山形ヲ發シ藤江村ニ達ス外記傳藏等前後ヨリ
起テ俄ニ之ヲ圍ム正俊急ニ左平太ヲ呼テ之ヲ拒ガシム左平太命ニ應ヒ
ス且大聲罵テ曰ク予ハ土方氏右衛門ナルモノニシテ嘗テ夏日氏ニ恩ア
リ故ニ詐リテ汝ニ從ヒ以テ今日アルヲ待ツコ久シ汝速ニ死スベシト傳
藏ヲ助ケテ直ニ正俊ヲ斃ス正俊ノ從者德兵衛勘左衛門及大願軍左衛門
沼澤宇右衛門精屋忠兵衛船坂林平等奮戰シテ皆死シ殘者悉逃走セリ外
記等ノ同志死スルモノナク只山田權平等傷者六人アルノミ衆乃馬ヲ脛
フテ皆之ニ跨リ詐テ奈良下ノ關ヲ越ヘ馳セテ深澤ニ歸リ正俊ノ首ヲ源
八等ニ示シテ上下大ニ喜ヘリサレハ此報守雄ノ居處信州高島ニ達シテ

レハ守雄大ニ驚恨シ十年春終ニ守雄自姓名ヲ變シテ本多興兵衛ト稱シ其父半齊弟九兵衛等上下五十余人ト竊ニ江戸ニ出テ市谷淨瑠璃坂戸田七之助ナルモノ、組屋敷ヲ借り大ニ塹柵板塙ヲ設ケ又人数ヲ配置シテ非常ニ備ヘ家人ノ外毫モ他ノ出入ヲ禁シ日夜戒嚴以テ自護ル偶外記等守雄ノ信州ニアルヲ聞キ同志ヲ遣ハシテ之ヲ偵ハシムルニ守雄既ニ江戸ニ出デタルヲ以テ外記等乃扮身變姿日夜頻ニ江戸ヲ奔走シテ具サニ辛酸ヲ嘗メ搜索甚勉ム寛文十一年冬一日終ニ其居處ヲ知ルヲ得タリ是ニ於テ同志深澤ノ寓居ニ會シ其準備ヲ籌シ終ニ翌年二月二日ヲ以テ敵邸襲撃ノ期トナシ十二年正月外記等同志三十五人故アリテ人数源八ヲ擁シテ深澤ヲ發シ二月二日江戸ニ達シ淺草山田權平ノ寓居ニ着ス衆乃各結束シ背ニ被ルニ白色胴衣ニ黒色一文字ノ契符アルモノヲ以テシ田一徳齊村上ノ士五百騎ニ白地ノ線ノ羽織ニ黒ノ一文字ヲ畫キ合

興平源八父ノ歸ヲ報ス

以印トシテ信玄ノ旗下マデ切リ入リテ信玄ヲ傷ケタル例ニ倣ヒシモノニシテ後元録ノ比赤穂ノ遺臣大石良雄等ノ用ヒシ山形ノ合ヒ印一ニ今此讎討ニ用ヒシ一文字ノ合ヒ印ヲ祖述シタルモノナリト云因ニ記ス元録ノ復讐ハ管ニ合ヒ印ノミナラズ其襲撃ノ方畧亦一ニ此法ヲ學ビタルト云ヘリ二隊ニ分レテ夜半守雄ノ邸ニ至リ鼓譟門ヲ破テ亂入ス偶守雄家ニ在ラス其父半齊時ニ歳七十二嬰鏢トシテ壯者ノ如シ直ニ蹶起シテ家人ニ令シ急ニ防禦ノ備ヲナサシメ而シテ自薙刀ヲ提ケ次子九兵衛ト共ニ出テ戰フ其家人輕部六右衛門藤堂彦左衛門等能ク拒ギ攻者苦戰桑名三七大里清左衛門終ニ戦死シ頼母以下創ヲ蒙ルモノ亦頗多シ然レモ多年ノ忿念只今夜ノ一戦ニアルヲ以テ皆銳意奮闘遂ニ半齊以下悉ク防者ヲ殺傷シ更ニ大ニ守雄ヲ求メテ得ス是ニ於テ衆皆憤恨悲哀シテ其家ヲ去リ三日黎明牛込土橋ノ邊ニ到ル時ニ守雄家士十八九人ヲ率ヒ馬ヲ馳セテ追ヒ來ル衆大ニ驚喜シ直ニ進ミテ接戰ス外記等ノ同志細井加兵衛大内十太夫武居傳兵衛平野左門等皆善ク戰ヒ敵ノ家士高橋五左衛

○奥平氏

門以下十余人ヲ殺シ終ニ守雄ヲ橋下ニ斃シテ之ヲ斬リ以テ多年ノ積憤
 ナ散スルヲ得タリ既ニシテ源八外記傳藏等三人幕下ヲ擾スノ罪ヲ以
 テ伊豆大島ニ流サレシカ彼地ニ在ルヲ六年ニシテ延寶六年四月大赦ニ
 遇ヒ赦サレテ彦根ニ召サレ井伊直澄ニ仕フ後同志ノ士皆各諸藩ノ招ニ
 應シテ厚ク祿セラレシト云此歲七月昌能卒ス歲四十德雲院殿ト諡ス昌
 能性殘忍嘗テ川狩ニ出デシニ山伏數人上流ニアリテ折離ノ業ヲナシ爲
 ニ河水ヲ白濁セシメシテ憤リ之ヲ捕ヘテ罵テ曰ク修行ノ山伏ハ其血白
 シト予今眞否ヲ試ムベシト終ニ之ヲ斬ル其弟子七人大ニ之ヲ怨恨ス仍
 テ亦之ヲ殺ス故ニ世ニ諱シテ荒大膳ト號ス昌能子ナシ是ヨリ前五島盛
 勝ノ二子小次郎ヲ養フテ子トナス之ヲ昌章トス時ニ歲五延寶九年七月
 鉄砲州ニ中屋敷ヲ賜ハル天和元年十二月從五位下ニ叙シ美作守ニ任セ
 ラル四年正月昌章昌能ノ女兼子ト婚ス貞享二年六月復宇都宮九万石ニ

昌章
 宇都宮九万石

昌春

宮津九万石

中津十万石

領地石高

轉ス四年十月幕命ヲ以テ那須遠江守ノ居城野州鳥山城ル受取テ元錄八
 年四月卒ス歲二十八自性院殿ト諡ス長子熊太郎其前年十一月ヲ以テ生
 ル始テ二歲六月封ヲ嗣ク後加冠シテ昌春ト云十年二月丹後宮津ニ徙封
 シ寶永四年十二月從五位下ニ叙シ大膳太夫ニ任セラル享保元年十二月
 幕府昌春ヲ江戸ニ召ス昌春翌春正月江戸ニ着シ二月舊封ヲ増シテ中津
 十万石ヲ賜ハル聞ク徳川吉宗猶紀州ニアルヤ常ニ曰ク奥平氏ハ徳川家
 ニ功勞アル抄カラス決シテ十万石以下ニアルヘカラスト其宗家ヲ嗣キ
 將軍トナルニ當リ先「政事始」ニ増封ノ恩命アリシモノナリト云
 昌春既ニ入り令ヲ出シテ領内ヲ安シ吏胥及町老村庄ニ謁見ヲ許シテ物ヲ
 賜フ其領國ノ景况左ノ如シ
 一高十万石……………領地高
 一高一万四千六百二十二石余……………古來收出

合計十一万四千六百二十一石余此耕作反別田畑合計六千六百七十七町步
此定免米五万五千石余領内平均免ハ四ツ三分余ニ當ル但豊前

内 高五万四千六百二十一石余 豊前領
高二万五千石余 備後領
高一万七千九百八石余 筑前領

此租税(享保二年歳入)

本藩ノ租税ハ平年五六万石ヲ通常トス
レモ間々二万石ニ足ラサル年モアリシ

一米五万一千五百八十六石余

豊備筑三領分賜成 正租

一米千八百八石

銀十四貫八百目

同上 小物成 雜税

〔田畑高ノ解〕本朝大化ノ時始テ田制租税庸調ノ法ヲ改定シ田長三十步
巾十二步即三百六十步ヲ以テ一反トシ一反ノ獲米平均稻五十束トシ其
租ヲ二束二把トス但稻一束ヨリ白米五舂ヲ得ルトシテ一反ノ收穫米二
石五斗トナル是其地ノ實收也之ヲ段地ノ石盛又斗代分米ト云豊臣氏以
來專高ト唱フ畿内中國西海膏腴ノ地ハ一反平均三石一二斗關東北國ハ

租額

田畑ノ高

二石四五斗也我中津ノ豊前領ハ田上々一石六斗上一石五斗中一石三斗
下一石一斗下々九斗畑上々九斗上八斗中六斗下四斗下々三斗ト定メア
リ而レモ之レ何チ基トシテ斯ク定メタルヤ明ナラズ備後領ハ高上田一
石四斗乃至一石七斗中一石二斗下一石下々田七斗筑前怡土郡ハ元和三
年寺澤志摩守檢地ノ時貢米ハ元ノ儘ニシテ免ヲ從來ノ半額トシ其代リ
ニ高ヲ從來ノ二倍ニセリ故ニ高ハ非常ニ高ク上山ハ三石二斗下田一石
ナリ又豊前鹽濱ノ高ハ上々三石五斗上三石中二石五斗下二石下々一
石五斗ニシテ田地ト同シク土免ヲ有ス此高ニ土免ヲ乘シテ貢租ノ額ヲ
得ル此本租ノ外ニ口鹽、延鹽斗上鹽ト云三種ノ附加租アリテ本租一石ニ
付一石五斗一舂二合之ヲ代金ニ算シテ金納ス即鹽銀之也(土免ノ解)取
米又ハ物成ト云免ノ字ハ許スト云義ニテ石盛ニ何程ユルスト云一也徳
川氏ノ時反取厘取ノ二種アリ反取トハ石盛ノ上下ニ拘ハラス反毎ニ若

七公三民

寄 税

于ト賦課スル法ニテ關東諸國ニ此法ヲ用フル國多カリシ厘取トハ石盛ニカケテ徵收スル法ニテ此法ハ關西諸藩ニ多カリシ即本藩亦此制ヲ採用シテ豊前領ハ七公三民備後領ハ五公五民筑前領ハ六公四民ノ割合ニテ石盛ニ割リ付テ公納セシム案スルニ七公三民ハ細川氏ノ新制ナルカ但往古ヨリ豊前ハカ、ル重租ヲ負フノ先例アルニ由テ細川氏此制ヲ立テシカアレハ蓋細川氏ノ新制ナラシム判然セザレモ兎ニ角非常ノ酷法ニシテ高一石ニ貢米一石或ハ一石以上ヲ納ムル村甚多シ徵令ハ金谷村ノ如キハ本地ノ土免八つ七分春免四つニテ高十九石余ニ貢米二十二石余ヲ出シ外ニ免上リ米請數米等五六種ノ米、麥、銀、ノ附租ヲ出ヌ又島田村ヲ例セハ本地ノ土免六つ九分春免四つ五厘ニテ高五百二十三石余ニ貢米四百七十八石余ヲ出シ外ニ附租ヲ出ヌト前ノ如シ而シテ領内ハ延寶七年ノ内檢地ニテ村々莫大ノ不足高ヲ冠リ居ルガ故ニ實地ハ島田村ノ

モウ作

如キモ高五百二十三石ニ相當スル程ノ田畑ハ之ナキ有様ナレハ若實際ノ有高ニスレハ貢米ノ石數ト其高ノ數ト同一トナリ即前ニ説クガ如ク高一石ニ貢米一石ヲ出スノ割合トナルナラシム實ニ恐ルヘキトニアラズヤ加之文化文政以來加免ハ殆常租ノ如クニシテ年々附加セヨレサルトナク百姓歲ニ困窮シテ地力モ益衰滅シ遂ニ畑ノ如キハ之ヲ耕シテ粟麥ヲ作り以テ米ヲ貢納スルモ得失相償ハサレハ之ヲ無代價ニテ抛棄スルノミナラス酒或ハ金一二兩ヲモ附シテ之ヲ他人ニ讓リ渡ストアリ若村内一人モ其畑ヲ讓受クルモノナケレハ之ヲ村ニ差出ス而ルルハ村ヨリ勤勉強壯ニシテ資力アルモノヲ人選シテ之ヲ耕サシム之ヲ俗ニ「モウ作」ト云稍不作ノ時ハ先中等通常高一石ニ貢米七斗加免ノ歲ハト稱スル永添村ノ如キスヲ貢米ノ不足セサルモノハ村中稀ニシテ當時農間ノ慘狀ハ之ヲ記スルニ一部ノ書ヲ以テスルモ盡ズト能ハサルベシ故ニ只其

一班ヲ記ノ他ハ之ヲ略ス只新開ノ村ハ夫米ヲ免シ且土免モ之ヲ下ケアルカ故ニ例セバ大新田村ノ如キハ村内皆新地ニシテ土免三ツ四分惣高六百十石余ノ貢米三百二十一石余ニシテ田地ハ得田ト稱シテ租稅輕キガ故ニ農民甚幸福也然レヒ斯ノ如キ地ハ悲哉領中五指ヲ掘スルニ足ラサル程ノ少數ナリトス困ニ記ス昔時土地ノ上下ヲ鑑別セシ時ハ眞土ハ土ヲ嘗メテ之ヲ試ミ甘キモノヲ上トシ其色ヲ觀テハ黃氣アルヲ上トシ赤白氣アルヲ中トシ青黑氣アルヲ下トス砂地ハ馬ヲ飛ハシテ馬蹄ノ埋マル深淺ヲ試ミ淺キモノヲ上トスト云ヘリ(定免及春免ノ解)中津ニテ始テ定免ヲ定メシハ細川越中守ノ時寛永五年ヨリ同九年マデ五ヶ年間及小笠原信濃守ノ時寛永十年ヨリ十四年マデ五ヶ年間合計十年間領内各村毎ニ其徵租ノ平均石ヲ以テ其村々ノ定免トセリ故ニ當時此定免ハ頗正當ニシテ各村皆其地味ニ應スルノ租稅ヲ納ムルトナリ居レリ然

定免及春免

如租

レ凡年經テ各村ノ地味ニ肥瘠ヲ生シ假令古來六ツ免ノ村モ其産額今ハ四ツ免ノ村ニモ劣リ又三ツ免ノ村モ土地次第ニ肥ヘテ今ハ四ツ免ノ村ニモ優ルニ至ル是ニ於テ再各村ノ租稅ニ不公平ヲ生スルニ至ル仍テ春免ノ法ヲ制シテ之ヲ防グ春免ハ右ノ理ニヨリテ寛文中岩波源三郎ノ創定セシ新法ニシテ十五ヶ年徵收ノ平均額ヲ以テ其村々ノ土免ノ不平均ヲ救ヒシ也春免トハ毎年春ニ至リ免ヲ解ヘ秋ノ取立ヲ申付クルヨリ起リシコニテ斯ノ如クスレハ百姓作方ニ念ヲ入レテ春免ヨリ多ク作り出ノ其分ヲ已ノ利得トセントスルノ心起リテ自然農事ニ勤勉スルニ至ルモノナリト古書ニ見ヘタリサレバ此法頗良シト雖蓋耕地ハ多年耕耙ノ勞ヲ積ムニ從テ愈々肥沃ニ赴クモノナレバ寛永ノ土免ヲ岩波ノ時改定スレバ必土免ノ價騰上シテ租額ヲ増スニ至リシコ知ルベシ之岩波ノ怨ヲ領内人民ニ求メシ所以歟(畑租ノ解)畑租ハ古來田租ノ半ニシテ文錄

○興平氏

ノ制上畑一步ノ獲米四合此租二合六勺中畑三合三勺此租二合二勺下畑二合六勺此租一合七勺トス元麥納ナリシガ享保十八年米納トナル(宅地租)案スルニ明智光秀京都ノ地子ヲ免ズ豐臣氏之ニ倣ヒ德川氏亦京坂伏見奈良堺江戸ノ地子ヲ免ス諸侯仍テ之ニ倣ヒ各其郭内ノ地租ヲ免ス細川氏中津宅地ノ租ヲ免ス或ハ黒田氏ノ遺制ナル乎小笠原氏ノ時中津市内ヲ除キ領内宅地ニ租ヲ徵ス寶曆ノ初年更ニ之ヲ精丈シ一點余贏アルヲ勿ラシム因ニ記ス興平氏ノ制藩士ニハ郭内ハ勿論郡村ニ在宅セシモノニモ享保二十年定メタル宅制ニヨリテ其定リノ廣ハ繼米ノ法ニテ地子ヲ免シ若其制ヲ超ヘテ宅地ノ廣キモノハ人民ト同シク地高相當ノ稅ヲ徵收セリ(延米ノ解)昔時ハ三百六十歩ヲ以テ一反トセシ故其後三百歩一反ノ時ニ至リ尙以前ノ石高ヲ課スルハ不當ナリトノリヨリ遂ニ每反二割ノ石高ヲ減シタリ而レモ好吏猶延米ト稱シテ一石ニ二割即二

斗ノ加米ヲ徵收セリト云又豐臣氏ノ時榷制古榷ハ即鎗倉小榷ニシテ徑寸五分深改マリテヨリ昔時ノ一斗ハ今ノ一斗二斗ニ當ル故一石ニ二斗ノ延米ヲ課シタリトノ説モアレド甚疑ハシ新庄氏曰ク豐臣公田畝ヲ精丈セシム反地三百六十歩ヲ三百歩ニ變シ六拾歩ノ分租石ニ延チ加フト云之レ甚疑ハシ今之ヲ推スニ豐公ノ遺制タラシニハ天下ニ布クヘケレモ然ラズ此土ノ如キハ細川侯ノ遺制ナルモ亦知ルヘカヲズ豐公其臣二人ヲシテ田畝ヲ精丈ス越中ノ地ニ至リ公ノ薨スルヲ聞キ之ヲ止ムト云乃未タ此土ニ布カサルヲ明也公ノ薨スル慶長三年ニアリ細川侯慶長五年此土ニ移リ翌六年田畝ヲ精丈ストアリ豐公ノ制ヲ受ケ延チ加フルモ亦知ルヘカヲズ租石ニ延チ加フルハ反地ハ三百六十歩ニシテ唯名ノミ三百歩ニ改テ可也然ルニ寛永九年小笠原侯此土ニ移リ延寶七年田畝ヲ精丈ス細川侯精丈ノ年去ル僅ニ七十七八年而シテ當時實地丈量

◎第四編 近世紀

三百歩ニ滿ルナン乃細川侯ノ精丈延畝ナキ知ルベシ按スルニ關東ニ出
目米延米ト云アリ本途一石ニ二斗也元來粉納ヨリ起ルトス粉五斗ヲ
以テ一俵トス量ルニ概斗ナリ余量二割ノ多キニ及フ後米納ニ改メタル
ニ粉二俵ヲ以テ一俵トナスヨリ二割ノ延アリ其延ヲ出目米又ハ延米ノ
名ヲ附セシナリ此土ノ延米ト云恐クハ其類ナルベシ六十歩ノ延畝ヲ以
テ延米ヲ課スルト云附會ノ說ナルヲ知ル可シト〔口米ノ解〕古來代官給
ト傳稱シテ古ハ一石ニ五斗ナリシガ夫米改正ノ時増シテ六斗トス原田
氏曰ク小倉領ニハ口米五斗二の口米一斗トアリ定メテ延米増加ノ時後
ノ一斗ヲ附加セシモノナラント新庄氏曰ク鎌倉府起リテ國ニ守護ヲ置
キ莊園ニ地頭ヲ置キ天下ノ田租石ニ五斗ヲ課シテ守護地頭ノ祿米トス
ト云今ノ口米蓋此ニ出ルカ然レモ天下均一ナラズ畿内中國鎮西總テ石
ニ三斗ナリ此土獨六斗ヲ課ス奥羽ニテ六斗或ハ五斗甲州ハ四斗五合五

口米

夫米

夕各差異アリ其名ハ同フシテ其實ハ異ナリ幕府ニテハ代官ノ費用ニ充
ツ蓋鎌倉ノ舊制ニ倣フモノ乎享保中ヨリ他ニ給用ノ方法ヲ設クト雖猶
口米ハ舊ニ依テ之ヲ徵ス幕府ニ於テ尙然リ況乎諸侯ノ地其區々異制怪
ムニ足ラズ云々ト(夫米ノ解)新庄氏曰ク古ハ城郭修理朝覲ノ用アルニ
當リ悉其民ヲ役ス中古更ニ之ヲ粗石ニ課ス幕府ノ制高百石ニ二斗四五
斗或ハ二斗四五斗ニ過ギズ大抵天下ノ定法タリ此土石ニ四斗七合三夕
三撮ヲ納ム之ヲ算計スルニ高百石土免五つ成トシテ取米五十石之ニ四
斗七合三夕三才ヲ乘スレハ二石三斗六斗六合余トナル之ヲ定法ニ比較
スルニ凡十倍スルナリ或曰ク夫米ハ古ノ庸布ナリ正丁加役三十日ハ布
三端ニ當ル一反ヲ調ニ當テニ端ヲ當時ノ米價ヲ以テ計レハ大抵米三斗
四五斗ナルヘシ然ラハ一人ノ耕田三反ノ石盛七石五斗土免四つ六分五
厘トシテ物成三百四斗八斗七合余庸布一反米一斗六斗五合トシテ石ニ

四坪七合三夕三才トナル故ニ今ノ夫米ハ古ノ庸布ナリ云々夫米四坪七合三夕三才ヲ課スルコト曾テ他邦ニ聞カズ試ニ庸布ヲ算計シ之ヲ粗石ニ課スルトモバ齊シク天下ニ布クヘケレド此土特ニ之ヲ行フ怪ムヘシ或人ノ論亦未詳ナラズ右三項延口、夫米、ヲ三つの口ト云本途一石ニ之ヲ加フ乃一石三斗零七合三夕三才トナル土免ニ右ノ三項ヲ込ルヲ以テ五の成ハ六の五分三厘六毛六五ノ土免トナル三項當時正額ニ入レズ元文ノ初年ヨリ正額ニ入レ終ニ正租トナリヌトサテ以上本米一石ニ延口夫米ヲ加ヘ一石三斗〇七合三勺三才ヲ以テ貢米一石ノ實納額トナス之ヲ正租トス然レ延口夫米ハ其性質免外ノ懸リ物ニシテ正租ニアラズ備筑ノ如キハ之ヲ小物成ノ内ニ置ケリ(四つ高ノ解)新庄氏曰ク寛永十六年小笠原侯家臣ノ俸祿地方ヲ以テ渡スヨリ起リシコトナリ祿高百石ニ付米四十石ヲ渡スヲ法トス之ヲ四つ物成渡ト云之ハ村落ノ土地ニ各肥瘠

四つ高

小物成

アリテ土免差異アルカ故ニ此法ヲ設ケ均一ナラシムルモノ也ト予案スルニ此後延寶六年地方渡止ミテ藏米渡トナリシモ尙高ヨリ貢租ヲ算出スルニハ此平均法ヲ參用セシモノ、如シ(小物成)即雜稅ノコニシテ米銀二種アリ豐前ニテハ請數米田々ニアル山林ノ稅ヲ人民ヨリ請ケ負テ一年稅米一石ニテ請負ヘハ假令其後山林繁衰ノ山數見取米石ノ請數變アルモ依然稅一石ヲ納ムレハ可ナル法ナリ山數見取米石ノ請數水生長スレハ反別ヲ改メテ年々檢査ノ上若定見取米開墾ノ地味未居合干ノ稅ヲ徵ス之レハ寶曆ノ初ヨリ始マレリ定見取米ハサレ地ニハ高シキ年々其定額ヲ納メシム即大繩場也置見取米空地ニ試ミニ作付タル付タレモノニハ年々其額ヲ定メテ云苜畑見取米山間ノ村落ニテ萱山、芝山、蕎麥等ノ裁ヘタルモノモ今津下正路小祝等ノ魚村ヨリ往時ハ領主ノヨリ從收スルノ稅ナリ菜米今津下正路小祝等ノ魚村ヨリ往時ハ領主ノテ之ノ代納セシムルニ至ル而シテ又從來漁人ノ宅地ハ無稅ナリ茶米田ノ畦及空地ニ裁ヘ茶銀茶米ト同一ノ物ニ茶大麥茶米ト同一ニシ竹皮代アル茶園ノ稅也

官林ノ筋ノ皮ヲ願ヒ下ケテ剥綿代昔時養蠶家ヨリ眞綿ヲ納メシメシ
 キ取ル者ヨリ納メシムル也其後代銀ニ代ヘ納メシムル量目百
 匁ニ付銀漆代昔時漆ヲ裁ヘテ納メタル者ヨリ御川漆ヲ納メシムル
 十七匁換漆代ニ代ヘテ納メタル者ヨリ御川漆目十八匁ニ付銀一匁換
 紙代昔時楷ヲ裁ヘ紙ヲ製スル村ヨリ御用紙ヲ納メシムルガ後代價ニシ
 切小紙一束ニ山札運上ノ官有地ノ柴草等ヲ切リ取ルモ他領山札運上ノ他領
 付銀五分換ニ山札運上ノ官有地ノ柴草等ヲ切リ取ルモ他領山札運上ノ他領
 ノ本領内官有地ノ柴草等ヲ切リ取ルモ他領山札運上ノ他領
 ルモノヨリ運上ヲ納メシムルモ取薪札并薪賣札運上ノハ山札運上ノ他領
 運上ニ課スル周圍ニアル竹木鉄砲札運上ヨリ納メシム
 炭賣札運上ニ課スル炭鑄物師炭等ニ別テ鑑札ヲ反別大麥領内水理土功等土
 救助ノ爲ニシテ毎年夏冬よる後大麥ヲ納メシム小笠原時代ニハ之ヲ大
 庄屋ノ手許ニ預リシガ奥平氏ニ及ヒ之ヲ藩倉ニ預ルニ至ル而シテ年々
 右ノ費用ニ充テタル殘品ハ之ヲ賣却シテ反別銀ト稱シ之ヲ家作料牛馬
 代等ト唱ヘテ領内ノ農民ニ貸與シ以テ殖利シ圖ル維新ノ際此金積テ巨
 万ニ至ル而シテ當時現金ハ之ヲ藩帑ニ沒收シ又貸附ケアル處ノモノハ
 之ヲ小倉縣ニ讓リ渡セリ小倉縣ハ爾後此金ヲ負債者ヨリ徵収シテ郡備

金ト稱シ其額凡一万五千圓以上アリ有司當ニ此ヲ以テ當時ノ急務タル
 教育ヲ興サントス然ルニ明治八年比ヨリ宇佐下毛二郡ノ人民此金ヲ下
 附セラレシテ之ヲ下附セリ而シテ此金ハ中間ニテ雲霧消セリト云
 別小麥之ハ孝子義僕貞婦等ノ賞與ニ用フル爲反別大麥ト同シ方法ニテ
 ナラノ從來反別麥ハ本田ノミニ課スレシモ商稅内唐物方ヨリ徵收スル領
 寶曆三年ヨリ新田ニモ課スルニ至レシモ商稅内唐物方ヨリ徵收スル領
 ニシテ尙此外ニ小笠原時代ニハ樹木代屋敷内ノ樹木竹皮運上ノ百姓炎天
 テ被ルコトヲ禁セラル仍請敷運上米請敷年貢米ニ付米一石ノ重稅ヲ徵ス
 粉種利米細川時代ニ粉種ヲ村々ニ貸附ケノ四項アリシガ元祿年間同家
 ノ改革ノ時粉種利米ノ一項ヲ除キ他ハ之ヲ免除セシ如シ元祿十一年九
 代官四人ニ宛テ大庄屋ヨリ上申セル口上書ノ覺ハ書ニ云ク前細川様御
 代辛キ御仕置ニ御座候御檢地ノ時荒野ニ竿御打掛々成候程ノ事故中
 津御領ノ節(小笠原長勝ノ代)地あらし仰セ付ラレ起證文ノ上ニテ竿入
 致シ候處一反三百歩ノ内二百七十八歩ニ足リ申村ハ御領分ニ一村モ無之

村々共ニ不足歟冠リ居申候其外請敷ノ中御國中竹伐リ申ス事嚴シキ御
 法度ニテ家道具等ハ申スニ及バズ馬追フ鞭稻み迄申ス箸女ノ糸ひき申
 スく竹一本ニテモ伐リ中者ハ横目御入置キ見合セ開合セ一類共ニ磔
 ニ御掛ナサレ候ニ付銘々竹敷申受ケ其年貢ハ高一石ニ米一石ヲ納メ候
 其敷ノ中ニ樹木出來候ヘハ公儀ヨリ御買ナサレ候其外畑畔ニ樹木茶園
 仕立候ヘハ樹木代茶園年貢ヲ畑物成ノ外ニ御取ナサレ候何ヨリモ迷惑
 ナルヲハ雨天炎天ニ笠被リ中ス事御法度ニテ背ク者ハ磔ニ相掛ナサレ
 候ニ付別ニ笠代竹皮運上ト名附人別山里共ニ出シ來リ申候箇様ナル事
 迄モ小笠原様御好身ニ付御取立方御引渡成サレ細川家ノ御所務ノ通リ
 此度ノ御引渡ニモ讓リ申候故忽ニ心得候ヲハ渡世如何ニ奉存候云々
 而シテ今日民間老者ノ口碑ニ傳ハル處ヲ聞クニ文化九年一揆前ハ年々
 非常ノ加免ヲ課セラル、ノミナラズ尙此外ニ幾種ノ新稅ヲ賦課セラレ
 遂ニ八頭稅馬頭稅ヲ檢査ス此檢査吏ハ尤人民ニ惡マレ一揆ノ時第一ニ
 其家ヲ毀等ト稱スル古今未聞ノ大苛稅ヲ徵收スルニ至リト云此等ノ苛
 稅ハ一揆後八九種免除セシモ爾後藩幣甚貧乏ニ加免用金等ハ年々逐
 フテ漸ク繁ク且百弊之ニ伴ヒ來リ賄賂公行農民誅求ニ苦メリサテ又備

近時ノ苛稅

加免

古不足高

後領ノ小物成ハ口米、夫米、見取米、茶茺夫米、川運上、山寺米、山敷主付米以上
 商稅、山年貢、數年貢、茶役、大工役、木挽役、鍛冶役、扮屋役、楮役、桶屋役、請山
 運上、雉子運上、御城下夫銀以上金納等ニシテ筑前領ハ口米、夫米、見取米、樹木、
 代船役米以上米納、真綿代、乾鰯運上、川殺生運上、船印運上、商稅以上金納等ナリ而
 シテ此三國小物成ノ惣額ハ平年ニシテ凡米三四千石金二三千兩位ノモ
 ノナリシ(加免)新庄氏曰ク田畑正租ノ外課稅ス豐凶ニヨリ輕重ノ違
 ヒアリ高一石ニ付二三斗ヨリ多キハ七八年ニイタルモアリ小笠原候
 此苛稅ヲ課シ國用ニ備フ元抽免ト云ハズ無心米、上リ米ト云加免トハ
 自然下ヨリ唱ヘ其苛法ヲ惡聲セシモノ也云々ト興平氏ノ時ニ及ヒテ
 ハ豐年ノ時ハ城附四万石ニ付一万俵以下ノ加免ヲナス制ナリ然レモ往
 ケ此制ヲ超フルヲアリシ(古不足高)新庄氏曰ク古不足高ハ總高ノ實地
 田畑ノ毛附高ト照合セズ特ニ高ノミ存スルモノヲ云村落ノ大小ニヨル

ト雖多キハ一村高百石ニ及ブモアリ之ヲ反別ニ折算シ又ハ其取米ノ若干ヲ總高ニ課スルアリ齊シク趣取民害ナリ此乃古ヨリ在來ノ高ト云フ又細川疾精丈ノトキ不足高或ハ荒蕪地ノ高ト云區々ノ説アリ其濫觴ヲ詳ニセス然ト雖荒地ノ高タルヲ推シテ知ルヘシト(古畝今畝新斗代古斗代)新庄氏曰ク延寶七年小笠原疾檢地ヲナセシ反別ヲ今畝新斗代ト云ヒ在來ノ反別ヲ古畝古斗代ト云フ水帳二途ニ出ツルニハ新斗代ノ高ニヨルアリ今畝ノ高ニヨリ延寶檢地ノ際假令ハ古反別上々田一反古斗代一石六斗也之ヲ精丈スルニ現地九畝其次ハ八畝或ハ七畝每區不同悉減畝嘗テ元畝ニ滿ツルモノナシ則其一反ヲ現畝ニ改メ相當ノ高ヲ課スルハ檢地實測ノ法タリ然ルヲ一反ノ中減畝一畝ノ斗代一斗六斗ヲ現地九畝ニ乘シ商即斗代一斗七斗七合八勺ヲ得ル悉ク之ヲ言ハハ一反一石六斗ガ増シ一石七斗七斗七合八勺トナル之ヲ其現高トナセシ也是所謂新

古畝不畝

斗代也上中田モ皆之ニ準ス二畝ノ不足アルモ右算法ニ異ナラス下々田ニ至リ一二畝或ハ三畝ノ余畝アリ元下々田一反斗代九年也余畝一畝ナレハ元高九斗之ヲ現地一反一畝ニテ除スル時ハ八斗一合九勺トナル之ヲ斗代九斗ノ内ヨリ減却スル時ハ殘八斗一斗八合二勺トナル是其地ノ現高也此ノ如ク村落ヲ精細シ増減ヲ平等シテ其村ノ元高ニ引合セ不足分ヲ延寶度檢地不足トシ該村ノ辦シ高トス前項ニ舉ル古不足ト一種特別也編者案スルニ延寶七年岩波氏六尺五寸等ヲ以テ領内ヲ盡ク村々手限ニテ檢地セシメタリシニ各村共ニ莫大ノ畝不足ヲ生シタルガ故ニ下調ノ儘ニテ中止セシガ此時各村共ニ反別ハ不足セシモ從來ノ石高ハ依然トシテ其村内ノ反別ニテ冠リ居ルトナリケレハ前記古不足高ノ外ニ又々空高ヲ冠ルニ至ルヲ細川氏慶長六年ノ檢地ヨリ延寶七年マデハ八十年位ナルニ斯ク反別不足スルハ甚極ムベシ蓋豊臣氏ノ制六尺三寸等ナレバ細川氏六尺六寸等六尺三寸等手ヲ用ヒタリシニ之ヲ延寶ノ時六尺五寸等ニテ丈量セシ故斯ル不足ヲ生セシナラン歟或ハ人心漸ク惰リテ人々力ヲ農ニ盡サス田畑荒レタル故ナル乎因ニ記ス徳川氏ノ制ハ六尺一分竿ナルニ豊前ハ六尺五寸備後領ハ六尺筑前領ハ六尺五分

竿ヲ用ヒ又與平氏寛政九年ニ六尺二寸竿ニテ中津市街ヲ丈量セゾトセ
 シテアリシガ如キハ如何ナル理山アルニ由テ斯ル區々ノ制ヲ立テシヤ
 明ナズノ如ク減地ヲ除クヘキニ加ヘ却テ余地ノ課スベキヲ減スル等冥
 ヲ深々之ヲ何トカ謂ハソ抑寛永ノ比檢見法ヲ廢止シ定免ニ更ムルヨリ
 起ルコナラソ乎上々田ト下々田ト高其差相半ス下々田較苛シ乃之ヲ上
 田ニ増シ下田ニ減シ以テ其鈞ヲ取リタルモノ乎今現地ニ就キ之ヲ檢ス
 ルニ上田延畝ナク下田余畝多シ從來斯ノ如キ不公平ハ之ナキ筈然レモ
 上中下ノ差異自鈞ヲ術中ニ行ヒシナルヘント(檢見法)凶作ニテ産額定
 免ニ足ラサル村ハ村内協議シテ檢見ヲ出願スレハ藩廳吏ヲ派遣シテ其
 村ノ田面若干處ニ就キ坪刈シテ其収量ヲ檢シ果シテ定免不足スレハ古
 不足高及池成、川欠崩入、畑方、ノ分ヲ免歸ス然レモ檢見ヲ請フ時ハ實際
 非常ノ大費ヲ要シテ得失相償ハサルノ傾アルモノナレハ之ヲ出願スル
 一甚稀也 隣地幕領ハ我ト反對ニシテ租稅輕キガ上ニ普通ノ歲ハ必毎年
 檢見ヲ出願シ而シテ檢見前少カノ賂ヲ用ヒテ檢吏ヲ籠絡シ受

檢見

用捨引米

繼米

郡中出

檢ノ田面ヲ傾之ヲ定メテ其立徳ヲ非藩府ノ非理モ極マレル哉(用捨引米)
 常ニ手ニテ將キ取リ以テ租額ヲ減ス藩府ノ非理モ極マレル哉(用捨引米)
 不毛地惡地等ノ物成米ハ年季ヲ限リテ之ヲ用捨ス又差紙引トテ水侵、旱
 損、難村救助引、等一年限ノ用捨モアリシ(繼米)前項用捨引米ト大同小異
 ニシテ川欠、池溝、道成、等潰れ地ノ物成米ヲ永久ニ用捨スルヲ云而レモ此
 等潰れ地ノ持テル高ノミハ依然据ヘ置キテ其村冠リ高トナシ加免等ソ
 加キ高ニ應シテ賦課スル諸稅ハ皆村中辨ジトナリ居レリ(郡中出組出、
 村出)恰モ明治時代ノ地方稅協議費ノ如キモノニテ郡中公用ニ關スル道
 路堤防ノ費ハ郡中ヨリ出サシメ組中ノ共有ニ關スル池溝津梁ノ費ハ其
 組中ニ賦課スルモノヲ云也又村出ノ中ニハ定出不定出ノ二種アリ即大
 庄屋給及村吏ノ役給ノ如キハ定出ニシテ土木祭典等ノ費ハ不定出ナリ
 此不定出ハ一定ノ制額ナキモノナレハ庄屋ナドノ曲事ヲナスハ多ク此
 ニアリ然レモ之ハ吟味役ニテ檢察スルノ仕組ナリシ而シテ此村出中土

木事業ニハ種々ノ方法ヲ設テアレリ即「組加勢」トテ假ヘハ高五百石ヲ持ツ村ニテハ一年ニ付人夫五百人役以上ヲ使役シテ土木ヲ營ムコトヲ得サル制夫百人役ノ制ナレハ若此村ニシテ堤防等大破ノ歳之ヲ營修スルニ千人ノ夫ヲ要スル時ハ其組中各村ヲ假令ハ永添村ガ今津組ナヨリ三百人役加勢シ又官府ヨリ「御用夫」ト云モノ二百人役ハ加勢スル官ヨリル法ハ人夫一人役ニ米五合ヲ給スル也然レモ米五合ニテハ人夫ノ賃銀過廉ナルガ故尙此上ニ組中ヨリノ費用ニテ一人役ニ二升宛彼五合ノ上ニ増シテ興フガ如キ法ナリシ又難村ニテ必要ナル土木工事ノ修作ヲ營ムコト能ハサル村ニハ官府ヨリ「日雇夫」トテ其村ノ人民ヲ人夫ニ使役シ之ニ相當ノ賃銀ヲ與ヘテ其土木ヲ營ミ得セシム又凶年ノ春ナトニテ必要ナル土木工事ヲ營ムノ力モナク又貧民雇稼モナクシテ糊口ニ苦ム際等ニハ「夫銀取替」ト云法アリテ官府ヨリ金ヲ其村ニ貸附シテ其村ノ人民ヲ人夫ニ役シ以テ其土木工事ヲ營マシメ而シテ官府ヨリ借リタル金

ハ秋ニ至リテ米ヲ納メテ之ヲ償フノ制トス此法ハ一ハ必要ナル土木ヲ營マシメ一ハ貧民救助ノ一法トナルモノナレハ頗良法ト謂フヘキ也
 一領地ハ下毛郡蠣瀬組十六村。但奥平氏受取ノ蠣瀬。東濱。大新田。大塚。中殿。藍原。萱津。万田。一ツ橋。島田。牛神。湯屋。高瀬。中津山。高畑。金谷村。ヲ含ム。角木。宮永。上池永。上下及。今津組二十一村。大悟法。中原。助部。全徳。是則。田尻。諸田。福島。北原。伊藤田。上。犬丸。赤迫。永添。定留。合馬。加來。大貞。上植野。下植野。鍋島。野依。今津。平田組。後曾木組十一村。多志田。曾木。平田。冠石野。三尾母。小友田。東屋形。西屋形。今行。下屋形。樋田。津民組三村。津民。大野。川原口。中。榎木。柿坂。上毛郡唐原組。後中十九村。原井。百富。上唐原。下唐原。垂水。上。幸子。廣津。小犬連島。古表新。今吉。楡生。鈴熊。吉岡。宇野。八並。中村。土屋垣。直江。別府。大の瀬。田ヲ含ム。東土佐井。宇佐郡赤尾組。後大根川組十一村。高村。上。敷田。下。宮熊。大根川。庄。村。上。清水。佐野。尾永井。富永。赤尾。今仁。及山下村ノ内。今井村ノ内。六組

ヲ城附四。下毛郡佐知組。後深十村。諫山。上原口。佐知。田口。東小袋。成恒。土田。万石。云。上木。森山。明治四年ノ調ニヨレハ下毛郡中津領七十四村ノ高三万深水。下白木。四千余石。又本郡中以五組ノ外ナル山國二十一村ハ幕府領ニテ後嚴原藩支配トナル此高二万石余又小笠原加賀。宇佐郡惠良守領秣三村ハ後四日市縣ノ支配トナル此高一千七百石余。津房組廿三村。此四組二十八村。香下組十三村。松木組。後板不詳。但後二十。津房組廿三村。此四組ノ村名ハ賦均録ニハ各組管轄ノ村數(興平氏受取ノ時)ハ以上ノ如ク撞着シオレヒ宇佐郡八十四村ノ方實地ニ和山。羽馬禮臺。來鉢。山。平。西推近シ即赤尾組十一村ヲ除ケハ下ノ如シ。上納持。平原。大坪。岡。栗山。小平。屋土岩屋。萩迫。上西惠良。下西惠良。余リ。下。上。納持。平原。大坪。岡。栗山。小平。瀧真。番木。村部。佛木。境の坪。川底。新貝。船坂。平山。落狩倉。副。上。大副。高並。小稻。大重見。上船木。下。御沓。二日市。櫛野。廣瀬。小坂。沖。北山。香下。拜田。上船木。小野。河内。灘。岳首。野山。大村。廣連。上之畑。矢上。水車。疊石。山之口。矢部。上。大塚。山本。鳥越。森。野山。大村。袖屋敷。西光寺。富貴野。元村。内河野。上。今井。釜の口。有徳原。松木。川崎。板場。萱籠。東椎屋。若林。五郎寒水。内河野。下。今井。釜の口。有徳原。松木。川崎。板場。萱籠。東椎屋。若林。五郎

人口

牛馬數

社寺

菩提寺

九。六郎丸。尾立。東惠良。檜本。上塔尾。大見尾。矢津。口之坪。廣谷。笹ヶ平。古河。大口田。妻垣。新原。庄村。上庄。備後領小畑組。安那郡二村。神永野組。神石郡六五油木組。甲怒郡。筑前領怡土郡。淀川組十六村。神在組十三村。一領内人口七万九千七百四十八。男四万二千四十八。女三万六千八百六十四。内二十七人。山伏七十二人。社人及社僧七百八十人。跡役者二百五十八人。穢多七十四人。非人。一領内馬數三千六十三頭。内。豐前領二千五百四十頭。但宇佐郡ハ牛頭馬數ニ牛頭ノ多寡ヲ知ルベク。又。○領内牛數四千七百三十一頭。内。豐前領二千六百農業ノ變遷ヲ知ルヘシ。○領内牛數四千七百三十一頭。内。豐前領二千六百領ハ牛頭甚多シ(以上二項當國元錄ニヨル)。一領内寺數百二十九社。數七百五十九。古城跡二十五。古跡六。内中津町。人口男二千二百三十八。女千九百八十三人。戶數千六百六十二。社司三人。山伏九人。寺數二十九。一興平家菩提所六箇寺。新魚町自性寺。元万松寺。ト云シガ延享二年今ノ名ニ改ム寺。領百石寺。町松岩寺。ハ寺領五拾石。角木町。養

壽寺ハ三人扶持下小路安全寺ハ是心妙光兩院ノ墓處ニシテ菩提寺
 ニアララス城内ノ觀音院ハ五十石而シテ江戸ハ品川ノ清光院ナリ
 〔奥平藩政府ノ組織〕本藩政府ノ組織ヲ記スルニ當リテハ先藩士ノ組織ヨ
 リ説キ初メサルヘカラス抑士族ハ大別ノ之ヲ上下二等トシ又別テ五等ト
 シ更ニ之ヲ小別スレハ數十階トナスヘシサテ上中等中ノ最高等ヲ大身ト云
 其數十三戸 此戸數ハ嘉永五年六月改正ノ家皆往時宗家ノ分家及大功臣ノ
 末葉ニテ祿知多キハ二千六百石少キモ七八百石ヲ下ラズ 知行ニハ地方概
 等アリテ地方概ハ正味ノ取米稍多ク藏米渡ハ最少ナキ割合ナレハ通常其
 祿高百石ニ付四斗二升入百六七俵位ヨリ八十一俵位ナリト知ルヘシ
 權勢一藩ヲ冠シ此家格ヨリ順次交代ノ家老及隊長ヲ勤ム而シテ後年大身並
 一戸及寄合格二戸ノ二格ヲ作り特ニ功臣ヲ優遇セシモ此二格ハ用人ニ上
 アリ迄ニテ家老ニ任セラル、コナシ此大身大身並寄合格ヲ以上ノ三格ト云
 享和二年三月マテ大身並ノ上席ニ大身其次ニ又三格アリ俗ニ平士ト稱ス
 格一戸アリシモ其家斷絶ノ後此格ナシ 其次ニ又三格アリ俗ニ平士ト稱ス
 スル家ニシテ供番百五十家中四十小性八十トス供番ハ昔時江戸參勤等ノ

藩士ノ組織

ガ故特ニ二百石以上ノモノヲ以テ小祿ノモノハ自然其任ニ堪ヘサル
 始テ起ル後旅費ノ制定マルユ及ヒ供番中ニ二百石以下ノ者モ生シ尙其權
 威大身ニ次クモノニシテ家中小性ハ如何ニ立身シテモ諸奉行ヨリ目附元
 メニ上ルマテナレハ供番ノモノハ奉行目附元等ヨリ進テ用人ニ上ル
 ヲ得ル且足輕ノ物頭ハ專此格中百五十石以上ノ家ヨリ勤ム 但百石ノ者
 勤メタル例 又家中小性ハ大身ヨリ娶ルヲ得レハ其子女チ大身ニ嫁スルチ
 モアリ 又供番ハ自由ニ大身ト婚嫁ス其他家中小性ハ「うちつけ袴」ニ天鶴
 絨ノ小縁ヲ付シルノミナレハ供番ハ大身ト同ク大縁ヲ附ケ又長袴ヲ穿ッ
 チ得ルガ如ク三格中亦種々ノ差違アリ其祿ハ五六十石ヨリ四五百石ノ間
 ナレハ二三百石ノモノ最多シ以上ノ六格ヲ上士ト云此下ニ儒者戸醫師十
 九祐筆徒士ノ家ヨリ勤ムル役格ノ三格アリテ其待遇ハ儒醫ハ上士ニ準シ
 戸祐筆ナレハ別ニ數ヲ上ケス 但公ニテハ上士ニ準シ 其祿ハ儒醫ハ亦上士ト同シク祐筆
 祐筆ハ下士ニ準スル等ノ例ナレハ